

【表紙】

【提出書類】 有価証券報告書

【根拠条文】 金融商品取引法第24条第1項

【提出先】 関東財務局長

【提出日】 2023年6月26日

【事業年度】 第31期(自 2022年4月1日 至 2023年3月31日)

【会社名】 株式会社インプレスホールディングス

【英訳名】 Impress Holdings, Inc.

【代表者の役職氏名】 代表取締役社長 松本 大輔

【本店の所在の場所】 東京都千代田区神田神保町一丁目105番地

【電話番号】 03-6837-5000(代表)

【事務連絡者氏名】 取締役副社長 山手 章弘

【最寄りの連絡場所】 東京都千代田区神田神保町一丁目105番地

【電話番号】 03-6837-5000(代表)

【事務連絡者氏名】 取締役副社長 山手 章弘

【縦覧に供する場所】 株式会社東京証券取引所
(東京都中央区日本橋兜町2番1号)

第一部 【企業情報】

第1 【企業の概況】

1 【主要な経営指標等の推移】

(1) 連結経営指標等

回次	第27期	第28期	第29期	第30期	第31期
決算年月	2019年3月	2020年3月	2021年3月	2022年3月	2023年3月
売上高 (千円)	12,837,458	13,507,129	13,850,416	14,778,761	15,161,147
経常利益 (千円)	291,994	521,871	931,480	941,550	494,410
親会社株主に帰属する 当期純利益 (千円)	474,343	374,906	676,314	875,972	375,854
包括利益 (千円)	180,488	301,175	665,631	842,667	403,324
純資産額 (千円)	7,690,653	7,887,755	8,531,075	9,233,943	9,654,121
総資産額 (千円)	12,551,751	13,086,400	14,441,660	15,732,870	15,944,417
1株当たり純資産額 (円)	233.02	239.07	254.99	275.81	280.98
1株当たり 当期純利益金額 (円)	14.25	11.36	20.31	26.19	11.15
潜在株式調整後 1株当たり当期 純利益金額 (円)	-	-	-	-	-
自己資本比率 (%)	61.3	60.3	59.0	58.7	59.6
自己資本利益率 (%)	6.2	4.8	8.2	9.9	4.0
株価収益率 (倍)	10.7	11.4	12.2	8.4	18.8
営業活動による キャッシュ・フロー (千円)	50,895	1,050,745	1,330,260	58,225	58,836
投資活動による キャッシュ・フロー (千円)	242,380	169,908	482,355	369,662	70,335
財務活動による キャッシュ・フロー (千円)	418,290	137,015	20,685	259,523	204,068
現金及び現金同等物の 期末残高 (千円)	4,312,452	5,051,529	6,884,107	6,316,829	5,983,589
従業員数 (人)	542	567	577	647	689

(注) 1. 第27期から第31期までの潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額については、潜在株式が存在しないため記載しておりません。

2. 「収益認識に関する会計基準」(企業会計基準第29号 2020年3月31日)等を第30期の期首から適用しており、第29期に係る主要な経営指標等については、当該会計基準等を遡って適用した後の指標等となっております。

3. アルバイト(臨時従業員)については、従業員の100分の10未満であるため、記載を省略しております。

(2) 提出会社の経営指標等

回次	第27期	第28期	第29期	第30期	第31期
決算年月	2019年3月	2020年3月	2021年3月	2022年3月	2023年3月
営業収益 (千円)	483,581	663,305	871,653	1,137,781	1,686,641
経常利益又は 経常損失() (千円)	113,188	46,308	15,436	146,750	203,762
当期純利益 (千円)	126,066	110,246	136,603	330,173	452,775
資本金 (千円)	5,341,021	5,341,021	5,341,021	5,341,021	5,341,021
発行済株式総数 (株)	37,371,500	37,371,500	37,371,500	37,371,500	37,371,500
純資産額 (千円)	6,752,695	6,679,769	6,780,673	6,982,003	7,298,046
総資産額 (千円)	8,615,912	9,218,338	10,433,149	11,679,267	10,824,652
1株当たり純資産額 (円)	204.64	202.45	202.78	208.69	215.72
1株当たり配当額 (うち1株当たり中間配当額) (円)	3.00 (-)	2.50 (-)	4.00 (-)	6.50 (-)	5.00 (-)
1株当たり当期純利益金額 (円)	3.79	3.34	4.10	9.87	13.43
潜在株式調整後 1株当たり当期純利益金額 (円)	-	-	-	-	-
自己資本比率 (%)	78.4	72.5	65.0	59.8	67.4
自己資本利益率 (%)	1.8	1.6	2.0	4.8	6.3
株価収益率 (倍)	40.4	38.6	60.2	22.3	15.6
配当性向 (%)	79.2	74.8	97.5	65.9	37.2
従業員数 (人)	14	17	14	15	44
株主総利回り (比較指標：配当込みTOPIX) (%)	69.3 (95.0)	59.8 (85.9)	114.0 (122.1)	104.9 (124.6)	102.7 (131.8)
最高株価 (円)	230	208	275	314	229
最低株価 (円)	116	107	119	193	198

(注) 1. 第27期から第31期までの潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額については、潜在株式が存在しないため記載しておりません。

2. アルバイト(臨時従業員)が従業員の100分の10未満であるため、記載を省略しております。

3. 最高株価及び最低株価は、2022年4月3日以前は東京証券取引所市場第一部におけるものであり、2022年4月4日以降は東京証券取引所スタンダード市場におけるものであります。

2 【沿革】

年月	事項
1992年1月	創業者塚本慶一郎が、(株)ラジオ技術社に資本参加。
1992年4月	IT関連誌の出版を目的として(株)インプレスを東京都港区南青山六丁目1番32号に設立。
1992年6月	創業者塚本慶一郎が、(株)リットーミュージックに資本参加。
1992年7月	創業者塚本慶一郎が、(株)エムディエヌコーポレーションに資本参加。
1993年3月	パソコン関連誌「ドスブイパワーレポート」創刊。
1993年10月	(株)ラジオ技術社から(株)インプレス販売に商号を変更。
1994年3月	パソコン入門者向け解説書籍、できるシリーズ第一号「できるExcel 5.0 Windows対応」発行。
1994年9月	インターネット情報誌「インターネットマガジン」創刊。
1995年8月	オンライン直販サイト「インプレスダイレクト」開設。(株)インプレス販売)
1996年2月	創業者塚本慶一郎が、(株)インプレス、(株)リットーミュージックの広告営業部門を分社化し、「(株)インプレスエイアンドディ」を設立。
1996年2月	電子メールを利用したインターネット関連の情報配信サービス「impress Watch」の第一号として「INTERNET Watch」を創刊。
1997年11月	本店を東京都港区南青山四丁目17番49号に移転。
1998年1月	インプレスダイレクトにてグループ外商品のオンライン販売に着手。(株)インプレス販売)
1999年9月	(株)インプレス販売の全株式を取得し完全子会社化。
1999年10月	本店を東京都千代田区三番町20番地に移転。
1999年12月	株式交換により(株)リットーミュージック、(株)エムディエヌコーポレーション、(株)インプレスエイアンドディの全株式を取得し完全子会社化。(株)インプレスを事業持株会社としたグループ運営をスタート。
2000年4月	(株)インプレス販売を存続会社として、(株)インプレスエイアンドディと(株)インプレス販売を対等合併、(株)インプレスコミュニケーションズに商号を変更。
2000年10月	東京証券取引所 市場第一部上場
2004年5月	コンピュータサイエンス及び数学・電子工学分野の専門出版を行う(株)近代科学社の全株式を取得。
2004年10月	会社分割により(株)インプレスを新設し、同社に出版メディア事業・デジタルメディア事業等の全部を承継、当社はこの会社分割を機に商号を(株)インプレスホールディングスに変更のうえ純粋持株会社となる。
2005年10月	(株)インプレスから会社分割により、同社のデジタルメディア事業等の一部を承継した「(株)Impress Watch」を設立。
2006年2月	デジタルコミック配信におけるITコンサルティング及びソリューション事業に着手するため、(株)Impress Comic Engineを設立。
2006年4月	(株)インプレスから会社分割により、同社の事業の一部を承継した「(株)インプレスR&D」を設立。(株)インプレスは商号を(株)インプレスジャパンに変更。
2006年11月	山岳・自然分野の専門出版を行う(株)山と溪谷社の株式を取得し子会社化。
2008年7月	(株)インプレスR&Dから会社分割により、同社の事業の一部を承継した「(株)インプレスR&D」を設立。(株)インプレスR&Dは商号を(株)インプレスビジネスメディアに変更。
2011年5月	新規事業開発、既存事業の活性化及びR & D等に注力することを目的とし、Impress Business Development(同)を設立。
2011年10月	(株)Impress Comic Engineが商号を(株)ICEへと変更。
2013年10月	アジア市場向け事業の日本国内拠点として(株)IADを設立。
2014年7月	当社及び(株)インプレスコミュニケーションズによる共同新設分割により、(株)Impress Professional Worksを設立。 (株)インプレスジャパンを存続会社として、(株)Impress Watch、(株)インプレスビジネスメディア及び(株)インプレスコミュニケーションズを合併し、商号を(株)インプレスへ変更。
2014年11月	本店を東京都千代田区神田神保町一丁目105番地に移転。
2015年8月	モバイルセグメントの(株)ICEと(株)デジタルディレクターズが合併し、(株)ICEが存続会社となる。
2017年4月	関連会社であった(株)クリエイターズギルドの株式を追加取得し子会社化。
2018年4月	非連結子会社であった(株)天夢人の株式を追加取得し100%子会社とし、連結の範囲に含める。
2020年7月	グループのデジタルマーケティングを強化するため(株)iDMPを設立し、連結の範囲に含める。
2021年8月	航空・鉄道分野の専門出版を行うイカロス出版(株)の株式を取得し子会社化

年月	事項
2022年4月	当社の100%子会社である(株)インプレスR&Dと(株)メディアドゥを新設分割会社とし、(株)PUBFUNを新設分割設立会社とする共同新設分割を行い、(株)PUBFUNが発行する株式の51%を取得し連結の範囲に含める。
2022年4月	東京証券取引所の市場区分の見直しにより市場第一部からスタンダード市場へ移行。
2022年7月	(株)Impress Professional Worksの組織再編に伴い、(株)Impress Professional Worksが担う当社グループの経営管理機能を当社へ承継する吸収分割を実施し、商号を(株)IPGネットワークに変更。
2022年9月	非連結子会社であった(株)シフカの株式を追加取得し100%子会社とし、連結の範囲に含める。
2023年2月	(株)インプレスと(株)インプレスR&Dが合併し、(株)インプレスが存続会社となる。

3 【事業の内容】

当連結会計年度において、当社グループ(当社及び当社の関係会社)が営む事業の内容について、事業セグメント区分及び主要な関係会社の異動は以下のとおりであります。

(株)PUBFUNは、2022年4月に(株)インプレスR&Dと(株)メディアドゥを新設分割会社とした共同新設分割にて設立し、株式の51%を取得したことに伴い、当連結会計年度から連結の範囲に含めております。

(株)シフカは、2022年9月に株式の追加取得を行い完全子会社となり、重要性が増したことに伴い、当連結会計年度から連結の範囲に含めております。

(株)インプレスR&Dは、2023年2月に(株)インプレスに吸収合併されたことに伴い、連結の範囲から除外しております。

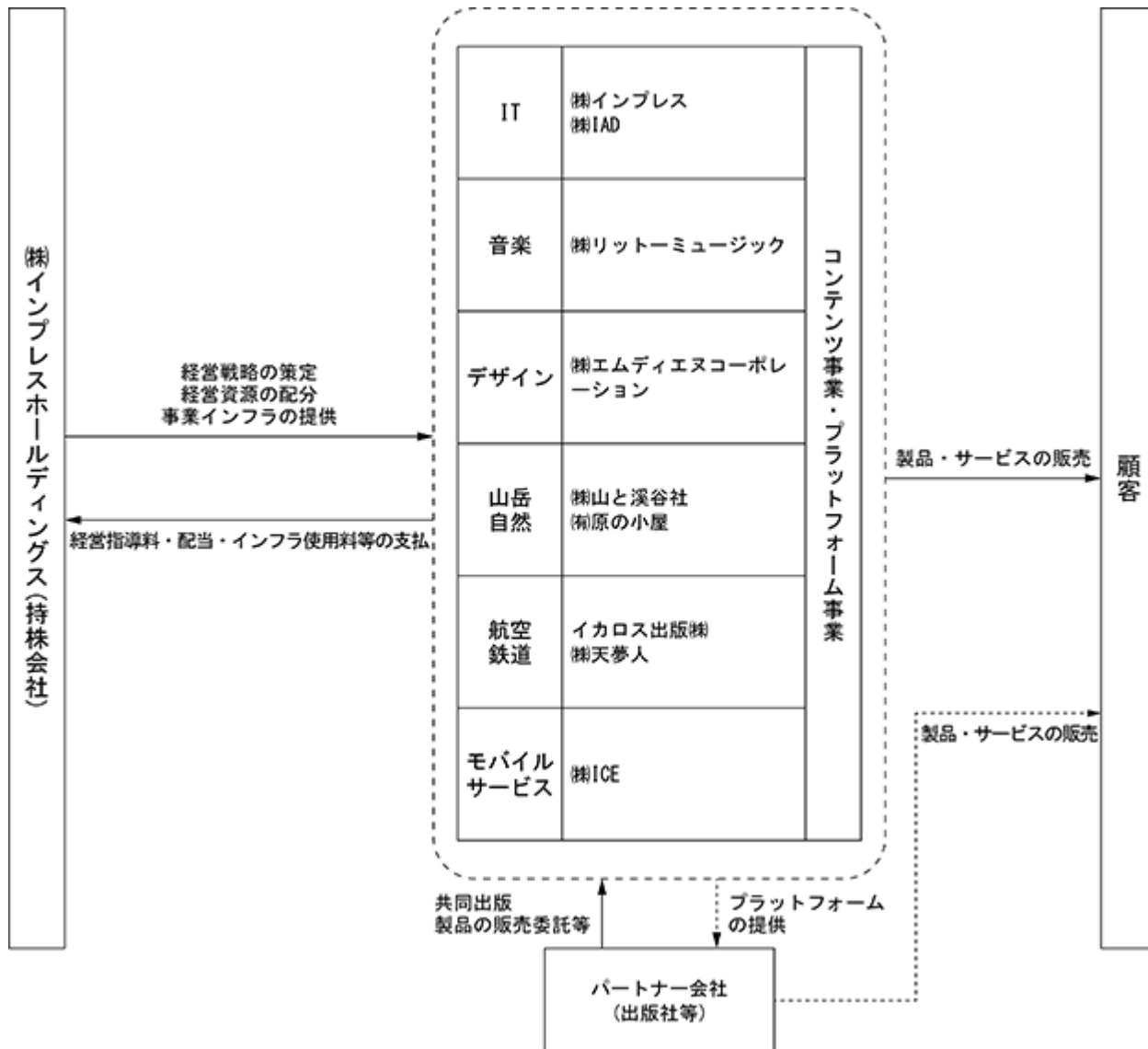
(株)Impress Professional Worksは称号を(株)IPGネットワークに改め、グループ共通の事業基盤(ビジネス・プラットフォーム)の構築・運営及び新規プラットフォーム事業の開発に特化した会社へ再編してあります。

また、当社は、有価証券の取引等の規制に関する内閣府令第49条第2項に規定する特定上場会社等に該当し、インサイダー取引規制の重要事実の軽微基準については連結ベースの数値に基づいて判断することになります。

事業セグメント区分	主要な事業区分		主要な事業内容	主要な会社
IT (IT分野に関するコンテンツ事業及びプラットフォーム事業)	コンテンツ事業	メディア & サービス	出版・電子出版、ネットメディア・サービス、ターゲットメディア等	(株)インプレス (株)IAD
		ソリューション	企業・自治体向けSP・PRツール及びWebサイト等の受託制作	
	プラットフォーム事業		出版流通プラットフォームの開発・運営等	
音楽 (音楽分野に関するコンテンツ事業及びプラットフォーム事業)	コンテンツ事業	メディア & サービス	出版・電子出版、ネットメディア・サービス等	(株)リットーミュージック
		ソリューション	企業・自治体向けSP・PRツール及びWebサイト等の受託制作	
	プラットフォーム事業		ECプラットフォーム・出版流通プラットフォームの開発・運営等	
デザイン (デザイン分野に関するコンテンツ事業)	コンテンツ事業	メディア & サービス	出版・電子出版、ネットメディア・サービス等	(株)エムディエヌコーポレーション
山岳・自然 (山岳・自然分野に関するコンテンツ事業)	コンテンツ事業	メディア & サービス	出版・電子出版、ネットメディア・サービス等	(株)山と溪谷社 (有)原の小屋
		ソリューション	企業・自治体向けSP・PRツール及びWebサイト等の受託制作、宿泊サービスの提供	
航空・鉄道 (航空・鉄道分野に関するコンテンツ事業)	コンテンツ事業	メディア & サービス	出版・電子出版、ネットメディア・サービス等	イカロス出版(株) (株)天夢人
		ソリューション	パートワーク等の受託制作	
モバイルサービス (モバイル関連のコンテンツ事業及びプラットフォーム事業)	コンテンツ事業	メディア & サービス	電子出版、ネットメディア・サービス等	(株)ICE
		ソリューション	電子書籍ファイルの受託制作	
	プラットフォーム事業		電子コミックプラットフォームの開発・運営等	
その他			出版・電子出版、企業・自治体向けSP・PRツール及びWebサイト等の受託制作、ECプラットフォーム・出版流通プラットフォームの開発・運営、グループ各社の出版物流・販売管理等	(株)近代科学社 (株)PUBFUN (株)クリエイターズギルド (株)シフカ (株)IDMP (株)IPGネットワーク Impress Business Development(同)
全社			グループ経営・財務戦略の策定 グループ各社の経営管理	(株)インプレスホールディングス(当社)

以上の事項を事業系統図によって示すと次のとおりであります。

<事業系統図>



4 【関係会社の状況】

< 関係会社の状況 >

名称	住所	資本金 (千円)	主要な事業の 内容(注1)	議決権の 所有割合 (%)	関係内容
(連結子会社) ㈱インプレス	東京都千代田区	90,000	IT	100.00	役員等の兼任あり
㈱IAD	東京都千代田区	30,000	IT	100.00	役員等の兼任あり
㈱リットーミュージック	東京都千代田区	100,000	音楽	100.00	役員等の兼任あり
㈱エムディエヌコーポレーション	東京都千代田区	50,000	デザイン	100.00	役員等の兼任あり
㈱山と溪谷社	東京都千代田区	97,500	山岳・自然	100.00	役員等の兼任あり
(有原の小屋)	福島県南会津郡	10,500	山岳・自然	100.00	-
イカロス出版㈱	東京都千代田区	16,000	航空・鉄道	100.00	役員等の兼任あり
㈱天夢人	東京都千代田区	30,000	航空・鉄道	100.00	役員等の兼任あり
㈱ICE	東京都千代田区	100,000	モバイル サービス	100.00	役員等の兼任あり
㈱近代科学社	東京都千代田区	20,000	その他	100.00	役員等の兼任あり
㈱PUBFUN	東京都千代田区	10,000	その他	51.00	役員等の兼任あり
㈱クリエイターズギルド	東京都千代田区	80,700	その他	100.00	役員等の兼任あり
㈱シフカ	東京都千代田区	10,000	その他	100.00	役員等の兼任あり
㈱iDMP	東京都千代田区	10,000	その他	100.00	役員等の兼任あり
Impress Business Development(同)	東京都千代田区	10,000	その他	100.00	代表社員の兼任あり
㈱IPGネットワーク	東京都千代田区	30,000	その他	100.00	役員等の兼任あり
(持分法適用関連会社) ㈱編集工学研究所	東京都世田谷区	75,005	その他	48.19	-
㈱ファンギルド	東京都千代田区	50,000	その他	28.04	役員等の兼任あり

(注) 1. 主要な事業の内容欄には、セグメントの名称を記載しております。

2. ㈱インプレスについては、売上高(連結会社相互間の内部売上高を除く)の連結売上高に占める割合が10%を超えていますが、セグメント情報における「IT」の売上高に占める当該連結子会社の売上高(セグメント間の内部売上高又は振替高を含む)の割合が100分の90を超えるため、主要な損益情報等の記載を省略しております。
3. ㈱リットーミュージックについては、売上高(連結会社相互間の内部売上高を除く)の連結売上高に占める割合が10%を超えていますが、セグメント情報における「音楽」の売上高に占める当該連結子会社の売上高(セグメント間の内部売上高又は振替高を含む)の割合が100分の90を超えるため、主要な損益情報等の記載を省略しております。
4. ㈱山と溪谷社については、売上高(連結会社相互間の内部売上高を除く)の連結売上高に占める割合が10%を超えていますが、セグメント情報における「山岳・自然」の売上高に占める当該連結子会社の売上高(セグメント間の内部売上高又は振替高を含む)の割合が100分の90を超えるため、主要な損益情報等の記載を省略しております。
5. ㈱ICEについては、売上高(連結会社相互間の内部売上高を除く)の連結売上高に占める割合が10%を超えていますが、セグメント情報における「モバイルサービス」の売上高に占める当該連結子会社の売上高(セグメント間の内部売上高又は振替高を含む)の割合が100分の90を超えるため、主要な損益情報等の記載を省略しております。

5 【従業員の状況】

(1) 連結会社の状況

2023年3月31日現在

セグメントの名称	従業員数(人)
IT	241
音楽	91
デザイン	39
山岳・自然	70
航空・鉄道	74
モバイルサービス	72
その他	58
全社(共通)	44
合計	689

(注) 1. 従業員数は就業人員であります。

2. 全社(共通)として記載されている従業員数は、特定のセグメントに区分できない管理部門等に所属している人員数であります。

(2) 提出会社の状況

2023年3月31日現在

従業員数(人)	平均年齢(才)	平均勤続年数(年)	平均年間給与(円)
44	44.4	9.9	6,908,202

セグメントの名称	従業員数(人)
全社(共通)	44

(注) 1. 従業員数は就業人員であります。

2. 平均年間給与は、賞与及び基準外賃金を含んでおります。

3. 全社(共通)として記載されている従業員数は、特定のセグメントに区分できない管理部門等に所属している人員数であります。

4. 前事業年度末に比べ従業員数が29名増加しておりますが、主として2022年7月1日付で、(株)Impress Professional Worksの吸収分割により当社グループの経営管理機能を当社へ承継したことによるものであります。

(3) 労働組合の状況

当社グループにおいては、国内連結子会社1社で労働組合が組織されております。なお、労使関係は円満に推移しております。

(4) 管理職に占める女性従業員の割合、男性従業員の育児休業取得率及び従業員の男女の賃金の差異

連結会社

当連結会計年度				
管理職に占める 女性従業員 の割合(%) (注2、4)	男性従業員の 育児休業 取得率(%) (注3)	従業員の男女の賃金の差異(%)		
		全従業員	うち、 正規雇用従業員	うち、 臨時雇用者
20.1	25.0	78.4	79.5	90.1

- (注) 1. 「連結財務諸表の用語、様式及び作成方法に関する規則」(昭和51年大蔵省令第28号)第2条第5号に規定されている連結会社を対象としております。
2. 「女性の職業生活における活躍の推進に関する法律」(平成27年法律第64号)の規定に基づき算出したものであります。
3. 「育児休業、介護休業等育児又は家族介護を行う労働者の福祉に関する法律」(平成3年法律第76号)の規定に基づき、「育児休業、介護休業等育児又は家族介護を行う労働者の福祉に関する法律施行規則」(平成3年労働省令第25号)第71条の4第1号における育児休業等の取得割合を算出したものであります。
4. 管理職に占める女性従業員の割合は、課長級相当以上の人数であります。

第2 【事業の状況】

1 【経営方針、経営環境及び対処すべき課題等】

文中の将来に関する事項は、当連結会計年度末現在において当社グループが判断したものであります。

(1) 会社の経営の基本方針

当社グループは、良質で魅力ある専門コンテンツをベースに、デジタル技術を活用した次世代パブリッシングモデルを実現、それらの活動を通して、知恵と感動のある豊かな社会の実現に貢献していきたいと考えております。

IT、音楽、デザイン、山岳・自然、航空・鉄道、モバイルサービス等の専門分野ごとの個性的なメディアブランドによる雑誌・書籍等の出版を中心に、電子出版、Webメディア、SNS、イベント・セミナー等、「紙・デジタル・リアル」の多面的な展開により、読者やユーザーに対し「実体験に基づいた、臨場感ある魅力的なコンテンツ」を届け、共通体験の場を増やしていくことを目指します。

また、これまで培ってきたパブリッシングモデルやメディア技術、マーケティング手法をコンテンツパートナーに提供するプラットフォーム事業を展開することで、ユーザーとの「知恵と感動の共有の輪」を広げていきます。

これらのビジョン実現のため、専門分野ごとの比較的小規模の事業会社と、財務・経営管理及びインキュベーション機能を集約した持株会社によるグループ経営によって、個々の事業会社の魅力とともに、相互連携によるグループ全体の企業価値を高めてまいります。

(2) 経営戦略及び経営環境等

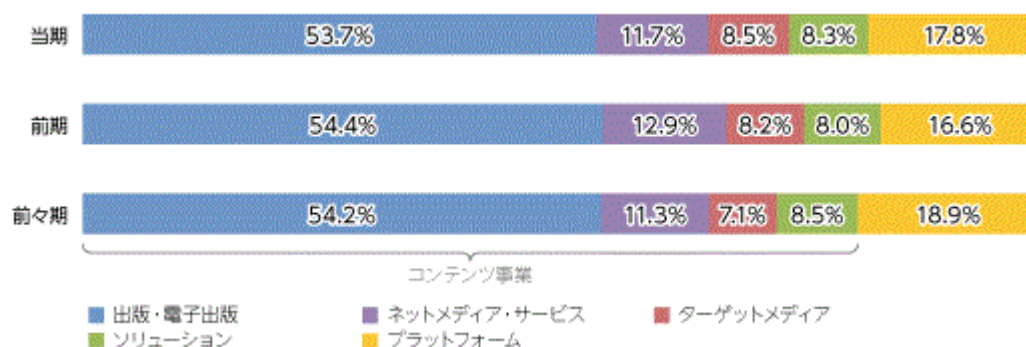
当社グループは、持株会社である当社を中心にグループ各社が事業の独自性を活かし、顧客ニーズにあった製商品目を機動的に提供していくことで、各社及びグループ全体の企業価値の増大を図る分社経営方針をとっており、IT、音楽、デザイン、山岳・自然、航空・鉄道及びモバイルサービス等の専門分野で構成されたそれぞれの分野でコンテンツ事業、プラットフォーム事業を行っております。

出版業界を取り巻く事業環境は、紙の出版物の販売額が18年連続で減少していることに加えて、用紙の調達コストや印刷等の原材料費の高騰、物価高騰を考慮した従業員の報酬水準の引き上げ等のコスト上昇も見込まれ、依然として厳しい状況が続いております。当社グループでは、このような事業環境の中、当期において低迷した出版事業の収益力の回復を最重点課題としながら、中期成長基盤の開発を目的とした投資を継続しつつ、メディアミックス・DtoC事業モデルの開発を促進してまいります。

中期経営計画に掲げている事業ポートフォリオの構造転換を進め、新たな成長基盤を構築する取り組みを着実に進めており、事業区分別売上構成比率及び紙の出版物の売上比率が下図のように変化し、一定の成果が表れております。

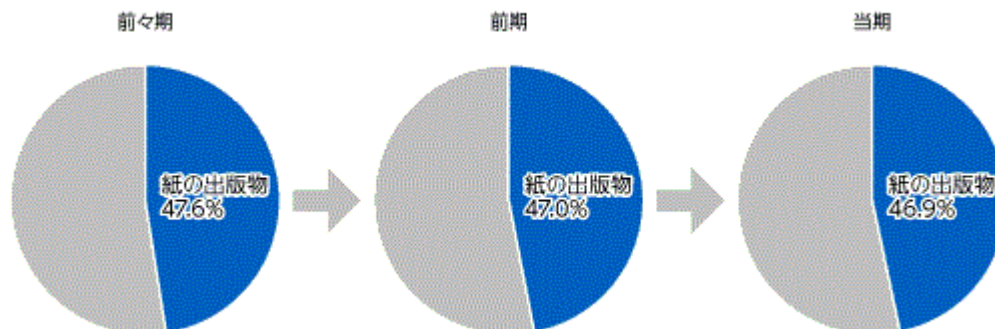
売上構成比では、出版・電子出版事業及びネットメディア・サービス事業の構成比が若干減り、ターゲットメディア事業、ソリューション事業及びプラットフォーム事業の構成比が増加しております。また、同様に紙の出版物の売上比率も減少傾向にあり、事業ポートフォリオの転換期にあっても、8期連続増収となりました。

■ 事業区分別売上構成比率推移



(注) 事業区分別売上構成比は、連結消去前の数値で算出してあります。
「収益認識に関する会計基準」(企業会計基準第29号、2020年3月31日)等を前期(2022年3月期)の期首から適用しており、前々期(2021年3月期)に係る各数値については、当該会計基準等を遡って適用した後の数値となっております。

■紙の出版物の売上比率推移



(3) 優先的に対処すべき事業上及び財務上の課題

当社グループは、良質で魅力ある専門コンテンツの強みを追求し、コンテンツ事業において堅実かつ着実な利益成長により安定した収益基盤を確保するとともに、中期的な視野で、新しい事業モデル、メディアビジネスのプラットフォームの創出に取組み、コンテンツ事業とのシナジーを追求することで、新たな価値創造に取り組むことを基本戦略としております。また、同取組みにより、事業ポートフォリオの構造転換を進め、新たな成長基盤を構築することを中期経営課題として掲げております。

このような中、当連結会計年度の状況といたしましては、イカロス出版の年度を通じての連結による増収はあったものの、巣ごもり需要の反動やヒットタイトルの不足により、中期経営計画における収益の基盤である出版事業において事業規模が縮小し、収益力が低下、加えてネットメディアにおいても、PVの減少と不透明な経済市況の影響を受け、広告収入が減少する、厳しい業績動向となりました。また、用紙・印刷等の原材料費の高騰も加わり、売上高は8期連続の増収も、経常利益は大幅な減益となりました。

次期におきましては、不透明な景気動向の中、原材料費や物流経費の高騰等、当期に引き続き厳しい事業環境が想定されますが、短期的には、出版事業の事業規模と収益力の回復を最重点課題としながら、成長基盤の開発を目的とした投資及び事業開発を継続して推進し、中期経営計画で目標とする事業価値の向上に向け、以下の課題に取り組んでまいります。

目標とする中期（2026年度までの5年間）経営指標

現状の事業ポートフォリオにおいて、最大の事業規模である紙の出版事業を適増させつつ、電子出版、ネット・ターゲットメディア及びサービス、プラットフォーム事業を拡大、これら事業の構成比を現53%から60%まで引き上げることで、連結の売上高を200億、経常利益を20億規模への拡大を目指し、企業価値の向上に取り組めます。

出版・電子出版事業の事業規模及び収益力の回復

当期に課題を残した出版事業について、書籍を中心に商品企画・販売力の強化に取り組む、事業規模及び収益力の回復を図ります。また、収益性の面では、販売・流通環境、原材料費高騰等の環境変化をふまえ、製造におけるAI活用等による生産性の向上及び原材料費や人件費等のコスト上昇への対応、返品率及び物流効率の改善に取り組めます。

なお、電子出版では、モバイルサービスセグメントにおいて、市場シェアの大きいコミックの領域で、ジャンルやテーマをより明確にした上で、オリジナルのマンガコンテンツの開発投資を継続し、商品開発・販売におけるノウハウ及び関係性資産の構築の基盤を固め、事業化に取り組めます。

メディアミックス展開による新規事業モデルの開発

各専門分野のファンに向けて、多面的なメディア及びサービス（出版・ネットメディア・リアルな場（イベント・セミナー等））をプロデュース、ダイレクトチャネル（DtoC）における付加価値の高い会員サービスの創出により、会員基盤をベースとした（ファン）コミュニティの構築及びエンゲージメントを高める取り組みを強化します。

当期においては、ダイレクトチャネル（DtoC）でのサービス展開を支える顧客情報基盤、マーケティングの分析・運用基盤の構築を完了し、音楽セグメントの雑誌ブランド、楽器マーケットプレイス「デジマート」を軸に、グループ横断的な取り組みで、多様な会員向けサービス展開を展開します。また、ネットメディアでは、山岳・自然セグメント「ヤマケイオンライン」のサービスリニューアルをはじめとして、各セグメントにおいて媒体力及び広告収益モデル等の強化に取り組めます。

プラットフォーム（PF）事業の拡大

従来培ってきたパブリッシングモデルやメディア技術、マーケティング手法をコンテンツパートナーに提供する

PF事業の開発を促進し、新たな事業モデルの創出と事業規模の拡大を図ります。

当期は、成長を続けてきた電子コミックPF事業が、パートナー出版社との契約変更などにより、調整局面を迎える難しい事業環境となりますが、電子コミック事業における新規受注の獲得とともに、楽器マーケットプレイス「デジマート」、(株)メディアドゥとの共同事業を開始した「POD出版サービス」の事業成長に向けた取り組みを強化します。また2022年7月に新設した「(株)IPGネットワーク」においてサービスを開始した、出版社向けのオンデマンドプリントTシャツモール「pTa.shop」、グループのコンテンツ資産を活用したオンデマンドプリンティングサービス「fabli」等のグループ横断の事業PFの構築・運営体制の強化を進め、新規PF事業の開発を促進いたします。

2 【サステナビリティに関する考え方及び取組】

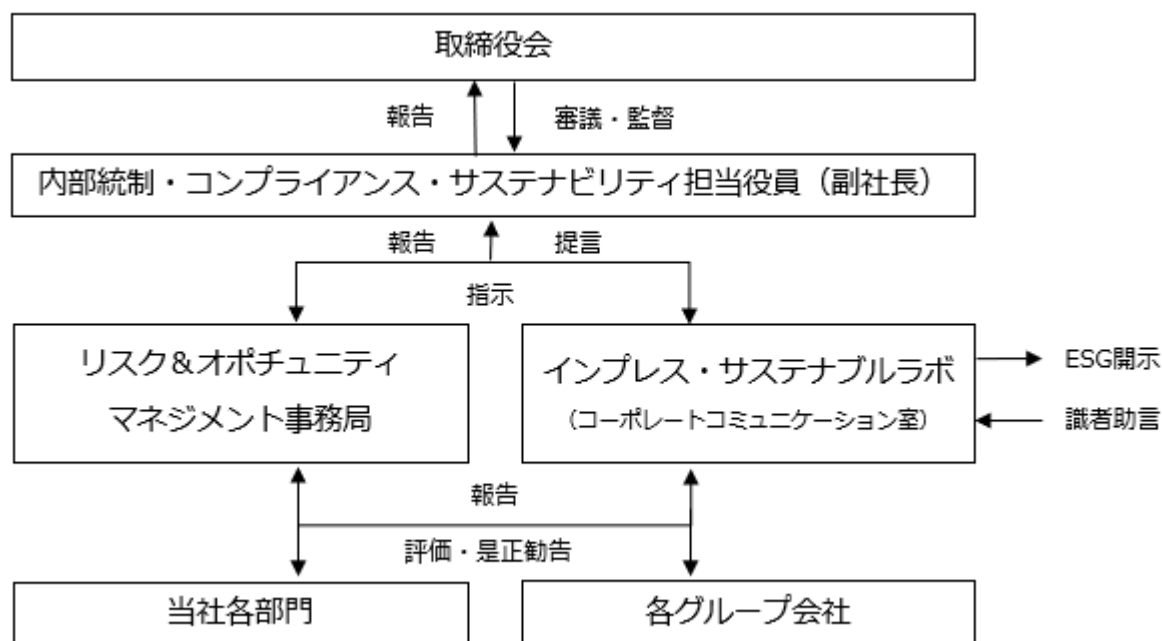
当社グループは、企業理念「面白いことを創造し、知恵と感動を共有する」に基づき、ステークホルダーの皆様と共に、専門コンテンツとそれを届けるしぐみを掛け合わせたイノベティブなファン・コミュニティの形成を通して、人間性豊かで自由な文化・社会の循環をつくっていきたいと考えております。

当社グループのサステナビリティに関する考え方及び取り組みは、次のとおりであります。

なお、文中の将来に関する事項は、当連結会計年度末現在において当社グループが判断したものであります。

(1)ガバナンス

2021年より、サステナビリティへの取り組みを経営上の重要課題と認識し、取締役副社長をサステナビリティ担当役員として、社長室（現・コーポレートコミュニケーション室）内に「インプレス・サステナブルラボ」を設置。慶應義塾大学 xSDG・ラボ（コンソーシアム）の識者・企業の皆様による助言を受けながら、取締役会及びグループ各社に対する取り組みの提言・答申のほか、非財務情報の開示を推進してまいりました。2022年からは同・取締役副社長がグループ全体のリスクマネジメント責任者を兼任、2023年5月より「リスク&オポチュニティマネジメント事務局」の名称に改め定期的（3ヶ月毎）に取締役会へリスク及び機会を報告、監督する体制を整備しております。



(2)リスク管理

当社グループでは代表取締役の任命するリスク&オポチュニティマネジメント責任者が、リスク&オポチュニティマネジメント規程に従い事務局を組織しております。直近の事業環境やリスク事例に照らし、年1回、全社的に見直されるリスクカタログに沿ってリスク及び機会を管理しています。

また、2023年4月に「サステナビリティ基本方針」「グループ環境方針」「グループ人権方針」「パートナー行動規範」「人材育成および環境整備方針」を取締役会のコミットメントのもと制定し、人権DD（アンケート）を進める中で、サプライチェーン全体のリスクについても把握ができるよう努めております。なお、TCFDの枠組みに基づいたシナリオ分析につきましては、今後の実施を予定しております。

リスクカタログは、外部環境（気候変動、市場など）、業務活動（製品/サービス、調達、情報システムなど）、内部環境（ガバナンス、人的資本など）の3分類でポジティブリスク及びネガティブリスクから構成され、質的リスクと量的リスクの基準に基づき対策立案を行っています。取り組み状況はリスク&オポチュニティマネジメント規程にてモニタリングし、改善を繰り返しております。

内部統制基本方針ほか、各種方針はWebサイトをご参照ください。

<https://www.impressholdings.com/about/governance/internalcontrol/>

(3)ESGへの取り組み

当社グループは、2022年6月に発表した中期経営計画において4つのサステナビリティ重点テーマ(マテリアリティ)を設定、事業の成長を通してひとつでも多くの社会課題を解決することに取り組んでおります。

重点テーマの特定にあたっては、(1)ガバナンスに記載の識者助言を受け、国連や経団連、日本のローカル指標等を組み合わせてBSC(Balanced Scorecard)を使用し、経営戦略との紐付けを行いました。定性的には、ステークホルダーの関心やインパクトの大きさに基づく優先順位づけとなっておりますが、財務的な定量分析及び目標値の設定については今後の課題であります。

当社で実施済みのリスク分析としましては、森林火災等による紙資源の減少による製造原価高騰、環境意識の高まりによる紙の出版物の需要減少、異常気象による流通網の麻痺やデータセンターの通信ダウン等による売上影響、を主なものと考えております。機会としては、SDGs関連テーマやAI等の新技術による製品/サービスの増大、オンデマンド&電子出版による環境負荷の低い流通方式・市場(エシカル消費)創出、業界横断での拠点・生産プロセス統合等による効率化などを想定しております。

なお、2022年9月に国連のSDGメディア・コンパクトに加盟、国際的にも先端的な取り組みであるメディア横断の「1.5の約束」キャンペーンに参加し、メディアとしての責任を果たしてまいります。

指標(実績)につきましては、Webサイトの「ESGデータ」をご参照ください。

<https://www.impressholdings.com/ir/library/finance/>

当社グループのサステナビリティ重点テーマ		
SDGs目標	重点テーマ	主な取り組み
E 環境  	環境を守る クリエイティビティ	<ul style="list-style-type: none"> ・森林認証紙・植物油インクの商品適用 ・見本誌や書類の電子化による紙資源削減 ・PODによる無在庫生産モデルの拡大 ・日本山岳遺産基金による環境保全も安全啓発活動 ・ビル管理会社と共同でグリーン電力導入へ
S 社会  	文化を育む専門性の 次世代への伝達し	<ul style="list-style-type: none"> ・GIGAスクールや資格試験向け書籍・講座の拡充 ・専門分野のプロから直接指導を受けられる各種サービス ・読書バリアフリーの推進、記事アーカイブ無料公開
G 企業統治 	公正な パートナーシップ	<ul style="list-style-type: none"> ・独立性を保持したグループ経営と横のシナジー強化 ・スタンダード市場の選択とIR、M&A推進による共創 ・取次・流通商社とのパートナーシップによるSCM ・xSDGコンソーシアムへの参画と『SDGs白書』発行 ・特別ホットラインの種別設置、倫理観ある事業活動

(4)人材育成および環境整備方針

<考え方>

当社グループの企業理念である「面白いことを創造し、知恵と感動を共有する」を実現し続けるために、「社員に求めるもの」として「変化を楽しみ、革新性を追求する(Innovation)」「価値観の違いを尊重し、共に響き合う(Diversity & Inclusion)」「人を巻き込み、自律的なコミュニティの成長を促す(Communication)」「高度な専門知識に裏打ちされた信頼感を醸成する(Specialty)」「当事者意識を持ち、想いを込めて社会へ貢献する(Ownership)」の5項目を人事戦略の中心に掲げております。

当社グループでは以下の方針に基づき、より一層の人材育成と環境の整備に努め、社員の成長やチャレンジと社員個々の幸福を実現することで、企業としての成長を目指してまいります。

・人材の獲得と育成

当社グループは、さまざまなキャリアや知識に裏打ちされた高い専門性を持った人材や、まだ経験値は少なくともポテンシャルの高い人材を獲得してまいります。そして、それぞれが高い主体性と協創性をもって価値あるものを生み出す、あるいはそれをサポートできるような、幅広い強みをもつ、バラエティ豊かな人材の育成に取り組んでおります。そういった人材育成のために、研修制度として、新入社員研修(グループおよび各社別)や管理職研修のような階層別研修だけでなく、女性活躍を推進する目的から「女性リーダー研修」や「男性管理職向けの女性リーダー活躍支援研修」なども導入し、多様性尊重の観点での外部研修を実施しております。

グループ内においても、高い専門性をもった社員が中心となっていく「グループ勉強会」や各社の社内勉強会で幅広い知識を積み上げていくとともに、グループ各社で新たな業務にチャレンジできる「グループ内公募制度」や新規の事業や企画に対するグループ支援制度を継続しており、人材が横断的にモチベーション高く業務を遂行できる環境の実現を目指しております。

加えて、グループ各社でその実施方法は異なるものの、パフォーマンス評価とフィードバック面談を定期的に行い、社員個々の強みや課題だけでなく将来の成長に向けての目標を明確にすることで、人材育成の重要な役割を担っております。

・多様性の尊重

当社グループは、将来的に、社員・管理職層・役員のすべての男女比が 50:50 になることを目指すとともに、外国籍社員や障がいのある社員が活躍できる職場を実現します。また、人種・民族・宗教・国籍・出身・性別・性自認および性的指向・年齢・障がいの有無・疾病などによる差別やあらゆるハラスメントを排除します。

・新しい働き方の促進

当社グループは、優秀な人材の獲得や離職防止、生産性の向上、社員個々のワークライフバランスの実現等を目指し、コアタイムのないスーパーフレックスタイム制の導入や在宅勤務の積極活用を実現しております。

また当社グループは、働く場所や時間を自由に選ぶ働き方をコンセプトに、すべてのオフィスをフリーアドレスとしている利点を活かし、多様な専門性を持った当社グループのスタッフが「バリアフリーなコミュニケーション」によって、多様なアイデアの実現を可能にする環境を実現しております。

同様に、遠隔地勤務制度を導入し、職種や仕事内容によってはオフィスへの出勤を必要としないため、さまざまな理由で首都圏近郊等での居住が難しい人材の勤務の継続、または新たな採用が可能となっております。

上記のような環境を実現していることもあり、当社グループでは一度離職した社員が復職したいと希望するケースが少なくなく、これを制度化し今後も復職する社員が増えていく環境を目指します。

これらの実現は、時代の変化に応じて柔軟に変化しつつある当社グループの社員の働く環境を向上させていくことに直結していると考えており、今後も更なる環境整備を続けて参ります。

< 指標及び目標 >

当社グループでは、多様性の尊重および環境の整備に関する指標として次の指標を用いております。当該指標に関する目標及び実績は、次のとおりであります。

項目	2023年3月末時点の状況	目標(2030年)
女性管理職比率	管理職全体の20.1%	30%
外国籍従業員数	6名	10名
出社率	27.9%	40~50%を維持
再入社従業員数	全従業員の4%	全従業員の9%

(注) 目標及び実績は、当社グループ全体の従業員の状況であります。

3 【事業等のリスク】

当社及び当社グループの事業上のリスクについて、投資者の判断に重要な影響を及ぼす可能性があると考えられる主な事項を記載しております

当社グループは、事業活動に関わるあらゆるリスクを的確に把握し適切なコントロールを行うため、全社的な視点でリスクマネジメントを統括・推進する役員を配置の上リスク&オポチュニティマネジメント事務局を設置、当社およびグループ会社に「リスク&オポチュニティマネジメント担当者」を任命し、主体的・自主的に対応できる体制を整備しております。

なお、これらのリスク発生の可能性を認識した上で、発生の回避及び発生した場合の対応に努める所存であります。本項においては、将来に関する事項が含まれておりますが、当該事項は本有価証券報告書提出日現在において判断したものであります。

(1) 業界慣行及び法規制について

再販売価格維持制度について

当社グループが制作、販売する出版物については、「私的独占の禁止及び公正取引の確保に関する法律」(独占禁止法)第23条の規定により、再販売価格維持制度(再販制度)が認められております。これは、出版物が我が国の文化の振興と普及に重要な役割を果たしていることから、同法の適用除外規定により例外的に認められているものであります。したがって、出版物は書店においては定価販売が行われております。また、当社グループは取次との取引価格の決定は、定価に対する掛け率によっております。

この再販制度について、公正取引委員会は2001年3月23日に「著作物再販制度の取扱いについて」を発表しており、当面、再販制度は存置される見通しであります。一方で業界に対して同制度下における消費者利益のための弾力的な運用を要請していくことを公表しております。

当社グループにおきましては、事業ポートフォリオの構造転換を進めており、従来の紙の出版事業から、電子出版、ネットメディア・サービス及びターゲットメディアのコンテンツ事業とプラットフォーム事業へと転換を図っております。しかしながら、従来の紙の出版事業については当社グループの売上高の46.9%を占めており、当該制度が廃止された場合には、出版競争の激化等により、当社グループの業績に影響を及ぼす可能性があります。

委託販売制度について

当社グループは、出版業界の慣行に従い、原則として当社が取次経由で書店に配本した出版物(書籍、雑誌)については、配本後、約定期間(委託期間)内に限り、返品を受け入れることを販売条件とする委託販売制度を採用しております。

当社グループの書籍は、次の委託方法となっております。

新刊委託...主として新刊時の書籍が対象とされ、委託期間は通常5ヶ月であります。

また、雑誌の委託期間は以下の通りであります。

月刊誌...発売日より3ヶ月

当社グループは、返品による損失に備えるため、出荷時に将来返品が見込まれる部分については、会計上、収益を認識せず返品資産および返金負債を計上しております。また、返品抑制のため、販売予測の精査による製造・出荷部数の適正化、マーケティングデータに基づいた書店への配本調整等行っておりますが、返品率の変動は、当社グループの業績に影響を及ぼす可能性があります。

(2) 市場環境について

出版業界の市場環境について

(公社)全国出版協会・出版科学研究所の「2022年出版物発行・販売概況」によれば、2022年の紙の出版市場の販売額は、前年比6.5%減少と18年連続で減少しており、特に雑誌を中心に大変厳しい事業環境となっております。また、2022年の電子出版市場は、前年比7.5%増加しましたが、前年まで2割前後の伸び幅であったものが一気に縮小しました。

当社グループにおきましては、事業ポートフォリオの構造転換を進めており、従来の紙の出版事業から、電子出版、ネットメディア・サービス及びターゲットメディアのコンテンツ事業とプラットフォーム事業へと転換を図っております。しかしながら、従来の紙の出版事業については当社グループの売上高の46.9%を占めております。市場が縮小傾向にある中、書店の休業や廃業が発生した場合、当社グループの業績に影響を及ぼす可能性があります。また、好調な電子コミックプラットフォーム事業におきましては、競合他社との競争激化や漫画違法サイトによる需要低下によっては、当社グループの業績に影響を及ぼす可能性があります。

広告市場の市場環境について

広告市場は、景気変動の影響を大きく受けると考えられております。

当社グループの2023年3月期の売上高に占める広告収入の比率は17.4%を占め、コンテンツ事業の利益の大きな変動要素であり、景気の悪化が業績に影響を及ぼす可能性があります。

上記「出版業界の市場環境について」で記載のとおり、紙の出版市場が18年連続で減少しており、当社グループにおきましても、雑誌広告を中心とした出版広告は年々減少しております。一方で、ネットメディアにおけるデジタル広告や、ターゲットメディアと連携したターゲット広告へシフトを進め、順調に推移しており、eSports関連等の動画コンテンツを活用したデジタル広告については、今後のメディアミックス戦略において重要なテーマと認識しております。

原材料市況の変化について

当社グループは、出版物製造において用紙等を主要な原材料としております。当社グループといたしましては、複数の取引先からの調達を行うことで、安定的な供給量の確保とコストコントロールを行っておりますが、原油等の商品市況等の変化により、原材料価格が高騰した場合、当社グループの業績に影響を及ぼす可能性があります。

(3) 知的財産権について

当社グループは提供する製品・サービスについて商標権を取得しております。また、他者の知的財産権の侵害を防止するため、社内での教育、研修の実施に加え、編集部門におけるチェック体制を整備しておりますが、特許権、実用新案権、商標権、著作権等の知的財産権が、当社グループの事業にどのように適用されるか想定するのは困難であり、第三者の知的財産権を侵害した場合には、当社グループの事業及び業績に影響を及ぼす可能性があります。

(4) 特定取引先への依存度について

当社グループは、大手取次等の取引先4社によって連結売上高の53.6%が占められております。当社グループにおきましては、中期的な視野で新しい収益及び事業モデルの創出に取り組むとともに、多面的な展開を図ることで、当該リスクへの対応を図っております。しかしながら、取引先4社の経営方針に大きな変更等があった場合、当社グループの業績に影響を及ぼす可能性があります。

(5) 通信ネットワーク、インターネットサービス等のシステムトラブルについて

当社グループは、コンテンツの編集及びサービスの提供、取引・顧客データを管理するバックオフィス等のあらゆる業務において、情報システム及び通信ネットワーク等のインフラに依存しております。そのため、これらインフラに障害が発生した場合には、顧客からの信頼性低下等の事態を招き、当社の事業に重大な支障が生じる可能性があります。当社グループといたしましては、下記の事項を始めとする様々な要因に対処するための技術的な対応措置、モニタリング体制、社内運用マニュアルの整備等を行っておりますが、トラブルの発生を事前に完全に防止することは不可能であり、トラブル発生の場合、当社グループの業績に影響を及ぼす可能性があります。

- ・ハードウェア及びソフトウェアの不備
- ・外部からの不正な侵入行為
- ・アクセスの急激な増大
- ・自然災害、停電
- ・人的ミス、怠業、破壊行為
- ・コンピュータウイルス

(6) 個人情報保護について

当社グループでは、オンライン直販等の顧客の会員登録情報/購入履歴をはじめ、読者サービスの向上のための会員組織にご登録頂いた会員情報等の各種個人情報をお預かりしております。当社グループといたしましては、外部からのハッキングに対する技術的な対応措置・モニタリング体制を整備、また社内からの情報漏洩防止のため社員への教育・訓練、管理方法の検討・実施、関連規程の整備等により、情報管理体制の強化を進めております。しかしながら、万一個人情報が流出した場合には、当社グループの信頼性が低下、賠償責任を問われる可能性があり、事業及び業績に影響を及ぼす可能性があります。

(7) 投融資について

当社では、子会社及び関連会社に対する投融資の他に、当社グループの事業拡大のため、日本国内外のメディア関連企業等に投資を実施しております。

これら投融資は、投資の効果及びリスク等を慎重に検討した上で実施しておりますが、投資先企業が予想通りの業績や効果を生む保証はありません。よって、投資先企業の評価見直しに伴う損失、投資回収の遅延等により、当社グループの業績に影響を及ぼす可能性があります。

(8) 資金調達について

当社は、持株会社としてグループ会社の事業資金の調達を担っており、複数の金融機関と取引を行っております。当社といたしましては、取引金融機関の確保、資金調達手段の多様化等により調達リスクを軽減するように努めておりますが、経済環境等の悪化による調達環境の変化、当社の信用力の著しい低下等があった場合には、当社グループの経営に影響を及ぼす可能性があります。

(9) その他の事項について

主要株主の影響力について

当社のファウンダー/最高相談役である塚本慶一郎と同氏が代表取締役を務める資産管理会社である(有)T&Co.及び同氏との間で管理信託契約を締結した(株)SMBC信託銀行の所有する株式で実質的に同氏が保有する株式は、当社の発行済株式数(自己株式を除く)の49.8%(2023年3月31日現在)に相当しております。同氏及び同社の当社株式の保有方針に変化等があった場合、当社グループの経営に影響を与える可能性があります。

4 【経営者による財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の分析】

(1) 財政状態の状況

事業全体及びセグメント情報に記載された区分ごとの状況

a. 事業全体の状況

当連結会計年度末の流動資産につきましては、グループ会社の配当に係る源泉所得税を未収入金として計上したことなどにより増加したものの、法人税の支払等により現金及び預金が減少し、前連結会計年度末に比べ42百万円減少し13,391百万円となりました。固定資産につきましては、(株)PUBFUNの共同新設分割によるのれんの計上や繰延税金資産の増加等により、前連結会計年度末に比べ253百万円増加し2,553百万円となりました。

流動負債につきましては、未払金及び賞与引当金が減少したため、前連結会計年度末に比べて347百万円減少し4,423百万円となりました。固定負債につきましては、新規借入による長期借入金の増加や退職給付に係る負債の増加等により、前連結会計年度末に比べ138百万円増加し1,866百万円となりました。

純資産につきましては、配当金の支払いによる減少があったものの、親会社株主に帰属する当期純利益の計上等により、前連結会計年度末に比べ420百万円増加し9,654百万円となりました。

自己資本は9,505百万円となり、自己資本比率は59.6%と前連結会計年度末比プラス0.9ポイントとなりました。

b. セグメント情報に記載された区分ごとの状況

(a) IT

当連結会計年度につきましては、減益となったことにより、グループ通算制度による未収法人税の計上があったものの、余剰資金の当社に対する短期貸付金の減少等により、当連結会計年度末のセグメント資産は、前連結会計年度末と比べて412百万円減少し、4,784百万円となりました。

(b) 音楽

当連結会計年度につきましては、楽器マーケットプレイス「デジマート」における決済代行の拡大による未収入金の増加があったものの、減収による売掛金の減少及び余剰資金の当社に対する短期貸付金の減少等により、当連結会計年度末のセグメント資産は、前連結会計年度末と比べて400百万円減少し、1,611百万円となりました。

(c) デザイン

当連結会計年度につきましては、減収となったものの下半期の回復による売掛金の増加等により、当連結会計年度末のセグメント資産は、前連結会計年度末と比べて37百万円増加し、630百万円となりました。

(d) 山岳・自然

当連結会計年度につきましては、下半期の回復による売掛金の増加したものの、余剰資金の当社に対する短期貸付金の減少等により、当連結会計年度末のセグメント資産は、前連結会計年度末と比べ48百万円減少し、1,189百万円となりました。

(e) 航空・鉄道

当連結会計年度につきましては、イカロス出版の業績を取り込んだことにより大幅な増収となり売掛金が増加したものの、余剰資金の当社に対する短期貸付金が減少したことで、当連結会計年度末のセグメント資産は、前連結会計年度末と比べ1,063百万円減少し、1,168百万円となりました。

(f) モバイルサービス

当連結会計年度につきましては、コンテンツホルダーとの協業によるデジタルコミック等の販売プラットフォームが好調に推移したことにより、余剰資金の当社に対する短期貸付金が増加したこと等により、当連結会計年度末のセグメント資産は、前連結会計年度末と比べて220百万円増加し、1,215百万円となりました。

(g) その他

グループの組織再編に伴い、(株)Impress Professional Worksは商号を(株)IPGネットワークに改め、グループ共通の事業基盤（ビジネス・プラットフォーム）の構築・運営及び新規プラットフォーム事業の開発に特化した会社へ再編したことにより、第2四半期連結会計期間よりその他セグメントに属することとなりました。

当連結会計年度につきましては、(株)IPGネットワークの業績を取り込んだことに加えて、(株)メディアドゥとの協業の開始により、預金、売掛金及び余剰資金の当社に対する短期貸付金が増加したこと等により、当連結会計年度末のセグメント資産は、前連結会計年度末と比べて868百万円増加し、1,890百万円となりました。

(h) 全社

当連結会計年度につきましては、グループ各社の余剰資金である預り金が減少に伴い預金が増加したことに加えて、長期貸付金の回収等により、当連結会計年度末のセグメント資産は、前連結会計年度末と比べて844百万円減少し、7,665百万円となりました。

(2) 経営成績の状況

事業全体及びセグメント情報に記載された区分ごとの状況

a. 事業全体の状況

当連結会計年度につきましては、イカロス出版の業績を取り込んだことによる増収、ターゲットメディアのイベント収入の好調な推移はあったものの、前期の電子書店の大型キャンペーン等の反動により電子出版の販売が減少したことに加え、音楽アーティスト関連の大型ムック本の反動、巣ごもり需要の一巡による書籍の出荷減少やネットメディア広告の減少等により、コンテンツ事業の売上高は前期（12,318百万円）に比べ1.2%増加に留まり、12,460百万円となりました。

プラットフォーム事業につきましては、コンテンツホルダーとの協業による電子コミックプラットフォーム事業が好調に推移したことに加え、当期首に新設した株式会社PUBFUNにおいて、(株)メディアドゥとの協業が開始されたことで、売上高が前期（2,460百万円）に比べ9.8%増加し、2,700百万円となりました。

これらの結果、売上高は前期(14,778百万円)に比べ2.6%(382百万円)増加し、15,161百万円となりました。営業利益は、増収も収益性の低下に加えて販売管理費が増加したことにより、前期(848百万円)に比べ462百万円減少し、386百万円となりました。経常利益は、前期(941百万円)に比べ447百万円減少し、494百万円となりました。親会社株主に帰属する当期純利益は、前期にイカロス出版の子会社化に伴う負ののれんの発生により187百万円の特別利益を計上していた反動もあり、前期(875百万円)に比べ500百万円減少し、375百万円となりました。

b. セグメント情報に記載された区分ごとの状況

文中の事業セグメントの売上高は、セグメント間の内部振替高を含んでおり、セグメント利益は、営業利益をベースとしております。

(a) IT

ITセグメントの売上高につきましては、前期の電子書店の大型キャンペーン等の反動やテレワーク需要等の一巡で電子出版及び書籍の販売が減少したことにより、出版・電子出版は前年同期（3,038百万円）に比べ6.3%減少し2,845百万円となりました。また、デジタル総合ニュースサービス「Impress Watch」（<https://www.watch.impress.co.jp/>）において、巣ごもり需要の一巡によるPVの減少や不透明な景気動向が影響したことで広告収入が減少し、ネットメディア・サービスは前年同期（1,643百万円）に比べ6.3%減少し1,539百万円となりました。一方、ターゲットメディアは、イベント収入が好調に推移したことにより、前年同期（1,210百万円）に比べ6.1%増加し1,285百万円となりました。ソリューション事業においては、国内受託案件の減少等により、前年同期（451百万円）に比べ17.5%減少し372百万円となりました。これらの結果、コンテンツ事業の売上高は前年同期（6,344百万円）に比べ4.7%減少し6,043百万円となりました。

プラットフォーム事業につきましては、パートナー出版社の電子出版及び書籍の販売が増えたことで、売上高は前期（273百万円）に比べ1.6%増加し、278百万円となりました。

以上により、「IT」の売上高は、前期(6,654百万円)比4.4%減の6,361百万円となりました。セグメント利益では、減収と収益性の低下に加えて販売管理費が増加したことにより、前期(1,144百万円)と比べ241百万円利益が減少し、903百万円となりました。

(b) 音楽

音楽セグメントの売上高につきましては、書籍が刊行点数の増加等により増収したものの、前期の音楽アーティスト関連の大型ムック本の反動による減少やソリューション事業及びデジタル広告の減少を補いきれず、コンテンツ事業の売上高は前年同期（1,476百万円）に比べ6.5%減少し、1,380百万円となりました。

プラットフォーム事業につきましては、楽器マーケットプレイス「デジマート」（<https://www.digimart.net/>）における楽器店からの決済サービス収入が増加したものの、パートナー出版社の出版物の販売が減少したことにより、売上高は前期（465百万円）に比べ1.2%減少し、460百万円となりました。

以上により、「音楽」の売上高は、前期(1,957百万円)比5.8%減の1,843百万円となりました。セグメント利益では、大幅な減収と収益性の低下に加えて販売管理費が増加したことにより、前期(114百万円)と比べ224百万円利益が減少し、109百万円の損失となりました。

(c) デザイン

デザインセグメントの売上高につきましては、季節商品のカレンダーが刊行点数の増加により増収、新刊書籍の販売は好調に推移したものの、既刊書籍の販売減等により、コンテンツ事業は減収となりました。

以上により、「デザイン」の売上高は、前期(1,057百万円)比4.2%減の1,013百万円となりました。セグメント利益は、減収と収益性の低下により、前期(14百万円の損失)と比べ60百万円利益が減少し、75百万円の損失となりました。

(d) 山岳・自然

山岳・自然セグメントの売上高につきましては、ネットメディア広告及び自治体向けのソリューション事業は堅調に推移したものの、前期の電子書店の大型キャンペーンと書籍やムック本の大型刊行による反動、既刊書籍の出荷減少等により、コンテンツ事業は減収となりました。

以上により、「山岳・自然」の売上高は、前期(1,821百万円)比7.5%減の1,685百万円となりました。セグメント利益では、減収と販売管理費の増加に加えて、当連結会計年度より連結の範囲に含めた山小屋を運営する(侑原)の小屋における営業損失の計上も重なり、前期(51百万円)と比べ83百万円利益が減少し、32百万円の損失となりました。

(e)航空・鉄道

航空・鉄道セグメントにつきましては、イカロス出版の業績を取り込んだことにより、コンテンツ事業は大幅な増収となりました。

以上により、「航空・鉄道」の売上高は、前年同期（830百万円）比69.0%増の1,403百万円となりました。セグメント利益では、収益構造の見直し過程にあるイカロス出版の収益性が改善したことにより、前年同期（105百万円の損失）と比べ17百万円損失が減少し、88百万円の損失となりました。

(f)モバイルサービス

モバイルサービスセグメントの売上高につきましては、電子出版が堅調に推移したことにより、コンテンツ事業の売上高は前期（193百万円）と比べ1.6%増加し、196百万円となりました。

プラットフォーム事業につきましては、コンテンツホルダーとの協業によるデジタルコミック等の販売プラットフォームの増収により、売上高は前期（1,499百万円）と比べ7.8%増加し1,616百万円となりました。

以上により、「モバイルサービス」の売上高は、前期(1,699百万円)比7.1%増の1,821百万円となりました。セグメント利益では、販売管理費が増加したものの、増収に加えて収益性が改善したことにより、前期(308百万円)と比べ77百万円利益が増加し、386百万円となりました。

(g)その他

グループの組織再編に伴い、(株)Impress Professional Worksは称号を(株)IPGネットワークに改め、グループ共通の事業基盤（ビジネス・プラットフォーム）の構築・運営及び新規プラットフォーム事業の開発に特化した会社へ再編したことにより、第2四半期会計期間よりその他セグメントに属することとなりました。

その他セグメントの売上高につきましては、(株)IPGネットワークの業績を取り込んだことに加えて、(株)メディアドゥとの協業の開始により、出版社・法人向けPOD出版プラットフォームサービス「PUBRID」の業績を取り込んだことで大幅な増収となりました。

以上により、「その他」の売上高は前期(929百万円)比69.8%増の1,578百万円となりました。セグメント利益では、増収に加えて収益性が改善したものの、販売管理費が増加したことにより、前期(10百万円の利益)と比べ15百万円利益が減少し、5百万円の損失となりました。

(h)全社

全社区分につきましては、(株)Impress Professional Worksがグループの組織再編に伴いその他セグメントに属することとなったため、第2四半期連結会計期間から純粋持株会社である当社のみが属しており、グループ会社からの配当、情報システム等の経営インフラ使用料の手数料収入や経営管理業務の受託を売上高として計上し、経営インフラ等の運営に係る費用を負担しております。

全社区分の売上高は、グループ会社からの配当収入が増加したものの、組織再編に伴う事業譲渡による減収により、前期(2,049百万円)比3.1%減の1,984百万円となりました。全社セグメントの利益では、減収したものの、販売管理費が減少したことにより、前期(99百万円)から52百万円利益が増加し、151百万円の利益となりました。

生産、受注及び販売の実績

a. 生産実績

当連結会計年度の生産実績をセグメントごとに示すと、次のとおりであります。

また、「その他」の金額には、報告セグメントの合計額と連結財務諸表計上額との差異調整が含まれております。

セグメントの名称	金額(千円)	前期比(%)
IT	3,775,617	96.9
音楽	1,387,199	107.1
デザイン	734,222	99.2
山岳・自然	1,138,735	94.1
航空・鉄道 (注) 2	1,179,420	162.6
モバイルサービス	728,805	102.1
その他	686,924	122.8
合計	9,630,924	105.4

(注) 1. 金額は当期製品製造原価により記載しており、セグメント間取引については相殺消去しております。

2. 当連結会計年度において、「航空・鉄道」の生産実績に著しい変動がありました。これは、イカロス出版(株)の株式取得に伴い、前第2四半期会計期間よりイカロス出版(株)を連結の範囲に含めたためであります。

b. 商品仕入実績

商品仕入実績については、全ての事業セグメントにおいて重要性が乏しいため、記載を省略しております。

c. 受注実績

受注実績については、全ての事業セグメントにおいて売上に対する受注高の割合が低いいため、記載を省略しております。

d. 販売実績

当連結会計年度の販売実績をセグメントごとに示すと、次のとおりであります。

セグメントの名称	金額(千円)	前期比(%)
IT	6,321,518	95.52
音楽	1,840,156	94.75
デザイン	991,966	96.01
山岳・自然	1,667,504	92.47
航空・鉄道 (注) 2	1,392,153	170.41
モバイルサービス	1,813,587	107.08
その他	1,134,259	130.15
合計	15,161,147	102.59

(注) 1. 金額は販売価格によっており、セグメント間取引については相殺消去しております。

2. 当連結会計年度において、「航空・鉄道」の販売実績に著しい変動がありました。これは、イカロス出版(株)の株式取得に伴い、前第2四半期会計期間よりイカロス出版(株)を連結の範囲に含めたためであります。

3. 最近2連結会計年度の主な相手先別の販売実績及び当該販売実績の総販売実績に対する割合は次のとおりであります。

相手先	前連結会計年度 (自 2021年4月1日 至 2022年3月31日)		当連結会計年度 (自 2022年4月1日 至 2023年3月31日)	
	金額(千円)	割合(%)	金額(千円)	割合(%)
(株)トーハン	2,436,720	16.5	2,536,381	16.7
日本出版販売(株)	2,469,518	16.7	2,271,388	15.0
アマゾンジャパン(合)	1,838,304	12.4	1,855,305	12.2
(株)集英社	1,318,202	8.9	1,467,464	9.7

(3) キャッシュ・フローの状況

当連結会計年度末におけるキャッシュ・フローの状況につきましては、税金等調整前当期純利益514百万円(前期比636百万円の減少)を計上し、法人税等の還付額(381百万円/前期比330百万円の増加)等の増加要因があったものの、仕入債務の減少(127百万円/前期比354百万円の減少)や非現金収入収益の負ののれん発生益の減少(7百万円/前期比179百万円の減少)等の減少要因の方が大きく、営業活動によるキャッシュ・フローは58百万円の資金の支出となっております。(前期比117百万円の支出増加)

投資活動によるキャッシュ・フローは、敷金及び保証金の解約による収入(38百万円)があったものの、有形固定資産および無形固定資産の取得による支出(138百万円)等により、70百万円の支出となっております。(前期比299百万円の支出減少)

財務活動によるキャッシュ・フローは、主に配当金の支払216百万円(前期比83百万円の増加)により204百万円の支出となっております。(前期比55百万円の支出減少)

以上により、当連結会計年度末の資金残高は、前連結会計年度末と比べ333百万円減少し、5,983百万円となりました。

(参考)キャッシュ・フロー関連指標の推移

自己資本比率、時価ベースの自己資本比率、債務償還比率、インタレスト・カバレッジ・レシオの推移

	2019年3月期	2020年3月期	2021年3月期	2022年3月期	2023年3月期
自己資本比率	61.3%	60.3%	59.0%	58.7%	59.6%
時価ベースの自己資本比率	40.2%	32.5%	57.2%	46.8%	44.6%
キャッシュ・フロー対有利子負債比率	13.2年	0.6年	0.6年	10.5年	- 年
インタレスト・カバレッジ・レシオ(倍)	10.1	252.5	328.0	6.2	-

(注) 自己資本比率：自己資本/総資産

時価ベースの自己資本比率：株式時価総額/総資産

キャッシュ・フロー対有利子負債比率：有利子負債/営業キャッシュ・フロー

インタレスト・カバレッジ・レシオ：営業キャッシュ・フロー/利払い

各指標はいずれも連結ベースの財務数値により計算しております。

営業キャッシュ・フローは連結キャッシュ・フロー計算書の営業活動によるキャッシュ・フローを使用しております。有利子負債は連結貸借対照表に計上されている負債のうち利子を支払っている全ての負債を対象にしております。また、利払いについては、連結キャッシュ・フロー計算書の利息の支払額を使用しております。算出の結果、数値がマイナスとなる場合は「-」で表記しております。

(4) 資本の財源及び資金の流動性に係る情報

当連結会計年度のキャッシュ・フローの概況につきましては、「(3)キャッシュ・フローの状況」をご参照ください。

当社は、グループ全体の資金効率を高めることを目的にCMSを導入し、資金の一元管理を行っており、事業リスクに対する迅速な意思決定を可能としています。

また、運転資金の一部については銀行等の金融機関からの借入金で賄っており、手元資金と安全性の高い運用資金から有利子負債を差し引いたネット・キャッシュの当連結会計年度末の残高は5,346百万円であり、前連結会計年度末から358百万円減少しております。

(5) 重要な会計方針及び見積り

当社グループの連結財務諸表は、わが国において一般に公正妥当と認められる会計基準に基づき作成しております。当社はこの連結財務諸表の作成にあたり、資産、負債、収益及び費用の報告額に影響を及ぼす見積り及び仮定を用いております。当社グループでは、過去の実績や将来予測される状況を踏まえ、合理的と判断される前提に基づき、継続してこの見積りの評価を実施しておりますが、実際の結果は、前提条件の相違等によりこの見積り及び仮定に基づく数値と異なる場合があります。

当社グループの財政状態又は経営成績に対して重要な影響を与え得る会計上の見積り、判断並びに仮定は以下のとおりです。

投資有価証券の減損

当社は、パートナー企業との協業体制の強化による当社グループの中長期的な事業価値向上及び取引関係の維持に限定した目的で、特定の取引先の株式を保有しております。これらの株式には、時価があり価格変動性の高い上場会社と、市場価格のない非上場会社の株式が含まれております。時価のある株式につきましては、決算日の市場価格に基づく時価により評価しており、時価が取得原価に比べ50%以上下落した場合にはその回収可能性等を勘案し必要と認められる額について減損処理を行うこととしております。市場価格のない株式等につきましては、それらの会社の純資産額が帳簿価額を50%以上下回った場合に減損処理を行うこととしております。

当社は、これまで必要な減損処理を行っておりますが、将来の市況悪化または投資先の業績不振により、現在の簿価に反映されていない損失又は回収不能が発生し、減損処理を行うことにより、経営成績に影響を与える可能性があります。

貸倒引当金

当社グループは、貸倒れが懸念される特定の債権については、個別に回収可能性を勘案し、回収不能見込額に基づき貸倒引当金を計上しております。また、その他の一般債権については、過去3年間の貸倒損失発生額に基づく実績繰入率を乗じて算出し、貸倒引当金を計上しております。なお、将来相手先の財務状況が悪化し支払能力が低下した場合には、引当金の追加計上又は貸倒損失が発生する可能性があります。また、貸倒損失の発生により、貸倒実績率が上昇し、一般債権に係る貸倒引当金の追加計上の可能性があります。

繰延税金資産の回収可能性

当社グループは、繰越欠損金や税務上と会計上の取扱いの違いにより生じる一時差異について、税効果会計を適用し、繰延税金資産及び繰延税金負債を計上しております。繰延税金資産の計上にあたり、将来の収益額に基づく課税所得及びタックス・プランニングに基づき、繰延税金資産の回収可能性を判断しております。その結果、回収が見込まれないと判断される繰延税金資産については、評価性引当額を計上しております。

なお、課税所得の見積りにおける主要な仮定は売上高見込みであります。売上高見込みについては、事業区分毎の事業環境や各セグメントの事業計画の変動リスクを分析し、より確実性の高い課税所得の見積ったうえで、回収可能性の判断を実施しております。当該事業計画には、紙の出版市場及び電子出版市場のそれぞれの過去からのトレンドを基礎として、当社グループが取扱う製品の需要予測に加え、さらに原材料価格や配送価格等の製造から販売に至るコスト上昇リスクを加味しております。

経営者は、当該回収可能性の評価は合理的であると判断しておりますが、将来の業績及び課税時期に関する判断が変動する場合、繰延税金資産の計上金額に影響を及ぼす可能性があります。

返品資産及び返金負債

当社グループの出版・電子出版事業においては、各種専門書籍や雑誌、電子書籍、季節商品（年賀状ムック、カレンダー、手帳）等、出版物の販売に加え、雑誌への広告掲載も行っております。書籍及び雑誌の販売については、当該製品を納品した時点で履行義務が充足されたと判断し、収益を認識しております。ただし、当社グループは、出版業界の慣行に従い、原則として出版取次経由で書店に配本した書籍及び雑誌等については、配本後、約定期間（委託期間）内に限り、返品を受け入れることを販売条件とする委託販売制度を採用しております。そのため、将来返品が見込まれる額を変動対価として販売時に収益を認識せず、返品資産および返金負債を計上する方法を採用しております。返金負債の見積りについては、直近の販売額に過去の返品実績に基づいた率を乗じて算出し、返品資産は、返金負債をもとに書籍及び雑誌（一部ムック含）について、回収すると見込める金額を見積もって計上しております。また、返品抑制のため、販売予測の精査による製造・出荷部数の適正化、マーケティングデータに基づいた書店への配本調整等行っておりますが、返品率の悪化により返品資産及び返金負債の追加計上が必要となる可能性や経営成績に影響を与える可能性があります。

退職給付に係る負債

当社グループは、退職給付債務の算定にあたり、予想昇給率及び退職率を見積り、直近の統計数値に基づいて算出される死亡率及び国債市場利回りを勘案した割引率を使用して退職給付見込額を算出し、給付算定式基準により当連結会計年度末までの期間に帰属させております。退職給付見込み額の算出に用いたこれらの仮定や国債市場利回りの変化により実際の結果が異なる場合や変更となる場合には、その影響は累積され、将来にわたって認識されるため、将来期間において認識される費用及び債務に影響を与える可能性があります。なお、当社グループは、将来にわたって認識される数理計算上の差異を、発生時における従業員の平均残存勤務期間以内の一定の年数（7年）による定額法により按分し、発生の翌連結会計年度から費用処理することとしております。

5 【経営上の重要な契約等】

該当事項はありません。

6 【研究開発活動】

特記すべき事項はありません。

第3 【設備の状況】

1 【設備投資等の概要】

当連結会計年度の設備投資については、前連結会計年度に引き続き設備の更新及び事業系システムの追加開発を行ったことに加えて、リモートワーク等に対応したオフィスファシリティ等への投資を行っていた反動で前連結会計年度（382,130千円）に比べ大幅に減少し、138,439千円となりました。

なお、設備投資には、ハードウェア及びソフトウェアを含むシステム投資が含まれております。

ITセグメント 設備投資額 18,692千円
動画スタジオのリノベーション及び事業系システムのソフトウェア等
音楽セグメント 設備投資額 41,575千円
事業系システムのソフトウェア等
デザインセグメント 設備投資額 1,350千円
事業系システムのソフトウェア
山岳・自然セグメント 設備投資額 30,037千円
事業系システムのソフトウェア等
モバイルセグメント 設備投資額 204千円
パソコン
その他 設備投資額 33,659千円
パソコン及び事業系システムのソフトウェア
本社 設備投資額 12,919千円
建物附属設備、什器、パソコン及び基幹システムのソフトウェア等

2 【主要な設備の状況】

(1) 提出会社

2023年3月31日現在

事業所名 (所在地)	セグメント の名称	設備の内容	建物 (千円)	器具備品 (千円)	ソフトウェア (千円)	合計 (千円)	従業員数 (人)
本社 (東京都千代田区)	全社	事務所、什器、パソコン	161,592	197,631	36,293	395,517	44

- (注) 1. 「全社」は、特定のセグメントに区分できない管理部門等であります。
2. 2022年7月に実施した(株)Impress Professional Works (現在の(株)IPGネットワーク)の吸収分割により、当社グループの経営管理機能を当社へ承継したことにより、設備及び従業員数が増加しております。
3. 上記の他、連結会社以外から賃借している設備は、以下のとおりであります。

2023年3月31日現在

事業所名 (所在地)	セグメントの名称	設備の内容	年間賃借料 及びリース料 (千円)
本社 (東京都千代田区)	全社	建物 (賃借)	271,027

- (注) 「全社」は、特定のセグメントに区分できない管理部門等であります。

(2) 国内子会社

2023年3月31日現在

会社名	事業所名 (所在地)	セグメント の名称	設備の内容	建物 (千円)	器具備品 (千円)	ソフトウェア (千円)	合計 (千円)	従業員数 (人)
(株)リットー ミュージック	本社 (東京都千代田区)	音楽	スタジオ、音響設備、事業用システム	4,402	1,201	133,085	138,688	91
(株)インプレス	本社 (東京都千代田区)	IT	事務所、パソコン、事業用システム	4,498	725	78,038	83,262	240

- (注) 1. 「全社」は、特定のセグメントに区分できない管理部門等であります。
2. 建物は、パーティション等の建物附属設備であります。
3. ソフトウェアにはソフトウェア仮勘定を含めております。
4. 上記の他、連結会社以外から賃借している設備は、以下のとおりであります。

2023年3月31日現在

会社名	事業所名 (所在地)	セグメントの名称	設備の内容	年間賃借料 及びリース料 (千円)
(株)Impress Professional Works (現在の(株)IPGネットワーク)	本社 (東京都千代田区)	全社	建物 (賃借)	93,771

- (注) 1. 「全社」は、特定のセグメントに区分できない管理部門等であります。
2. (株)Impress Professional Works (現在の(株)IPGネットワーク)が賃借していた期間は、2022年6月末までの期間であります。

3 【設備の新設、除却等の計画】

当社グループの設備投資については、個別会社又は事業プロジェクトごとに策定しておりますが、開発期間等の不確定な要素があることや、個々のプロジェクトに対する投資額の重要性が高くないことから、セグメントごとの数値を開示する方法によっております。

当連結会計年度後1年間の設備投資計画(新設・拡充)は、261,900千円であり、セグメントごとの内訳は次のとおりであります。

セグメントの名称	投資予定総額 (千円)	設備の内容	資金調達方法
IT	60,000	事業用設備等	自己資金
音楽	21,000	事業系システム開発等	自己資金
山岳・自然	65,000	事業系システム開発等	自己資金
航空・鉄道	5,000	事業系システム開発等	自己資金
その他	68,500	事業系システム開発等	自己資金
全社	42,400	インフラ設備、基幹システム等	自己資金
合計	261,900	-	-

(注) 1. 上記設備投資は今後も継続的に開発を行う予定であり、記載の投資予定額は2024年3月期の予算であります。

2. システム投資の設備内容には、ソフトウェアが含まれております。

3. 「全社」は、特定のセグメントに区分できない管理部門等であります。

4. 重要な設備の除売却の計画はありません。

第4 【提出会社の状況】

1 【株式等の状況】

(1) 【株式の総数等】

【株式の総数】

種類	発行可能株式総数(株)
普通株式	124,056,000
計	124,056,000

【発行済株式】

種類	事業年度末現在 発行数 (株) (2023年3月31日)	提出日現在 発行数 (株) (2023年6月26日)	上場金融商品取引所名 又は登録認可金融商品 取引業協会名	内容
普通株式	37,371,500	37,371,500	東京証券取引所 スタンダード市場	単元株式数100株
計	37,371,500	37,371,500		

(2) 【新株予約権等の状況】

【ストックオプション制度の内容】

該当事項はありません。

【ライツプランの内容】

該当事項はありません。

【その他の新株予約権等の状況】

該当事項はありません。

(3) 【行使価額修正条項付新株予約権付社債券等の行使状況等】

該当事項はありません。

(4) 【発行済株式総数、資本金等の推移】

年月日	発行済株式 総数増減数 (株)	発行済株式 総数残高 (株)	資本金増減額 (千円)	資本金残高 (千円)	資本準備金 増減額 (千円)	資本準備金 残高(千円)
2014年6月23日 (注)1	-	37,371,500	-	5,341,021	1,709	8,888

(注) 2014年3月期期末配当に係る資本準備金の積立であります。

(5) 【所有者別状況】

2023年3月31日現在

区分	株式の状況(1単元の株式数100株)								単元未満株式の状況(株)
	政府及び地方公共団体	金融機関	金融商品取引業者	その他の法人	外国法人等		個人その他	計	
					個人以外	個人			
株主数(人)	-	10	22	49	26	13	10,484	10,604	-
所有株式数(単元)	-	86,843	4,246	98,181	47,720	21	134,949	371,960	175,500
所有株式数の割合(%)	-	23.35	1.14	26.40	12.83	0.01	36.28	100.00	-

(注) 1. 自己株式3,540,159株は、「個人その他」に35,401単元及び「単元未満株式の状況」に59株を含めて記載しております。

2. 上記「その他の法人」及び「単元未満株式の状況」の欄には、証券保管振替機構名義の株式が、それぞれ31単元及び60株含まれております。

(6) 【大株主の状況】

2023年3月31日現在

氏名又は名称	住所	所有株式数(株)	発行済株式(自己株式を除く。)の総数に対する所有株式数の割合(%)
(有)T&Co.	東京都港区南青山4-17-49	9,350,000	27.64
塚本 慶一郎	東京都港区	7,413,200	21.91
BNYM AS AGT/CLTS NON TREATY JASDEC (常任代理人 (株)三菱UFJ銀行)	240 GREENWICH STREET, NEW YORK, NEW YORK 10286, U.S.A. (東京都千代田区丸の内2-7-1)	4,081,300	12.06
日本マスタートラスト信託銀行(株) (信託口)	東京都港区浜松町2-11-3	1,519,300	4.49
(株)日本カストディ銀行(信託口)	東京都中央区晴海1-8-12	506,100	1.50
唐島 夏生	東京都大田区	324,568	0.96
インプレスグループ従業員持株会	東京都千代田区神田神保町1-105	319,020	0.94
土田 米一	東京都世田谷区	205,232	0.61
THE BANK OF NEW YORK MELLON 140042 (常任代理人 (株)みずほ銀行)	240 GREENWICH STREET, NEW YORK, NY 10286, U.S.A. (東京都港区港南2-15-1)	181,800	0.54
井芹 昌信	東京都渋谷区	156,065	0.46
計		24,056,585	71.11

(注) 1. 上記塚本慶一郎氏の所有株式数には、2018年5月28日付けで締結した管理信託契約に伴い(株)SMBC信託銀行が保有している株式数(2023年3月31日現在6,613,200株)を含めて表記しております。

2. 上記日本カストディ銀行(株)の所有株式数は信託業務に係る株式数であります。

3. 上記日本マスタートラスト信託銀行(株)の所有株式数は信託業務に係る株式数であります。

4. 上記のほか自己株式3,540,159株を保有しております。

5. 2023年4月21日付で公衆の縦覧に供されている大量保有報告書に係る変更報告書において、MIRI Capital Management LLC が2023年4月14日現在で以下の株式を所有している旨が記載されているものの、当社として当連結会計年度末現在における実質所有株式数の確認ができませんので、上記大株主の状況には含めておりません。

なお、当該大量保有報告書の内容は以下のとおりであります。

氏名又は名称	住所	保有株券等の数	株券等保有割合
--------	----	---------	---------

MIRI Capital Management LLC	アメリカ合衆国マサチューセッツ州02116ボストン、ボイルトン・ストリート745、スイート301	4,251,400株	11.38%
-----------------------------	--	------------	--------

(7) 【議決権の状況】

【発行済株式】

2023年3月31日現在

区分	株式数(株)	議決権の数(個)	内容
無議決権株式			
議決権制限株式(自己株式等)			
議決権制限株式(その他)			
完全議決権株式(自己株式等)	(自己保有株式) 普通株式 3,540,100		
完全議決権株式(その他)	普通株式 33,655,900	336,559	
単元未満株式	普通株式 175,500		
発行済株式総数	37,371,500		
総株主の議決権		336,559	

(注) 「完全議決権株式(その他)」欄の普通株式には、証券保管振替機構名義の株式が3,100株含まれております。また、「議決権の数」欄には、同機構名義の完全議決権株式に係る議決権の数31個が含まれております。

【自己株式等】

2023年3月31日現在

所有者の氏名 又は名称	所有者の住所	自己名義 所有株式数 (株)	他人名義 所有株式数 (株)	所有株式数 の合計 (株)	発行済株式 総数に対する 所有株式数 の割合(%)
(自己保有株式) 株インプレス ホールディングス	東京都千代田区神田神保 町一丁目105番地	3,540,100	-	3,540,100	9.47
計		3,540,100	-	3,540,100	9.47

2 【自己株式の取得等の状況】

【株式の種類等】 会社法第155条第7号に該当する普通株式の取得

(1) 【株主総会決議による取得の状況】

該当事項はありません。

(2) 【取締役会決議による取得の状況】

該当事項はありません。

(3) 【株主総会決議又は取締役会決議に基づかないものの内容】

区分	株式数(株)	価額の総額(円)
当事業年度における取得自己株式	3,220	678,260
当期間における取得自己株式(注1)	500	109,620

(注1) 当期間における取得自己株式には、2023年6月1日からこの有価証券報告書提出日までの単元未満株式の買取りによる株式は含まれておりません。

(4) 【取得自己株式の処理状況及び保有状況】

区分	当事業年度		当期間	
	株式数(株)	処分価額の総額 (円)	株式数(株)	処分価額の総額 (円)
引き受ける者の募集を行った 取得自己株式	377,484	67,316,722	-	-
消却の処分を行った取得自己株式	-	-	-	-
合併、株式交換、株式交付、 会社分割に係る移転を行った 取得自己株式	-	-	-	-
その他	-	-	-	-
保有自己株式数(注)	3,540,159	-	3,540,659	-

(注) 当期間における保有自己株式には、2023年6月1日からこの有価証券報告書提出日までの単元未満株式の買取りによる株式は含まれておりません。

3 【配当政策】

当社の内部留保及び株主の皆様への利益配分については、以下を基本方針としております。

株主の皆様への利益配分につきましては、グループ全体の財務体質の強化と新規成長投資のための内部留保を総合的に勘案し、配当、自己株式の買入れ等具体的な施策を決定する所存であります。

配当につきましては、毎期着実に利益を生み出せるように努め、業績及び財務状況に応じた利益配当を行うことを基本方針としております。また、配当の基準といたしましては、連結株主資本やキャッシュ・ポジションの状況から最低限の配当を確保した上で、親会社株主に帰属する当期純利益の20%を配当性向の基準として(単体)当期純利益及び財務状況を加味し、配当金額を決定することといたします。

当社は、2006年6月24日開催の第14期定時株主総会において、会社法第459条第1項に基づく剰余金の配当等が取締役会決議により行えるよう定款変更しております。

なお、配当回数につきましては、当社財務状況及び事業の季節変動性等を勘案し、年1回の期末配当を基本的な考え方としております。

上記の基本方針に照らし、2023年5月11日開催の取締役会において当事業年度の剰余金の配当につき次のとおり決議いたしました。

株主に対する配当財産の割当てに関する事項及びその総額

当社普通株式1株につき金5.00円 総額169,156千円

基準日

2023年3月31日

剰余金の配当が効力を生じる日

2023年6月26日

なお、2024年3月期以降につきましては、2023年5月11日開催の取締役会において、以下概要を基本方針とする決議をいたしました。

当社は、株主の皆様への利益還元を重要な経営上の施策の一つとして認識し、財務体質の強化や成長投資、内部留保を総合的に勘案し、配当や自己株式取得を含む総還元性向を重視した株主還元を実施していく方針です。

配当につきましては、連結当期純利益に対する配当性向30%を基準として、キャッシュ・ポジションの状況や投資計画、業績動向等を総合的に勘案し配当金額を決定してまいります。また、自己株式取得につきましても利益還元策の一環として実施を検討してまいります。

4 【コーポレート・ガバナンスの状況等】

(1) 【コーポレート・ガバナンスの概要】

コーポレート・ガバナンスに関する基本的な考え方

当社グループは、継続的な企業価値の向上に向けて、経営スピードを高めるために、環境変化に合わせた機動的な組織づくりが可能な分社経営体制をとっております。また、持株会社である当社を中心としたグループ経営のモニタリング体制の充実を図り、コーポレートガバナンス・コードの各原則を踏まえた必要な体制整備及び諸施策の実施により、当社の企業理念である「面白いことを創造し、知恵と感動を共有する」を担う自律的で多様な文化を形成促進していくことをコーポレート・ガバナンスの基本方針としております。

企業統治の体制の概要及び当該体制を採用する理由

当社は経営の監督と業務の執行を分離した持株会社体制のもと、監査役会設置会社形態をとっており、加えて、より公正かつ透明性の高い役員を選考及び報酬制度を実現すべく、独立社外役員を主要な構成員とした任意の諮問機関として指名委員会及び報酬委員会を設置しております。

指名委員会は、取締役及び監査役の選任及び解任に関する株主総会の議案の内容について、当該議案の確定前に検討し、取締役会に勧告を行っております。また、役員候補者の選定に関する基準及び社外役員の独立性に関する基準の内容、代表取締役及び役付取締役の選定並びに各取締役の業務分掌につき、取締役会に勧告を行っております。

報酬委員会につきましては、取締役の報酬等に関する基準及び個人別の報酬等の内容について検討し、取締役会に勧告を行っております。

取締役会は、指名委員会及び報酬委員会からの勧告を尊重するものとし、勧告に従わなかった場合は、各委員会にその理由を説明しなければならないものとしております。

指名委員会：委員長 藤倉尚（社外取締役）、委員 松本伸也（社外監査役）、
委員 九里和男（社外監査役）、委員 唐島夏生（取締役会長）、
委員 松本大輔（代表取締役社長）

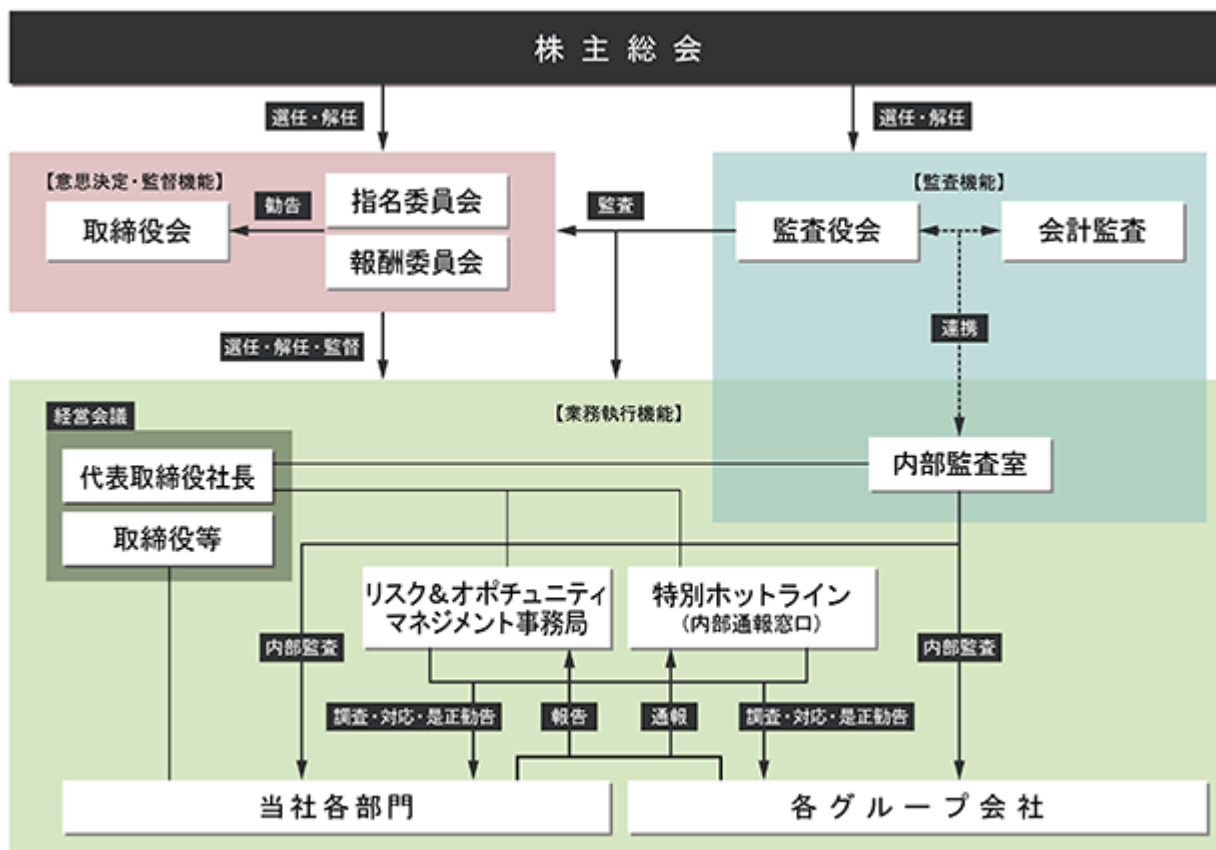
報酬委員会：委員長 白石徹（社外取締役）、委員 松本伸也（社外監査役）、
委員 九里和男（社外監査役）、委員 唐島夏生（取締役会長）
委員 松本大輔（代表取締役社長）

当社グループ会社の業務執行に関する監督体制としましては、当社代表取締役に任命された取締役等が当該グループ会社の経営及び財務状況を当社代表取締役に定期的に報告するとともに、グループ会社の重要な経営情報につきましては、当社執行役員および各部門長により、当社代表取締役に報告が行われる体制となっております。

当社取締役につきましては、経営監視機能の強化を目的に独立役員の適合性を有する社外取締役を選任するとともに、経営責任を明確にする目的で任期を1年としております。また、経営と業務の執行責任を分離する目的で当社は執行役員制度を導入しており、業務に関する責任と権限を明確化し、業務統制の向上を図っております。監査役につきましては、監査機能の強化を目的に独立役員の適合性を有し、税理士/弁護士の資格を持つ専門家を含め、社外監査役を2名選任しております。取締役会は毎月1回以上開催、監査役会は3ヶ月に1度以上開催されるとともに、監査役は取締役会に参加し、取締役の職務執行について実効のある監視機関として機能しております。

なお、当社は、取締役及び監査役の責任について、取締役(業務執行取締役等を除く。)及び監査役がその職務の遂行にあたって期待される役割を十分発揮できるよう、取締役会の決議により、会社法第423条第1項に定める賠償責任を法令の限度において免除できる旨を定款で定めており、当該契約を社外取締役及び監査役と締結しております。

コーポレート・ガバナンス体制図



企業統治に関するその他の事項

当社は、会社法第362条第4項第6号に従い、業務の適正を確保する体制(内部統制システム)の整備に関する基本方針を次のとおり定め、企業倫理、コンプライアンス体制、リスクマネジメント体制等の内部統制システムを整備・運用しております。

1. 取締役・使用人の職務執行が法令・定款に適合することを確保するための体制

- ・当社代表取締役は、法令遵守及び社会倫理の遵守を企業活動の前提とすることにつき、その精神を繰り返し当社グループの役職員に伝えることにより徹底するものとする。
- ・当社代表取締役は、コンプライアンス戦略を策定する当社取締役又は執行役員を任命し、当社グループの「コンプライアンス規程」に従い当社グループのコンプライアンス体制を維持・向上を推進するものとする。
- ・当社グループは、市民社会の秩序や安全に脅威を与える反社会的勢力との取引ならびにその不当な要求に対しては一切応じないものとする。

2. 取締役の職務執行に係る情報の保存及び管理に関する事項

当社代表取締役は、取締役の職務執行に係る情報の保存及び管理につき統括する情報管理責任者を任命し、その者をして、「情報管理規程」に従い、当社グループの職務執行に係る情報を文書または電磁的媒体に記録し、保存させる体制を構築する。

3. 損失の危険の管理に関する規程その他の体制

- ・当社代表取締役は、リスクマネジメントを所管する当社取締役又は執行役員を任命し、当社グループの「リスク&オポチュニティマネジメント規程」に従い当社グループのポジティブリスク及びネガティブリスクのマネジメントに関する体制の整備及び問題点の把握に努める。その実施にあたっては、ポジティブリスク及びネガティブリスクのマネジメントを所管する当社取締役又は執行役員が任命する担当者と構成されるリスク&オポチュニティマネジメント事務局が、リスクマネジメント上の重要な問題を審議し、その結果を取締役会及び監査役会に報告する。

- ・グループ各社においては、各社社長が各社のリスク&オポチュニティマネジメント責任者を任命し、ポジティブリスク及びネガティブリスクのマネジメント体制の整備及び問題点の把握に努める。また、各社社長は、各社のリスク&オポチュニティマネジメント担当者を選任し、同担当者をして、リスク&オポチュニティマネジメント事務局と共同で、各社固有のリスクの分析と、その対策の具体化にあたらせる。
 - ・当社グループの役職員がリスクマネジメント上の問題を発見した場合は、すみやかに各社リスク&オポチュニティマネジメント責任者を通じてリスク&オポチュニティマネジメント事務局へ報告する。
4. 取締役の職務の執行が効率的に行われることを確保するための体制
- 社内規程の定めに基づく、職務権限及び意思決定ルールにより、適正かつ効率的に職務の執行が行われる体制をとるものとする。
5. 当社及び子会社からなる企業集団における業務の適正を確保するための体制
- ・当社グループにおける内部統制の充実を目指し、当社代表取締役は、当社グループの内部統制の維持・改善を統括する責任者及び責任者を補助する担当者を当社取締役又は執行役員の中から任命するとともに、その者をして当社グループ間での内部統制に関する協議、情報の共有化、指示・要請の伝達等が効率的に行われるシステムを含む体制を促進させるものとする。
 - ・内部監査室は、関係部門と連携し、当社グループに対する内部監査を行うものとする。
 - ・当社の「関係会社管理規程」に従い、当社代表取締役に任命された取締役等は、当社代表取締役に自社または担当する会社の経営及び財務状況を定期的に報告するものとする。
6. 監査役会がその補助すべき使用人を置くことを求めた場合における当該使用人に関する体制
- ・監査役会の職務を補助する組織を当社の内部監査室及び社長室とする。
 - ・補助者の人事異動については、監査役会の意見を尊重するものとし、当該補助者は、監査役会の指示に基づき監査役会の職務を補助するものとする。
7. 監査役会の職務の執行により生ずる費用に関する事項
- 監査役会の監査に係る諸費用については、当該監査の実効性を担保すべく予算を確保し、監査役会が職務の執行により費用の前払、もしくは支出した費用の精算等を請求した場合、社内規程に基づき支払うものとする。
8. 取締役・使用人が監査役会に報告するための体制その他の監査役会への報告に関する体制
- ・取締役及び使用人等は、取締役会、経営会議、その他の重要な会議への監査役会の出席を通じて職務の執行状況を報告し、内部監査室は、監査結果を監査役会に報告する。このほか、監査役からの求めに応じ、業務及び財産の状況を報告する。
 - ・当社グループの役職員は、法令・定款等のコンプライアンス上の重要な事項、会社に著しい影響を及ぼす恐れのあるリスクマネジメント上の重要な事項に関する事実を発見した場合には、常勤監査役に直接報告することができるものとする。当社グループは、当該報告者に対し、人事制度上その他の不利益な取扱いをせず、また、他の役職員による当該報告者に対する嫌がらせまたは不利益な取扱いを禁ずる。
9. その他監査役会の監査が実効的に行われることを確保するための体制
- 常勤監査役による代表取締役、取締役、執行役員及び重要な各使用人からの個別ヒアリングの機会を設けるとともに、監査役会、会計監査人、非業務執行取締役および内部監査室との間で定期的に監査に関する意見交換会を実施する。
10. 定款に定めている事項
- ・取締役の定数
- 当社の取締役は7名以内とする旨を定款で定めております。
- ・剰余金の配当等
- 当社は、剰余金の配当等について、株主への機動的な利益還元ができるよう、取締役会の決議により、会社法第459条第1項各号に掲げる事項を定めることができる旨及び同条同項各号に掲げる事項を株主総会の決議によっては定めない旨を定款で定めております。
- ・取締役選任の決議要件
- 当社は、株主総会の取締役選任決議について、議決権を行使することができる株主の議決権の3分の1以上を有する株主が出席し、その議決権の過半数をもって行う旨及び累積投票によらない旨を定款で定めております。

- ・取締役及び監査役の責任免除

当社は、取締役(業務執行取締役等であるものを除く)及び監査役の責任について、取締役及び監査役がその職務の遂行にあたって期待される役割を十分発揮できるよう、取締役会の決議により、会社法第423条第1項に定める賠償責任を法令の限度において免除できる旨を定款で定めております。

- ・株主総会の特別決議要件

当社は、会社法第309条第2項に定める株主総会の特別決議要件について、議決権を行使することができる株主の議決権の3分の1以上を有する株主が出席し、その議決権の3分の2以上をもって行う旨を定款に定めております。これは、株主総会における特別決議の定足数を緩和することにより、株主総会の円滑な運営を行うことを目的とするものであります。

取締役会の活動状況

2023年3月期取締役会開催回数：14回

	出席回数	出席率
取締役会長 唐島夏生	14回	100.00%
代表取締役社長 松本大輔	14回	100.00%
取締役副社長 塚本由紀	14回	100.00%
取締役副社長 山手章弘	14回	100.00%
社外取締役 白石徹	14回	100.00%
社外取締役 藤倉尚	13回	92.86%

(注) 上記のほか、会社法第370条に基づき取締役会決議があったものとみなす書面決議を1回行っております。

具体的な検討事項につきましては、以下のとおりであります。

- ・ 株主総会に関する事項
- ・ 決算に関する事項
- ・ 自己株式処分に関する事項
- ・ グループ及び当社の経営方針に関する事項
- ・ 新規事業計画、経営上重要な業務提携
- ・ 組織再編等事業に関する事項
- ・ 人事・組織に関する事項
- ・ 指名委員会からの勧告に基づく取締役候補者の決定、代表取締役及び役付取締役の選定
- ・ 報酬委員会からの勧告に基づく取締役の個人別報酬の委任に関する事項
- ・ 「サステナビリティ基本方針」等各種方針・規程等の制改定に関する事項の審議・決定

なお、定期的に、取締役、執行役員、使用人から内部統制、コンプライアンス、リスクマネジメント等について取締役会に報告がなされ、取締役会において内部統制システムの運用状況の確認を行っております。

指名委員会の活動状況

2023年3月期指名委員会開催回数：2回

	出席回数	出席率
委員長 藤 倉 尚	2回	100.00%
委員 松 本 伸 也	2回	100.00%
委員 九 里 和 男	2回	100.00%
委員 唐 島 夏 生	2回	100.00%
委員 松 本 大 輔	2回	100.00%

具体的な検討事項につきましては、以下のとおりであります。

- ・ 当社取締役及び監査役の選解任に関する株主総会議案の事前検討
- ・ 子会社取締役及び監査役の選解任の検討
- ・ 当社代表取締役の後継者計画に関する検討
- ・ 上記事項の取締役会への勧告

報酬委員会の活動状況

2023年3月期報酬委員会開催回数：4回

	出席回数	出席率
委員長 白 石 徹	4回	100.00%
委員 松 本 伸 也	4回	100.00%
委員 九 里 和 男	4回	100.00%
委員 唐 島 夏 生	4回	100.00%
委員 松 本 大 輔	4回	100.00%

具体的な検討事項につきましては、以下のとおりであります。

- ・ 取締役の報酬等に関する基準及び個人別報酬等の内容について検討
- ・ 取締役の譲渡制限付株式報酬制度の改定等についての検討
- ・ 上記事項の取締役会への勧告

(2) 【役員の状況】

役員一覧

男性 8名 女性 1名 (役員のうち女性の比率11.1%)

役職名	氏名	生年月日	略歴		任期	所有株式数(株)
取締役会長	唐島 夏生	1959年8月17日生	2000年10月 2004年10月 2011年6月 2013年6月 2013年6月 2015年7月 2016年6月 2019年6月 2020年6月 2020年6月 2020年6月 2020年6月	当社入社 グループ管理本部本部長兼人事部部長 ㈱エフエム東京 専務取締役 ㈱エフエム大阪 代表取締役会長 当社取締役 当社執行役員CAO 当社代表取締役社長 ㈱エフエム東京 取締役相談役 東京メトロポリタンテレビジョン㈱ 取締役(現任) 当社取締役会長(現任) ㈱エフエム大阪 取締役相談役(現任) ㈱エフエム東京 代表取締役会長(現任)	(注) 1	324,568
代表取締役社長	松本 大輔	1973年9月8日生	1996年4月 2016年6月 2017年4月 2018年4月 2019年6月 2020年6月 2020年6月 2022年9月	㈱リットーミュージック入社 同社取締役 同社取締役副社長 同社代表取締役社長(現任) 当社執行役員 当社代表取締役社長(現任) Impress Business Development(同) 職務執行者(現任) 株式会社ICE代表取締役社長(現任)	(注) 1	86,781
取締役副社長	塚本 由紀	1980年6月2日生	2004年4月 2011年1月 2017年6月 2020年6月	ソシオメディア㈱入社 有限会社T&Co. 取締役(現任) 当社取締役 当社取締役副社長(現任)	(注) 1	42,385
取締役副社長	山手 章弘	1964年3月20日生	1996年7月 2001年12月 2008年5月 2008年6月 2020年6月 2021年8月	当社入社 当社グループ経理部部長 当社執行役員CFO 当社取締役 当社取締役副社長(現任) イカロス出版㈱ 代表取締役社長(現任)	(注) 1	128,318
取締役	白石 徹	1957年10月25日生	1999年12月 2015年7月 2015年9月 2016年6月 2018年11月 2020年11月 2021年4月	当社取締役 Sコンサルティング(有) 代表取締役(現任) ㈱ティーネットジャパン 社外取締役(現任) 当社取締役(現任) ㈱セレーボレーション 社外監査役(現任) Nextage㈱ 社外取締役(現任) ㈱バンカーズ・ホールディング 社外取締役(現任)	(注) 1	-
取締役	藤倉 尚	1967年12月11日生	1992年4月 2008年4月 2012年1月 2014年1月 2016年6月 2020年6月	ポリドール㈱(現 ユニバーサルミュージック(同))入社 同社執行役員 ユニバーサルシグママネージング・ディレクター 同社副社長兼執行役員 邦楽統括 同社社長兼最高経営責任者(現任) (一社)日本レコード協会 副会長(現任) 当社取締役(現任)	(注) 1	-
常勤監査役	佐々木 敬	1952年3月15日生	2006年11月 2013年6月	当社入社、内部監査室室長 当社常勤監査役(現任)	(注) 2	-
監査役	松本 伸也	1959年8月12日生	1987年4月 1996年7月 2001年6月 2007年6月 2011年10月 2013年6月	弁護士登録(第二東京弁護士会) 丸の内総合法律事務所入所 同事務所パートナー(現任) 当社監査役(現任) 澁澤倉庫㈱ 社外取締役(現任) 同事務所 代表弁護士(現任) 大平洋金属㈱ 社外取締役(現任)	(注) 3	3,000

役職名	氏名	生年月日	略歴		任期	所有株式数(株)
監査役	九里 和男	1956年1月8日生	2009年7月 2014年7月 2015年7月 2016年8月 同年8月 2017年6月 2020年6月	萩税務署 署長 東京国税局 調査第一部 次長(特官担当) 京橋税務署 署長 税理士登録(東京税理士会) 九里和男税理士事務所 開所 当社補欠監査役 当社監査役(現任)	(注)3	-
計						585,052

- (注) 1. 2023年6月23日開催の定時株主総会の終結の時から1年間
2. 2021年6月22日開催の定時株主総会の終結の時から4年間
3. 2020年6月23日開催の定時株主総会の終結の時から4年間
4. 取締役 白石徹及び藤倉尚は、社外取締役であります。
5. 監査役 松本伸也及び九里和男は、社外監査役であります。
6. 取締役 塚本由紀の戸籍上の氏名は、久松由紀であります。
7. 所有株式数は、2023年3月31日現在です。
8. 当社では、取締役会の意思決定・業務執行の監督機能と各部門の業務執行を明確に区分し、経営効率の向上と業務執行の迅速化を図るため、執行役員制度を導入しております。執行役員は、7名で、二宮宏文、有田健二、佐々木一幸、井上里奈、山口隆正、中村健一、小川亨で構成されております。

社外役員の状況

1. 社外取締役及び社外監査役の状況

当社は、取締役会の経営監視機能の強化を目的に、当社と特別な利害関係のない社外取締役2名、社外監査役2名を選任しており、東京証券取引所の定めに基づき独立役員として指定し、同取引所に届出を行っております。

2. 人的関係、資本関係または取引関係その他利害関係

当社との関係につきましては、当連結会計年度末現在において全社外役員で保有する当社株式は3,000株であります。また、社外監査役である松本伸也氏は丸の内総合法律事務所のパートナー代表弁護士であり、同事務所と当社との間には法律顧問契約があります。

なお、経営上の重要事項及びリスク情報、内部監査及び監査役監査、会計監査の状況については、取締役会及び監査役会に適宜報告を行っております。

3. 社外取締役及び社外監査役の選任基準と独立性に関する考え方

当社は、社外取締役及び社外監査役の選任にあたっての方針としましては、社外取締役については、さまざまな経営経験・ビジネス知識等を活かし、当社経営全般に対する監督・助言をいただける人物であることを選任の方針としております。社外監査役については、監査機能を発揮するに必要な専門知識を有している人物であることを選任の方針としております。

また当社においては、社外取締役又は社外監査役を選任するための会社からの独立性を定めており、下記イ～ホの事項に該当しない場合、当社の経営陣から独立した中立の立場として独立性を有すると判断しております。

イ. 社外役員自ら又は社外役員が業務執行取締役、執行役員もしくは使用人(以下、総称して「業務執行者」という)である法人と当社又は当社の子会社(以下、総称して「当社等」という)の間において、多額の取引がある場合。

ロ. 当社等からの役員報酬以外に高額の報酬を受領しているコンサルタント、公認会計士等の会計専門家、弁護士等の法律専門家(当該財産を得ている者が法人、組合等の団体である場合は、当該団体に所属する者を含む)の場合。

ハ. 当社の会計監査人に所属する者の場合。

ニ. 当社の議決権の10%以上を保有している株主又はその株主において業務執行者である場合。

ホ. 上記イからニに該当する2親等以内の親族がいる場合。但し、ロ及びハに掲げる者については、当該親族が重要な業務執行者及び公認会計士、弁護士等の専門的な資格を有する者である場合に限る。

注1：多額の取引は、当社等と取引先間の年間取引額が次のいずれかに該当するものを想定しています。

当社等の連結売上高の2%超

取引先の連結売上高(連結決算を実施していない取引先は、単体の売上高)の10%超

注2：高額の報酬は、過去4事業年度において総額5,000万円超の報酬を想定しています。

社外取締役又は社外監査役による監督又は監査と内部監査、監査役監査及び会計監査との相互連携並びに内部統制部門との関係

社外取締役は取締役会、社外監査役は取締役会及び監査役会等の重要な会議に出席し、監督又は監査を行っております。

監査役監査につきましては、監査役会において、監査基準、監査方針、監査計画等の決定を行い、各監査役は、毎月開催の取締役会に出席し、経営の執行状況の把握・監視を行っております。常勤監査役は、取締役会をはじめ経営会議等重要な会議へ出席し、取締役、会計監査人、リスク&オポチュニティマネジメント事務局長、内部監査室、執行役員、その他重要な使用人との間で情報交換を行うとともに業務執行状況の監査を行い、監査役会に定期的に報告をすることで、取締役会の職務執行状況ならびに内部統制システムの整備及び運用状況を把握できる体制になっております。

内部監査体制は、当社代表取締役の直属部門として独立性を保った内部監査室(2名)を設置しており、連結子会社を対象範囲に含め、内部監査規程に基づいた内部監査を実施しております。

監査役会、非業務執行取締役、内部監査室、会計監査人であるEY新日本有限責任監査法人は、定期的に意見交換を行い、連携を強めることで、監査の実効性を高めております。

(3) 【監査の状況】

監査役監査の状況

監査役監査につきましては、監査役会において、監査基準、監査方針、監査計画等の決定を行い、各監査役は、毎月開催の取締役会に出席し、経営の執行状況の把握・監視を行っております。

当事業年度において、当社は監査役会を5回開催しており、個々の監査役の出席状況につきましては、以下のとおりであります。

	出席回数	出席率
常勤監査役 佐々木 敬	5回	100.00%
社外監査役 松本 伸也	5回	100.00%
社外監査役 九里 和男	5回	100.00%

監査役会における具体的な検討事項につきましては、以下のとおりであります。

- ・ 監査方針及び監査計画の策定
- ・ 上記に基づく当社ならびにその子会社の取締役会及び経営会議の取締役の職務執行の妥当性
- ・ 内部統制システムの整備運用状況
- ・ 事業報告及び附属明細書の適法性
- ・ 会計監査人の監査の方法及び結果の相当性

常勤監査役につきましては、取締役会に限らず経営会議等の重要な意思決定が行われる会議へ出席するほか、定期的に業務執行者へのヒアリングを実施する等、業務執行状況の監査を行っております。

具体額的な検討事項につきましては、以下のとおりであります。

- ・ 監査役の報酬等協議
- ・ 監査方針、計画の策定
- ・ 監査業務分担の審議、決定
- ・ 監査費用予算等の審議、決定
- ・ 会計監査人報酬決定の同意審議

また、監査役会、非業務執行取締役、内部監査室、会計監査人であるEY新日本有限責任監査法人は、定期的に意見交換を行い、連携を強めることで、監査の実効性を高めております。

なお、常勤監査役佐々木敬は2006年11月から6年にわたり当社内部監査室室長を務め、社外監査役の松本伸也は弁護士の資格を、社外監査役の九里和男は税理士の資格を有しております。

内部監査の状況

当社グループの内部監査体制は、当社代表取締役の直属部門として独立性を保った内部監査室(2名)を設置しており、連結子会社を対象範囲に含め、内部監査規程に基づいた内部監査を実施しております。

内部監査室においては、当社代表取締役のみならず、当社ならびに被監査子会社の取締役に対しても直接報告を行っており、当社取締役ならびに監査役に年に2度以上監査内容について報告しております。

また、監査役会、非業務執行取締役、内部監査室、会計監査人であるEY新日本有限責任監査法人は、定期的に意見交換を行い、連携を強めることで、監査の実効性を高めております。

会計監査の状況

a. 監査法人の名称

EY新日本有限責任監査法人

b. 継続監査期間

24年間

c. 業務を執行した公認会計士

指定有限責任社員 業務執行社員：本多 茂幸、森田 祥且

d. 監査業務に係る補助者の構成

公認会計士5名、会計士試験合格者等4名、その他7名

e. 監査法人の選定方針と理由

当社の監査法人の選定方針は、当社グループに対し適正かつ厳格な監査業務を行い、独立性及び専門性を有し、かつ当社グループの業種や事業規模、業務内容に適した監査対応、監査費用の相当性を総合的に勘案し、当社の会計方針に精通している公認会計士による監査体制を確保していることとしております。EY新日本有限責任監査法人は、当社の選定方針を満たしており、かつ、同監査法人及び当社監査に従事する同監査法人の業務執行社員との間に特別な利害関係はなく、また、業務を執行した公認会計士で継続監査年数が7年を超える者はいないため、会社法及び金融商品取引法に基づく会計監査を依頼しております。

なお、会社計算規則第131条に定める会計監査人の職務の遂行に関する事項について、職務の遂行が適正に実施されることが確保できないと判断した場合、また、会社法第340条第1項に定められている解任事由に該当すると判断した場合には、監査法人の不再任・解任を行うものとしております。

f. 監査役及び監査役会による監査法人の評価

当社の監査役会は、EY新日本有限責任監査法人に対して評価を行っております。当社グループの財務・経理部門及び内部監査部門並びにEY新日本有限責任監査法人から、会計監査人としての独立性、監査体制及び監査の実施状況並びに品質等に関する情報を収集し、その結果、EY新日本有限責任監査法人の監査の方法と結果を相当と評価しております。

監査報酬の内容等

a. 監査公認会計士等に対する報酬

(単位：千円)

区分	前連結会計年度		当連結会計年度	
	監査証明業務に 基づく報酬	非監査業務に 基づく報酬	監査証明業務に 基づく報酬	非監査業務に 基づく報酬
提出会社	40,000	2,400	42,000	-
連結子会社	-	-	-	-
計	40,000	2,400	42,000	-

前連結会計年度における非監査業務の内容は以下のとおりであります。

イカロス出版(株)の全株式取得に対して、イカロス出版(株)の財政状態及び経営成績の妥当性評価のための合意された手続に対する報酬

b. 監査公認会計士等と同一のネットワークに対する報酬(a.を除く)

該当事項はありません。

c. その他の重要な監査証明業務に基づく報酬の内容

該当事項はありません。

d. 監査報酬の決定方針

当社の監査公認会計士等に対する監査報酬につきましては、期首に年度の監査報酬を協議しており、報酬額の検討にあたっては監査報酬の相対的水準、監査工数等を総合的に勘案しております。また、監査報酬については、監査役会での決議による同意を要し、代表取締役が決定し、取締役会に報告しております。

e. 監査役会が会計監査人の報酬等に同意した理由

監査役会は、会計監査人の監査計画の内容及び実績状況、報酬見積の算出根拠等を検討した結果、会計監査人の報酬等につき、会社法第399条第1項の同意を行っております。

(4) 【役員の報酬等】

役員の報酬等の額又はその算定方法の決定に関する方針に係る事項

当社では、2016年度に独立社外役員を過半数とする任意の報酬委員会を設置し、同委員会において取締役の報酬等に関する基準(以下、「役員報酬基準」といいます。)を検討し、取締役会において決議、制定しております。2020年6月23日開催の取締役会において、「役員報酬基準」に取締役の個人別の報酬等の内容の決定に関する方針を加える改定の決議をしております

当社の取締役の報酬は、継続的な企業価値の向上という経営目標に合わせて、その構成を決定しております。

業務執行取締役の報酬は、基本報酬、短期業績に対するインセンティブとしての業績賞与及び中長期的なインセンティブとしての株式報酬から構成することとし、毎期の持続的な業績向上に加え、中長期的な成長を動機づける設計となっております。

それぞれの職務や職責における役割や業績に関する責任の度合いに応じ、上位役位になるほど報酬の業績連動性が高まるようにしており、基本報酬に業績賞与の支給上限金額を加算した「想定年収」を定めたいうで、各報酬要素の概要は以下のとおりとしております。

基本報酬は、取締役としての職務や職責に応じ月額固定報酬として支給します。役位に応じて想定年収における基本報酬の割合を定めており、想定年収に対して、代表取締役及び取締役会長は80%、取締役副社長は85%、その他の業務執行取締役は90%が基本報酬となるよう定めております。

短期インセンティブとしての業績賞与は、その支給上限金額について、基本報酬と同様に役位ごとに想定年収における割合を定めており、代表取締役および取締役会長は20%、取締役副社長は15%、その他の業務執行取締役は10%としております。また、業績賞与の算定にあたっては、「収益力の強化」や「利益水準の向上」の実現に向けて「親会社株主に帰属する当期純利益の5%」を支給原資として、0から100%(=業績賞与支給上限額)の範囲で決定します。

なお、各取締役の想定年収については、「役員報酬基準」に従い、より客観的で透明性の高い報酬制度とな

るよう報酬委員会の勧告に基づき、取締役会において決議することとしております。

中長期的なインセンティブとしての株式報酬として、譲渡制限付株式報酬制度を設けております。譲渡制限付株式の付与対象となる各業務執行取締役への具体的な配分については、報酬委員会の勧告に基づき、取締役会において決議することとしております。

非業務執行取締役及び社外取締役については、基本報酬のみとしております。

監査役の報酬につきましては、その職務に鑑み、経営に対する独立性、客観性を重視する視点から、基本報酬である月額固定報酬のみとし、監査役の協議により決定しております。

取締役及び監査役の報酬等についての株主総会の決議に関する事項

取締役の報酬総額は、1996年6月21日開催の第4期定時株主総会において年額500百万円以内と決議されております。当該定時株主総会終結時点の取締役の員数は7名です。また、当該報酬総額の内枠として、2018年6月22日開催の第26期定時株主総会において、業務執行取締役に対する譲渡制限付株式付与のために金銭報酬債権として支給する報酬総額を年額100百万円以内、発行又は処分される当社の普通株式の総数を年300千株以内と決議されております。当該定時株主総会終結時点の業務執行取締役の員数は3名です。

監査役の報酬総額は、2000年5月1日開催の臨時株主総会において年額100百万円以内と決議されております。当該臨時株主総会終結時点の監査役の員数は3名です。

取締役の個人別の報酬等の内容の決定に係る委任に関する事項

取締役の個人別の報酬等の内容につきましては、取締役会が「役員報酬基準」に従い、より客観的で透明性の高い報酬制度となるよう報酬委員会に取締役の個人別の報酬等に係る意見を諮問し、報酬委員会の勧告に基づき、2022年6月23日開催の取締役会において審議し、代表取締役社長 松本大輔氏に個人別の報酬等の具体的な内容の決定を委任する旨の決議を行っております。その権限の内容は、取締役会において決議がなされた内容に従って取締役の個人別の金銭報酬額を決定することとしており、取締役会はその内容が「役員報酬基準」に沿うものであると判断しております。当該権限を委任した理由は、当社グループ全体を俯瞰しつつ、各取締役の担当領域や職責の評価を行うには代表取締役が最も適しているからであります。

業績連動報酬等に関する事項

取締役の業績向上に対する意欲や士気を一層高めることにより、企業価値の持続的向上を図るため、取締役に対して業績連動報酬等として賞与を支給しております。

業績連動報酬等の額の算定の基礎として選定した業績指標の内容は、親会社株主に帰属する当期純利益であり、当該業績指標を選定した理由は、株主利益と同じ指標にすることで、株主と同じ目線から「収益力の強化」や「利益水準の向上」を実現することにあります。

業績連動報酬等の額の算定方法は上述のとおりであり、当事業年度を含む親会社株主に帰属する当期純利益の推移は、「第1企業の概況 1 主要な経営指標等の推移 (1)連結経営指標等」に記載のとおりです。

非金銭報酬等の内容

取締役が株式保有を通じて、企業価値の持続的な向上を図るインセンティブを付与すると共に、株主の皆様と一層の価値共有を進めることを目的として、取締役に対して株式報酬を交付しております。

役員区分ごとの報酬等の総額、報酬等の種類別の総額及び対象となる役員の員数

(単位：千円)

役員区分	報酬等の総額	報酬等の種類別の総額			対象となる 役員の員数 (人)
		固定報酬	業績連動報酬	非金銭報酬等	
取締役 (社外取締役を除く)	116,835	97,808	9,396	9,630	4
監査役 (社外監査役を除く)	13,800	13,800	-	-	1
社外役員	21,600	21,600	-	-	4

(注) 非金銭報酬等は、譲渡制限付株式報酬制度に基づく当事業年度における費用計上額を記載しています。

役員ごとの連結報酬等の総額等

連結報酬等の総額が1億円以上である者が存在しないため、記載していません。

使用人兼務役員の使用人給与

使用人兼務役員である者が存在しないため、記載していません。

(5) 【株式の保有状況】

当社及び連結子会社のうち、投資株式の貸借対照表計上額（投資株式計上額）が最も大きい会社（最大保有会社）は当社であり、当社の株式の保有状況は以下のとおりであります。

投資株式の区分の基準及び考え方

当社は、保有目的が純投資目的である投資株式と純投資目的以外の目的である投資株式の区分については、次の基準で行っております。

純投資目的である投資株式：株式の価値の変動又は株式に係る配当によって利益を受けることを目的として保有する投資株式

純投資目的以外の目的である投資株式：パートナー企業との取引関係の維持、協業体制の強化による当社グループの中長期的な事業価値向上を目的として保有する投資株式

保有目的が純投資目的以外の目的である投資株式

a．保有方針及び保有の合理性を検証する方法並びに個別銘柄の保有の適否に関する取締役会等における検証の内容

当社は、パートナー企業との取引関係の維持、協業体制の強化による当社グループの中長期的な事業価値向上に限定した目的で、純投資目的以外の目的である投資株式の保有を行う方針であります。

当社は、純投資目的以外である投資株式について、取引及び協業状況などを勘案して保有の必要性を個別に検討し、その検討結果について取締役会へ報告を行うとともに検証を実施しております。

検証の結果、取引関係の維持や協業体制の強化に必要と認められるものであり、保有を継続しております。

b．銘柄数及び貸借対照表計上額

	銘柄数 (銘柄)	貸借対照表計上額の 合計額(千円)
非上場株式	12	170,421
非上場株式以外の株式	2	8,906

(当事業年度において株式数が増加した銘柄)

	銘柄数 (銘柄)	株式数の増加に係る取得 価額の合計額(千円)	株式数の増加の理由
非上場株式	-	-	-
非上場株式以外の株式	1	598	取引先持株会の会員としての取得による増加です。

(当事業年度において株式数が減少した銘柄)

該当事項はありません。

c. 特定投資株式及びみなし保有株式の銘柄ごとの株式数、貸借対照表計上額等に関する情報

特定投資株式

銘柄	当事業年度	前事業年度	保有目的、業務提携等の概要、定量的な保有効果及び株式数が増加した理由	当社の株式の保有の有無
	株式数(株) 貸借対照表計上額 (千円)	株式数(株) 貸借対照表計上額 (千円)		
(株)三洋堂ホールディングス	7,855	7,210	取引の維持、向上を目的として、継続して保有しております。 また、当事業年度における増加は、取引先持株会の会員としての取得によるものです。 定量的な保有効果については記載が困難であります。保有の合理性は、保有に伴う便益やリスクが資本コストに見合っているか等を精査し、検証しております。	無
	6,732	6,698		
(株)りそなホールディングス	3,400	3,400	主要取引金融機関であり、資金借入取引や決済取引など、同社との良好な関係の維持を目的として、継続して保有しております。 定量的な保有効果については記載が困難であります。保有の合理性は、保有に伴う便益やリスクが資本コストに見合っているか等を精査し、検証しております。	無
	2,174	1,781		

第5 【経理の状況】

1．連結財務諸表及び財務諸表の作成方法について

- (1) 当社の連結財務諸表は、「連結財務諸表の用語、様式及び作成方法に関する規則」(1976年大蔵省令第28号。以下、「連結財務諸表規則」という。)に基づいて作成しております。
- (2) 当社の財務諸表は、「財務諸表等の用語、様式及び作成方法に関する規則」(1963年大蔵省令第59号。以下、「財務諸表等規則」という。)に基づいて作成しております。

2．監査証明について

当社は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づき、連結会計年度(2022年4月1日から2023年3月31日まで)の連結財務諸表及び事業年度(2022年4月1日から2023年3月31日まで)の財務諸表について、EY新日本有限責任監査法人により監査を受けております。

3．連結財務諸表等の適正性を確保するための特段の取組みについて

当社は、連結財務諸表等の適正性を確保するための特段の取組みを行っております。具体的には、会計基準等の内容を適切に把握し、又は会計基準等の変更等についての確に対応することができる体制を整備するため、(公財)財務会計基準機構へ加入しホームページ掲載情報の閲覧等を行っております。

また、当社の会計監査人であるEY新日本有限責任監査法人が実施するセミナー等に参加しております。

1 【連結財務諸表等】

(1) 【連結財務諸表】

【連結貸借対照表】

(単位：千円)

	前連結会計年度 (2022年3月31日)	当連結会計年度 (2023年3月31日)
資産の部		
流動資産		
現金及び預金	6,316,829	5,983,589
受取手形、売掛金及び契約資産	¹ 4,412,175	¹ 4,428,274
商品及び製品	1,319,700	1,307,848
仕掛品	212,375	214,582
返品資産	245,392	278,114
その他	927,774	1,179,336
貸倒引当金	704	621
流動資産合計	13,433,542	13,391,123
固定資産		
有形固定資産		
建物及び構築物	381,316	376,549
減価償却累計額	193,382	206,056
建物及び構築物(純額)	187,934	170,492
工具、器具及び備品	1,441,221	1,308,121
減価償却累計額	1,188,657	1,103,614
工具、器具及び備品(純額)	252,563	204,507
機械装置及び運搬具	492	492
減価償却累計額	492	492
機械装置及び運搬具(純額)	0	0
土地	67,970	67,970
建設仮勘定	-	3,047
有形固定資産合計	508,467	446,017
無形固定資産		
ソフトウェア	210,446	269,841
のれん	-	127,804
その他	14,525	14,969
無形固定資産合計	224,972	412,615
投資その他の資産		
投資有価証券	² 687,192	² 749,759
繰延税金資産	397,023	472,448
その他	481,671	472,452
投資その他の資産合計	1,565,887	1,694,661
固定資産合計	2,299,327	2,553,293
資産合計	15,732,870	15,944,417

(単位：千円)

	前連結会計年度 (2022年3月31日)	当連結会計年度 (2023年3月31日)
負債の部		
流動負債		
支払手形及び買掛金	1,595,062	1,632,631
短期借入金	350,000	350,000
1年内返済予定の長期借入金	125,000	103,125
未払金	1,417,232	1,228,961
未払法人税等	136,864	82,800
賞与引当金	242,412	143,000
返金負債	518,824	547,316
その他	386,021	336,061
流動負債合計	4,771,418	4,423,895
固定負債		
長期借入金	137,500	184,375
繰延税金負債	22	-
退職給付に係る負債	1,464,180	1,564,340
長期未払金	65,712	62,536
その他	60,093	55,148
固定負債合計	1,727,508	1,866,400
負債合計	6,498,927	6,290,296
純資産の部		
株主資本		
資本金	5,341,021	5,341,021
資本剰余金	1,656,260	1,683,480
利益剰余金	2,991,166	3,149,549
自己株式	698,003	631,364
株主資本合計	9,290,444	9,542,686
その他の包括利益累計額		
その他有価証券評価差額金	2,057	212
退職給付に係る調整累計額	60,482	36,662
その他の包括利益累計額合計	62,539	36,875
非支配株主持分	6,038	148,310
純資産合計	9,233,943	9,654,121
負債純資産合計	15,732,870	15,944,417

【連結損益計算書及び連結包括利益計算書】

【連結損益計算書】

(単位：千円)

	前連結会計年度 (自 2021年 4月 1日 至 2022年 3月 31日)		当連結会計年度 (自 2022年 4月 1日 至 2023年 3月 31日)	
売上高	1	14,778,761	1	15,161,147
売上原価		9,054,869		9,588,898
売上総利益		5,723,892		5,572,248
販売費及び一般管理費	2	4,875,625	2	5,186,128
営業利益		848,267		386,119
営業外収益				
受取利息		24		16
受取配当金		649		1,205
持分法による投資利益		92,290		91,428
その他		12,886		21,821
営業外収益合計		105,850		114,472
営業外費用				
支払利息		9,408		4,462
子会社清算損		1,585		-
その他		1,573		1,718
営業外費用合計		12,567		6,181
経常利益		941,550		494,410
特別利益				
段階取得に係る差益		-		21,415
投資有価証券売却益		11,425		-
負ののれん発生益		187,179		7,665
為替換算調整勘定取崩益		50,626		-
特別利益合計		249,231		29,081
特別損失				
固定資産除却損	3	15,675	3	8,718
投資有価証券売却損		24,206		-
特別損失合計		39,881		8,718
税金等調整前当期純利益		1,150,900		514,772
法人税、住民税及び事業税		301,734		206,866
法人税等調整額		28,057		69,754
法人税等合計		273,677		137,112
当期純利益		877,223		377,660
非支配株主に帰属する当期純利益		1,250		1,805
親会社株主に帰属する当期純利益		875,972		375,854

【連結包括利益計算書】

(単位：千円)

	前連結会計年度 (自 2021年 4月 1日 至 2022年 3月 31日)	当連結会計年度 (自 2022年 4月 1日 至 2023年 3月 31日)
当期純利益	877,223	377,660
その他の包括利益		
その他有価証券評価差額金	2,000	1,844
為替換算調整勘定	35,124	-
退職給付に係る調整額	2,569	23,820
その他の包括利益合計	34,555	25,664
包括利益	842,667	403,324
(内訳)		
親会社株主に係る包括利益	841,416	401,519
非支配株主に係る包括利益	1,250	1,805

【連結株主資本等変動計算書】

前連結会計年度(自 2021年4月1日 至 2022年3月31日)

(単位：千円)

	株主資本				
	資本金	資本剰余金	利益剰余金	自己株式	株主資本合計
当期首残高	5,341,021	1,655,543	2,259,718	702,011	8,554,271
当期変動額					
親会社株主に帰属する当期純利益			875,972		875,972
剰余金の配当			133,752		133,752
自己株式の取得				774	774
自己株式の処分		716		4,782	5,499
連結範囲の変動			10,771		10,771
株主資本以外の項目の当期変動額(純額)					
当期変動額合計	-	716	731,448	4,007	736,172
当期末残高	5,341,021	1,656,260	2,991,166	698,003	9,290,444

	その他の包括利益累計額				非支配株主持分	純資産合計
	その他 有価証券 評価差額金	為替換算 調整勘定	退職給付 に係る 調整累計額	その他の 包括利益 累計額合計		
当期首残高	56	35,124	63,052	27,983	4,787	8,531,075
当期変動額						
親会社株主に帰属する当期純利益						875,972
剰余金の配当						133,752
自己株式の取得						774
自己株式の処分						5,499
連結範囲の変動						10,771
株主資本以外の項目の当期変動額(純額)	2,000	35,124	2,569	34,555	1,250	33,305
当期変動額合計	2,000	35,124	2,569	34,555	1,250	702,867
当期末残高	2,057	-	60,482	62,539	6,038	9,233,943

当連結会計年度(自 2022年4月1日 至 2023年3月31日)

(単位：千円)

	株主資本				
	資本金	資本剰余金	利益剰余金	自己株式	株主資本合計
当期首残高	5,341,021	1,656,260	2,991,166	698,003	9,290,444
当期変動額					
親会社株主に帰属する当期純利益			375,854		375,854
剰余金の配当			217,471		217,471
自己株式の取得				678	678
自己株式の処分		14,219		67,316	81,536
会社分割による増加		13,000			13,000
株主資本以外の項目の当期変動額(純額)					
当期変動額合計	-	27,219	158,383	66,638	252,241
当期末残高	5,341,021	1,683,480	3,149,549	631,364	9,542,686

	その他の包括利益累計額				非支配株主持分	純資産合計
	その他 有価証券 評価差額金	為替換算 調整勘定	退職給付 に係る 調整累計額	その他の 包括利益 累計額合計		
当期首残高	2,057	-	60,482	62,539	6,038	9,233,943
当期変動額						
親会社株主に帰属する当期純利益						375,854
剰余金の配当						217,471
自己株式の取得						678
自己株式の処分						81,536
会社分割による増加						13,000
株主資本以外の項目の当期変動額(純額)	1,844	-	23,820	25,664	142,272	167,936
当期変動額合計	1,844	-	23,820	25,664	142,272	420,178
当期末残高	212	-	36,662	36,875	148,310	9,654,121

【連結キャッシュ・フロー計算書】

(単位：千円)

	前連結会計年度 (自 2021年 4月 1日 至 2022年 3月 31日)	当連結会計年度 (自 2022年 4月 1日 至 2023年 3月 31日)
営業活動によるキャッシュ・フロー		
税金等調整前当期純利益	1,150,900	514,772
減価償却費	137,329	145,623
のれん償却額	-	31,951
固定資産除却損	15,675	8,718
退職給付に係る負債の増減額(は減少)	98,081	100,160
退職給付に係る調整累計額の増減額(は減少)	2,930	25,884
賞与引当金の増減額(は減少)	8,112	99,412
返金負債の増減額(は減少)	29,091	28,492
貸倒引当金の増減額(は減少)	2,229	138
負ののれん発生益	187,179	7,665
段階取得に係る差損益(は益)	-	21,415
為替換算調整勘定取崩益	50,626	-
受取利息及び受取配当金	674	1,221
支払利息	9,408	4,462
持分法による投資損益(は益)	92,290	91,428
投資有価証券売却損益(は益)	12,780	-
売上債権の増減額(は増加)	48,694	12,673
棚卸資産の増減額(は増加)	169,687	9,675
返品資産の増減額(は増加)	14,161	32,722
仕入債務の増減額(は減少)	227,011	127,443
その他	266,127	162,736
小計	785,245	312,882
利息及び配当金の受取額	30,639	25,777
利息の支払額	9,348	4,462
法人税等の支払額	799,364	774,774
法人税等の還付額	51,053	381,740
営業活動によるキャッシュ・フロー	58,225	58,836
投資活動によるキャッシュ・フロー		
有形固定資産の取得による支出	270,536	14,212
無形固定資産の取得による支出	111,594	124,226
投資有価証券の売却による収入	11,503	3,250
投資有価証券の取得による支出	70,597	598
敷金及び保証金の解約による収入	8,120	38,004
連結の範囲の変更を伴う子会社株式の取得による収入	1 61,311	1 27,408
その他	2,131	40
投資活動によるキャッシュ・フロー	369,662	70,335

(単位：千円)

	前連結会計年度 (自 2021年4月1日 至 2022年3月31日)	当連結会計年度 (自 2022年4月1日 至 2023年3月31日)
財務活動によるキャッシュ・フロー		
長期借入れによる収入	-	150,000
長期借入金の返済による支出	125,000	125,000
自己株式の取得による支出	774	678
配当金の支払額	133,748	216,911
連結の範囲の変更を伴わない子会社株式の取得による支出	-	6,533
その他	-	4,944
財務活動によるキャッシュ・フロー	259,523	204,068
現金及び現金同等物に係る換算差額	116	-
現金及び現金同等物の増減額(は減少)	570,844	333,240
現金及び現金同等物の期首残高	6,884,107	6,316,829
新規連結に伴う現金及び現金同等物の増加額	17,046	-
連結除外に伴う現金及び現金同等物の減少額	13,479	-
現金及び現金同等物の期末残高	2 6,316,829	2 5,983,589

【注記事項】

(連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項)

1. 連結の範囲に関する事項

(1) 連結子会社の数 16社

(株)インプレス

(株)IAD

(株)リットーミュージック

(株)エムディエヌコーポレーション

(株)山と溪谷社

(有)原の小屋

イカロス出版(株)

(株)天夢人

(株)ICE

(株)近代科学社

(株)PUBFUN

(株)クリエイターズギルド

(株)シフカ

(株)iDMP

Impress Business Development(同)

(株)IPGネットワーク

(株)PUBFUNは、2022年4月に、(株)インプレスR&Dと(株)メディアドゥを新設分割会社とした共同新設分割にて設立し、株式の51%を取得したことに伴い、当連結会計年度から連結の範囲に含めております。

(株)シフカは、2022年9月に株式の追加取得を行い完全子会社となり、重要性が増したことに伴い、当連結会計年度から連結の範囲に含めております。

(株)インプレスR&Dは、2023年2月に(株)インプレスに吸収合併されたことに伴い、連結の範囲から除外しております。

(株)Impress Professional Worksは称号を(株)IPGネットワークに改め、グループ共通の事業基盤(ビジネス・プラットフォーム)の構築・運営及び新規プラットフォーム事業の開発に特化した会社へ再編しております。

2. 持分法の適用に関する事項

(1) 持分法適用の関連会社数 2社

(株)編集工学研究所

(株)ファンギルド

(2) 主要な持分法を適用していない非連結子会社及び関連会社

該当事項はありません。

3. 連結子会社の事業年度等に関する事項

連結子会社の(株)IAD及び(有)原の小屋の決算日は12月31日であり、連結財務諸表作成にあたっては、同日現在の財務諸表を使用しております。ただし、連結決算日までの期間に発生した重要な取引については、連結上必要な調整を行っております。

4. 会計方針に関する事項

(1) 重要な資産の評価基準及び評価方法

有価証券

満期保有目的の債券

償却原価法(定額法)

その他有価証券

市場価格のない株式等以外のもの

時価法(評価差額は全部純資産直入法により処理し、売却原価は移動平均法により算定)

市場価格のない株式等

移動平均法による原価法

棚卸資産

商品・製品

主として先入先出法による原価法

(貸借対照表価額については収益性低下に基づく簿価切り下げ方法)

なお、最終刷後6ヶ月以上を経過した売残り単行本については、法人税基本通達に基づいた評価基準を設け、一定の評価減を実施しております。

仕掛品

個別法による原価法

(貸借対照表価額については収益性低下に基づく簿価切り下げ方法)

(2) 重要な減価償却資産の減価償却の方法

有形固定資産

定率法または定額法

無形固定資産

ソフトウェア(自社利用分)

社内における利用可能期間(2年~5年)に基づく定額法

リース資産(所有権移転外ファイナンス・リース取引に係るリース資産)

リース期間を耐用年数とし、残存価額をゼロとする定額法を採用しております。

(3) 重要な引当金の計上基準

貸倒引当金

債権の貸倒れによる損失に備えるため、一般債権については貸倒実績率による計算額を、貸倒懸念債権等特定の債権については、個別に回収可能性を検討し、回収不能見込額を計上しております。

賞与引当金

当社及び連結子会社は主として、従業員に対して支給する賞与の支出に充てるため、将来の支給見込額のうち当連結会計年度の負担額を計上しております。

(4) 退職給付に係る会計処理の方法

退職給付見込額の期間帰属方法

退職給付債務の算定にあたり、退職給付見込額を当連結会計年度末までの期間に帰属させる方法については、給付算定式基準によっております。

数理計算上の差異の費用処理方法

数理計算上の差異は、各連結会計年度の発生時における従業員の平均残存勤務期間以内の一定の年数(7年)による定額法により按分した額をそれぞれ発生の翌連結会計年度から費用処理することとしております。未認識数理計算上の差異については、税効果を調整のうえ、純資産の部におけるその他の包括利益累計額の退職給付に係る調整累計額に計上しております。

(5) 重要な収益及び費用の計上基準

当社グループの顧客との契約から生じる収益に関する主要な事業における主な履行義務の内容及び当該履行義務を充足する通常の時点（収益を認識する通常の時点）は以下のとおりであります。

なお、当社グループは、IT、音楽、デザイン、山岳・自然、航空・鉄道、モバイルサービス、その他の報告セグメントごとに、事業を分類して収益を管理しております。

出版・電子出版事業

出版・電子出版事業においては、各種専門書籍や雑誌、電子書籍、季節商品（年賀状ムック、カレンダー、手帳）等、出版物の販売に加え、雑誌への広告掲載も行っております。書籍及び雑誌の販売については、当該製品を納品した時点で履行義務が充足されたと判断し、収益を認識しております。ただし、当社グループは、出版業界の慣行に従い、原則として出版取次経由で書店に配本した書籍及び雑誌等については、配本後、約定期間（委託期間）内に限り、返品を受け入れることを販売条件とする委託販売制度を採用しております。そのため、将来返品が見込まれる額を変動対価として販売時に収益を認識せず、返品資産および返金負債を計上する方法を採用しております。返金負債の見積りについては、直近の販売額に過去の返品実績に基づいた率を乗じて算出し、返品資産は、返金負債をもとに書籍及び雑誌（一部ムック含）について、回収すると見込める金額を見積もって計上しております。また、出版取次等に対する売上歩戻及び販売奨励金等のリポートについては、取引価格から減額する方法を採用しております。なお、売上歩戻については、出版取次等からの請求に基づいた金額を計上し、販売奨励金等のリポートについては、出版取次等との契約に基づき当期販売額を加味した見積額を算出して計上しております。電子書籍の販売に関しては、主に電子書籍販売ストア上でコンテンツの提供が確定した時点で履行義務が充足されたと判断し、収益を認識しております。出版広告については、広告が掲載された製品を発売した時点で履行義務が充足されたと判断し、収益を認識しております。

なお、取引の対価については、履行義務の充足時点から概ね2から7ヶ月以内に受領しており、重要な金融要素は含まれておりません。

ネットメディア・サービス事業

ネットメディア・サービス事業については、デジタル総合ニュースサービス「Impress Watch」や「ヤマケイオンライン」等、各事業会社の専門的な情報をWebメディアによって発信しております。主な収益はWebメディアに広告を掲載する広告掲載料となり、Webメディアに掲載することが履行義務となります。広告配信が完了した時点で履行義務が充足されたと判断して収益を認識しております。

なお、取引の対価については、履行義務の充足時点から概ね1から2ヶ月以内に受領しており、重要な金融要素は含まれておりません。

ターゲットメディア事業

ターゲットメディア事業については、「IT Leaders」「ネットショップ担当者フォーラム」等の専門性の高い分野の情報を、Webメディアを通じて企業向けに発信、またビジネスセミナーやイベントの開催等を実施しております。主な収益はWebメディアに広告を掲載する広告掲載料となり、Webメディアに掲載することが履行義務となります。広告配信が完了した時点で履行義務が充足されたと判断して収益を認識しております。

ビジネスセミナーやイベントにおいては、主にビジネスセミナーやイベント等で収集したリード情報を顧客に提供することが履行義務となり、顧客との契約に基づいたリード情報を提供した時点で履行義務が充足されたと判断して収益を認識しております。また、一部のイベントにおいては、イベントを開催することが履行義務となり、イベントを開催した時点で履行義務が充足されたと判断して収益を認識しております。

なお、取引の対価については、履行義務の充足時点から概ね1から2ヶ月以内に受領しており、重要な金融要素は含まれておりません。

ソリューション事業

ソリューション事業については、各事業会社の専門コンテンツを活かし、企業や自治体向けのセールスプロモーションツール、Webサイト、出版物などの制作受託を行っております。当社グループは顧客に対して、契約に基づいて制作した製品を顧客に提供することが履行義務となります。当社グループは顧客との契約に基づいて制作した製品を顧客に納品し、当該製品を納品した時点で履行義務が充足されたと判断して収益を認識しております。

なお、取引の対価については、履行義務の充足時点から概ね1から2ヶ月以内に受領しており、重要な金融要素は含まれておりません。

プラットフォーム事業

プラットフォーム事業については、コンテンツホルダーとの協業による電子コミックプラットフォームの運営や楽器マーケットプレイス「デジマート」等、当社グループのプラットフォームを活かしたサービスを行って

ります。主な事業内容である電子コミックプラットフォームについては、顧客に対してアプリの開発・保守・運用等を提供することが履行義務となります。開発については、顧客の検収が完了した時点で履行義務が充足されたと判断して収益を認識しております。保守・運用については、保守運用業務委託契約に基づき、契約期間にわたってスマートフォン向けアプリケーションの保守運用業務を提供する履行義務があります。月毎に、顧客からの業務内容確認をもって履行義務が充足されたと判断し、収益を認識しております。

なお、取引の対価については、履行義務の充足時点から概ね3ヶ月以内に受領しており、重要な金融要素は含まれておりません。

(6) 重要な外貨建の資産又は負債の本邦通貨への換算の基準

外貨建金銭債権債務は、連結決算日の直物為替相場により円貨に換算し、換算差額は損益として処理しております。なお、在外子会社の資産及び負債並びに収益及び費用は、在外子会社決算日の直物為替相場により円貨に換算し、換算差額は純資産の部における為替換算調整勘定に含めて計上しております。

(7) 重要なヘッジ会計の方法

ヘッジ会計の方法

金利スワップについては、特例処理の条件を充たしているものは、特例処理を採用しております。

ヘッジ手段とヘッジ対象

ヘッジ手段・・・金利スワップ

ヘッジ対象・・・借入金の利息

ヘッジ方針

借入金の金利変動リスクを回避する目的で、金利スワップ取引を行っており、ヘッジ対象の識別は、個別契約ごとに行っております。

ヘッジ有効性評価の方法

特例処理の要件を満たしている金利スワップについては、有効性の判定を省略しております。

(8) 連結キャッシュ・フロー計算書における資金の範囲

手許現金、随時引き出し可能な預金及び容易に換金可能であり、かつ、価値の変動について僅少なりリスクを負わない取得日から3ヶ月以内に償還期限の到来する短期投資からなっております。

(9) のれんの償却方法及び償却期間

5年間の定額法により償却しております。

(10) その他連結財務諸表作成のための重要な事項

グループ通算制度の適用

当社及び一部の連結子会社は当社を通算親法人としてグループ通算制度を適用しております。

(重要な会計上の見積り)

繰延税金資産の回収可能性

(1)当連結会計年度の連結財務諸表に計上した金額

	前連結会計年度	当連結会計年度
繰延税金資産	397,023千円	472,448千円
(繰延税金負債との相殺前の金額)	397,115千円	472,510千円

(2)識別した項目に係る重要な会計上の見積りの内容に関する情報

算出方法

将来減算一時差異に対して、将来の収益力に基づく課税所得及びタックス・プランニングに基づき、繰延税金資産の回収可能性を判断しております。

当社グループはグループ通算制度を適用しており、地方税については翌期1年間の各社毎に算出した課税所得及びタックス・プランニングに基づき、連結法人税については、翌期1年間の連結課税所得及びタックス・プランニングに基づき、それぞれの繰延税金資産の回収可能性を判断しております。

主要な仮定

課税所得の見積りにおける主要な仮定は売上高見込みであります。売上高見込みについては、事業区分毎の事業環境や各セグメントの事業計画の変動リスクを分析し、より現実性の高い課税所得を見積ったうえで、回収可能性の判断を実施しております。

なお、当該事業計画には、紙の出版市場及び電子出版市場のそれぞれの過去からのトレンドを基礎として、当社グループが取扱う製品の需要予測に加え、さらに原材料価格や配送価格等の製造から販売に至るコスト上昇リスクを加味しております。

翌連結会計年度の連結財務諸表に与える影響

翌連結会計年度の連結財務諸表に与える影響は、事業環境の変化等の見積りの不現実性により、課税所得の見積額が変わることで、繰延税金資産の回収予測額が変動し、課税所得に法定実効税率を乗じた金額だけ法人税等調整額及び当期純利益に影響を与える可能性があります。

(未適用の会計基準等)

- ・「法人税、住民税及び事業税等に関する会計基準」(企業会計基準第27号 2022年10月28日)
- ・「包括利益の表示に関する会計基準」(企業会計基準第25号 2022年10月28日)
- ・「税効果会計に係る会計基準の適用指針」(企業会計基準適用指針第28号 2022年10月28日)

(1) 概要

その他の包括利益に対して課税される場合の法人税等の計上区分及びグループ法人税制が適用される場合の子会社株式等の売却に係る税効果の取扱いを定めるもの。

(2) 適用予定日

2025年3月期の期首より適用予定であります。

(3) 当該会計基準等の適用による影響

重要な影響はありません。

(連結貸借対照表関係)

- 受取手形、売掛金及び契約資産のうち、顧客との契約から生じた債権及び契約資産の金額は、連結財務諸表「注記事項(収益認識関係) 3.契約資産及び契約負債の残高等」に記載しております。
- 非連結子会社及び関連会社に対するものは、次のとおりであります。

	前連結会計年度 (2022年3月31日)	当連結会計年度 (2023年3月31日)
投資有価証券(株式)	500,109千円	560,559千円

(連結損益計算書関係)

1 顧客との契約から生じる収益

売上高については、顧客との契約から生じる収益及びそれ以外の収益を区分して記載しておりません。顧客との契約から生じる収益の金額は、連結財務諸表「注記事項（セグメント情報等）」に記載のとおりであります。

2 販売費及び一般管理費のうち主要な費目及び金額は、次のとおりであります。

	前連結会計年度 (自 2021年4月1日 至 2022年3月31日)	当連結会計年度 (自 2022年4月1日 至 2023年3月31日)
給与手当及び賞与	1,527,129千円	1,624,864千円
賞与引当金繰入額	93,531	72,623
退職給付費用	64,057	69,852
貸倒引当金繰入額	2,229	138

3 固定資産除却損の内容は、次のとおりであります。

	前連結会計年度 (自 2021年4月1日 至 2022年3月31日)	当連結会計年度 (自 2022年4月1日 至 2023年3月31日)
工具、器具及び備品	13,302千円	5,946千円
その他（建物及び構築物他）	2,373	2,772
計	15,675	8,718

(連結包括利益計算書関係)

その他の包括利益に係る組替調整額及び税効果額

	前連結会計年度 (自 2021年4月1日 至 2022年3月31日)	当連結会計年度 (自 2022年4月1日 至 2023年3月31日)
その他有価証券評価差額金：		
当期発生額	1,918千円	1,791千円
組替調整額	-	-
税効果調整前	1,918	1,791
税効果額	81	52
その他有価証券評価差額金	2,000	1,844
為替換算調整勘定：		
当期発生額	-	-
組替調整額	50,626	-
税効果調整前	50,626	-
税効果額	15,501	-
為替換算調整勘定	35,124	-
退職給付に係る調整額：		
当期発生額	22,712	2,615
組替調整額	25,643	28,499
税効果調整前	2,930	25,884
税効果額	361	2,064
退職給付に係る調整額	2,569	23,820
その他の包括利益合計	34,555	25,664

(連結株主資本等変動計算書関係)

前連結会計年度(自 2021年4月1日 至 2022年3月31日)

1. 発行済株式の種類及び総数並びに自己株式の種類及び株式数に関する事項

	当連結会計年度 期首株式数(株)	当連結会計年度 増加株式数(株)	当連結会計年度 減少株式数(株)	当連結会計年度末 株式数(株)
発行済株式				
普通株式	37,371,500	-	-	37,371,500
合計	37,371,500	-	-	37,371,500
自己株式				
普通株式(注)	3,933,353	7,896	26,826	3,914,423
合計	3,933,353	7,896	26,826	3,914,423

(注) 普通株式の自己株式の増加株式数3,260株は単元未満株式の買取り、4,636株は特定譲渡制限株式の無償取得によるものであります。

また、普通株式の自己株式の減少株式数26,826株は、2021年6月30日開催の取締役会決議に基づき、譲渡制限付株式報酬として処分したものであります。

2. 新株予約権及び自己新株予約権に関する事項

該当事項はありません。

3. 配当に関する事項

(1) 配当支払額

決議	株式の種類	配当の総額 (千円)	1株当たり配当額 (円)	基準日	効力発生日
2021年5月12日 取締役会	普通株式	133,752	4.00	2021年3月31日	2021年6月23日

(2) 基準日が当連結会計年度に属する配当のうち、配当の効力発生日が翌連結会計年度となるもの

決議	株式の種類	配当の原資	配当の総額 (千円)	1株当たり 配当額(円)	基準日	効力発生日
2022年5月12日 取締役会	普通株式	利益剰余金	217,471	6.50	2022年3月31日	2022年6月24日

当連結会計年度(自 2022年4月1日 至 2023年3月31日)

1. 発行済株式の種類及び総数並びに自己株式の種類及び株式数に関する事項

	当連結会計年度 期首株式数(株)	当連結会計年度 増加株式数(株)	当連結会計年度 減少株式数(株)	当連結会計年度末 株式数(株)
発行済株式				
普通株式	37,371,500	-	-	37,371,500
合計	37,371,500	-	-	37,371,500
自己株式				
普通株式(注)	3,914,423	3,220	377,484	3,540,159
合計	3,914,423	3,220	377,484	3,540,159

(注) 普通株式の自己株式の増加株式数3,220株は単元未満株式の買取りによるものであります。

また、普通株式の自己株式の減少株式数377,484株は、2022年7月1日開催の取締役会に基づき、譲渡制限付株式報酬として処分したものであります。

2. 新株予約権及び自己新株予約権に関する事項

該当事項はありません。

3. 配当に関する事項

(1) 配当支払額

決議	株式の種類	配当の総額 (千円)	1株当たり配当額 (円)	基準日	効力発生日
2022年5月12日 取締役会	普通株式	217,471	6.50	2022年3月31日	2022年6月24日

(2) 基準日が当連結会計年度に属する配当のうち、配当の効力発生日が翌連結会計年度となるもの

決議	株式の種類	配当の原資	配当の総額 (千円)	1株当たり 配当額(円)	基準日	効力発生日
2023年5月11日 取締役会	普通株式	利益剰余金	169,156	5.00	2023年3月31日	2023年6月26日

(連結キャッシュ・フロー計算書関係)

1 株式の取得により新たに連結子会社となった会社の資産及び負債の主な内訳

前連結会計年度(自 2021年4月1日 至 2022年3月31日)

株式の取得により新たにイカロス出版株式会社を連結したことに伴う、連結開始時の資産及び負債の内訳並びにイカロス出版株式の取得価額とイカロス出版株式会社取得のための支出(純額)との関係は次のとおりです。

流動資産	2,079,918千円
固定資産	63,746
流動負債	563,616
固定負債	92,868
負ののれん	187,179
株式の取得価額	1,300,000千円
現金及び現金同等物	1,361,311
差引：取得のための支出	61,311千円

当連結会計年度(自 2022年4月1日 至 2023年3月31日)

(1) 株式の取得により新たに株式会社PUBFUNを連結したことに伴う、連結開始時の資産及び負債の内訳並びにPUBFUN

株式の取得価額と株式会社PUBFUN取得のための支出(純額)との関係は次のとおりです。

流動資産	140,000千円
固定資産	245
のれん	159,755
流動負債	-
固定負債	-
非支配株主持分	147,000
その他資本剰余金	13,000
株式の取得価額	140,000千円
現金及び現金同等物	140,000
差引：取得のための支出	0千円

(2) 株式の取得により新たに株式会社シフカを連結したことに伴う、連結開始時の資産及び負債の内訳並びにシフカ

株式の取得価額と株式会社シフカ取得のための支出(純額)との関係は次のとおりです。

流動資産	116,052千円
固定資産	37,839
流動負債	10,326
固定負債	43,100
負ののれん	7,665
株式の取得価額	92,800千円
支配獲得時までの既取得価額	6,424
段階取得に係る差益	21,415
株式の追加取得価額	64,960
現金及び現金同等物	92,368
差引：取得のための支出	27,408千円

2 現金及び現金同等物の期末残高と連結貸借対照表に掲記されている科目の金額との関係

現金及び現金同等物の期末残高と連結貸借対照表の現金及び預金勘定の金額は一致しております。

(リース取引関係)

前連結会計年度(自 2021年4月1日 至 2022年3月31日)

重要性が乏しいため、記載を省略しております。

当連結会計年度(自 2022年4月1日 至 2023年3月31日)

重要性が乏しいため、記載を省略しております。

(金融商品関係)

1. 金融商品の状況に関する事項

金融商品に対する取組方針

当社グループは、業務提携等を目的とした株式等への投資を行っておりますが、資金運用につきましては短期的な預金等の安定運用を基本としております。また、資金調達につきましては、事業計画に照らして、必要な資金を主として銀行借入等により調達する方針です。デリバティブは、借入金の金利変動リスクを回避するために利用し、投機的な取引は行いません。

金融商品の内容及びそのリスク

営業債権である受取手形及び売掛金は、顧客の信用リスクに晒されています。また、その一部には外貨建てのものがあり、為替の変動リスクに晒されています。

投資有価証券は、投資先企業との業務提携に関連する株式及び資金の安定運用を目的とした債券であり、市場価格の変動リスクや投資先の財務状況悪化による損失の発生及び投資回収の遅延等のリスクに晒されています。

営業債務である支払手形及び買掛金・未払金は、1年以内の支払期日であります。また、その一部には外貨建てのものがあり、為替の変動リスクに晒されています。

借入金のうち一部は、変動金利であるため金利の変動リスクに晒されています。

金融商品に対するリスク管理体制

1) 信用リスクの管理

営業債権につきましては、グループ各社において、取引相手ごとに期日及び残高を管理するとともに、財務状況等の悪化等による回収懸念の早期把握や軽減を図っております。また、リスク&オポチュニティマネジメント規程に従い、貸倒れリスクの一元的な管理を行っております。

2) 市場リスクの管理

当社は、借入金に係る支払金利の変動リスクを抑制する必要があると認められる場合には、格付の高い金融機関と金利スワップ等のデリバティブ取引を行っております。

投資有価証券につきましては、当社の投資管理規程に従い、時価や投資先企業の財務状態を把握しております。

3) 資金調達に係る流動性リスクの管理

資金の調達については、資金調達手段の多様化、複数の金融機関との取引、長短の借入バランスの調整等により、流動性リスクのヘッジを図っております。

また、キャッシュ・マネジメント・システムの導入により資金の一元的な管理を進めており、余剰資金の効果的な活用により資金効率の改善を図るとともに、グループ各社の業績及び資金繰りの動向を月次でモニタリングすることで、流動性リスクを管理しております。

金融商品の時価等に関する事項についての補足説明

金融商品の時価の算定においては、一定の前提条件等を採用しているため、異なる前提条件等による場合には、当該価額が異なることもあります。

2. 金融商品の時価等に関する事項

連結貸借対照表計上額、時価及びこれらの差額については、次のとおりであります。

前連結会計年度(2022年3月31日)

(単位：千円)

	連結貸借対照表 計上額	時価	差額
(1) 有価証券及び投資有価証券			
その他有価証券	27,158	27,158	-
資産計	27,158	27,158	-
(2) 長期借入金(*2)	262,500	261,767	732
負債計	262,500	261,767	732

(*1)「現金及び預金」「受取手形」「売掛金」「支払手形及び買掛金」「短期借入金」「未払金」「未払法人税等」については、現金であること、および短期間で決済されるため時価が帳簿価額に近似するものであることから、記載を省略しております。

(*2)一年内返済予定の長期借入金を含んでおります。

(*3)市場価格のない株式等は、「(1)有価証券及び投資有価証券」には含めておりません。当該金融商品の連結貸借対照表計上額は以下のとおりであります。

(単位：千円)

区分	前連結会計年度
非上場株式	660,033

当連結会計年度(2023年3月31日)

(単位：千円)

	連結貸借対照表 計上額	時価	差額
(1) 有価証券及び投資有価証券			
その他有価証券	29,548	29,548	-
資産計	29,548	29,548	-
(2) 長期借入金(*2)	287,500	286,101	1,398
負債計	287,500	286,101	1,398

(*1)「現金及び預金」「受取手形」「売掛金」「支払手形及び買掛金」「短期借入金」「未払金」「未払法人税等」については、現金であること、および短期間で決済されるため時価が帳簿価額に近似するものであることから、記載を省略しております。

(*2)一年内返済予定の長期借入金を含んでおります。

(*3)市場価格のない株式等は、「(1)有価証券及び投資有価証券」には含めておりません。当該金融商品の連結貸借対照表計上額は以下のとおりであります。

(単位：千円)

区分	当連結会計年度
非上場株式	720,211

(注1) 金銭債権及び満期のある有価証券の連結決算日後の償還予定額
前連結会計年度(2022年3月31日)

(単位:千円)

	1年以内	1年超 5年以内	5年超
預金	6,316,086	-	-
受取手形	59,507	-	-
売掛金	4,352,667	-	-
有価証券及び投資有価証券 其他有価証券のうち満期があるもの	-	-	-
合計	10,728,262	-	-

当連結会計年度(2023年3月31日)

(単位:千円)

	1年以内	1年超 5年以内	5年超
預金	5,983,211	-	-
受取手形	73,037	-	-
売掛金	4,355,236	-	-
有価証券及び投資有価証券 其他有価証券のうち満期があるもの	-	-	-
合計	10,411,485	-	-

(注2) 社債、長期借入金及びその他の有利子負債の連結決算日後の返済予定額
前連結会計年度(2022年3月31日)

(単位:千円)

	1年以内	1年超 2年以内	2年超 3年以内	3年超 4年以内	4年超 5年以内	5年超
短期借入金	350,000	-	-	-	-	-
長期借入金	125,000	65,625	71,875	-	-	-
合計	475,000	65,625	71,875	-	-	-

当連結会計年度(2023年3月31日)

(単位:千円)

	1年以内	1年超 2年以内	2年超 3年以内	3年超 4年以内	4年超 5年以内	5年超
短期借入金	350,000	-	-	-	-	-
長期借入金	103,125	134,375	50,000	-	-	-
合計	453,125	134,375	50,000	-	-	-

3. 金融商品の時価のレベルごとの内訳等に関する事項

金融商品の時価を、時価の算定に係るインプットの観察可能性及び重要性に応じて、以下の3つのレベルに分類しております。

レベル1の時価：観察可能な時価の算定に係るインプットのうち、活発な市場において形成される当該時価の算定の対象となる資産又は負債に関する相場価格により算定した時価

レベル2の時価：観察可能な時価の算定に係るインプットのうち、レベル1のインプット以外の時価の算定に係るインプットを用いて算定した時価

レベル3の時価：観察できない時価の算定に係るインプットを使用して算定した時価

時価の算定に重要な影響を与えるインプットを複数使用している場合には、それらのインプットがそれぞれ属するレベルのうち、時価の算定における優先順位が最も低いレベルに時価を分類しております。

(1) 時価で連結貸借対照表に計上している金融商品

前連結会計年度（2022年3月31日）

区分	時価（千円）			
	レベル1	レベル2	レベル3	合計
有価証券及び投資有価証券 その他有価証券 株式	27,158	-	-	27,158
資産計	27,158	-	-	27,158

当連結会計年度（2023年3月31日）

区分	時価（千円）			
	レベル1	レベル2	レベル3	合計
有価証券及び投資有価証券 その他有価証券 株式	29,548	-	-	29,548
資産計	29,548	-	-	29,548

(2) 時価で連結貸借対照表に計上している金融商品以外の金融商品

前連結会計年度（2022年3月31日）

区分	時価（千円）			
	レベル1	レベル2	レベル3	合計
長期借入金	-	261,767	-	261,767
負債計	-	261,767	-	261,767

当連結会計年度（2023年3月31日）

区分	時価（千円）			
	レベル1	レベル2	レベル3	合計
長期借入金	-	286,101	-	286,101
負債計	-	286,101	-	286,101

(注) 時価の算定に用いた評価技法及び時価の算定に係るインプットの説明

有価証券及び投資有価証券

上場株式は相場価格を用いて評価しております。上場株式は活発な市場で取引されているため、その時価をレベル1の時価に分類しております。

長期借入金

これらの時価は、元利金の合計額と、当該債務の残存期間及び信用リスクを加味した利率を基に、割引現在価値法により算定しており、レベル2の時価に分類しております。

(有価証券関係)

前連結会計年度(2022年3月31日)

1 その他有価証券

	種類	連結貸借対照表 計上額(千円)	取得原価 (千円)	差額 (千円)
連結貸借対照表計上額 が取得原価を超えるもの	(1) 株式	3,781	2,337	1,443
	(2) 債券			
	国債・地方債等	-	-	-
	社債	-	-	-
	その他	-	-	-
	(3) その他	-	-	-
	小計	3,781	2,337	1,443
連結貸借対照表計上額 が取得原価を超えないもの	(1) 株式	23,377	28,330	4,953
	(2) 債券			
	国債・地方債等	-	-	-
	社債	-	-	-
	その他	-	-	-
	(3) その他	-	-	-
	小計	23,377	28,330	4,953
合計		27,158	30,668	3,509

(注) 非上場株式(連結貸借対照表計上額159,923千円)については、市場価格のない株式等であることから、上表の「その他有価証券」には含めておりません。

2 当連結会計年度中に売却したその他有価証券(自 2021年4月1日 至 2022年3月31日)

種類	売却額(千円)	売却益の合計額(千円)	売却損の合計額(千円)
(1) 株式	11,797	11,425	24,206
(2) 債券			
国債・地方債等	-	-	-
社債	-	-	-
その他	-	-	-
(3) その他	-	-	-
合計	11,797	11,425	24,206

3 減損処理を行った有価証券

該当事項はありません。

当連結会計年度(2023年3月31日)

1 その他有価証券

	種類	連結貸借対照表 計上額(千円)	取得原価 (千円)	差額 (千円)
連結貸借対照表計上額 が取得原価を超えるもの	(1) 株式	4,122	2,337	1,785
	(2) 債券			
	国債・地方債等	-	-	-
	社債	-	-	-
	その他	-	-	-
	(3) その他	-	-	-
	小計	4,122	2,337	1,785
連結貸借対照表計上額 が取得原価を超えないもの	(1) 株式	25,426	28,929	3,502
	(2) 債券			
	国債・地方債等	-	-	-
	社債	-	-	-
	その他	-	-	-
	(3) その他	-	-	-
	小計	25,426	28,929	3,502
合計		29,548	31,266	1,717

(注) 非上場株式(連結貸借対照表計上額159,651千円)については、市場価格のない株式等であることから、上表の「その他有価証券」には含めておりません。

2 当連結会計年度中に売却したその他有価証券(自 2022年4月1日 至 2023年3月31日)
該当事項はありません。

3 減損処理を行った有価証券
該当事項はありません。

(デリバティブ取引関係)

前連結会計年度(自 2021年4月1日 至 2022年3月31日)

1 ヘッジ会計が適用されていないデリバティブ取引
該当事項はありません。

2 ヘッジ会計が適用されているデリバティブ取引
該当事項はありません。

当連結会計年度(自 2022年4月1日 至 2023年3月31日)

1 ヘッジ会計が適用されていないデリバティブ取引
該当事項はありません。

2 ヘッジ会計が適用されているデリバティブ取引
該当事項はありません。

(退職給付関係)

1 採用している退職給付制度の概要

当社グループは退職金規程に基づく退職一時金制度を、一部の連結子会社においては確定拠出制度を採用しております。

退職一時金制度では、退職給付として、給与と勤務期間に加え在職中の会社への貢献度に応じたポイント制を採用し、ポイントの累積にポイント単価を乗じた額を支給しております。

なお、一部の連結子会社については、簡便法により退職給付に係る負債及び退職給付費用を計算しております。

2 確定給付制度

(1) 退職給付債務の期首残高と期末残高の調整表(簡便法を適用した制度を除く)

	前連結会計年度 (自 2021年4月1日 至 2022年3月31日)	当連結会計年度 (自 2022年4月1日 至 2023年3月31日)
退職給付債務の期首残高	1,197,042千円	1,297,341千円
勤務費用	105,694	113,257
利息費用	2,416	2,606
数理計算上の差異の発生額	22,712	2,615
退職給付の支払額	30,524	21,932
その他	-	1,003
退職給付債務の期末残高	1,297,341	1,392,884

(2) 簡便法を適用した制度の、退職給付に係る負債の期首残高と期末残高の調整表

	前連結会計年度 (自 2021年4月1日 至 2022年3月31日)	当連結会計年度 (自 2022年4月1日 至 2023年3月31日)
退職給付に係る負債の期首残高	76,188千円	166,838千円
退職給付費用	100,336	9,772
退職給付の支払額	9,686	6,158
その他	-	1,003
退職給付に係る負債の期末残高	166,838	171,455

(3) 退職給付債務の期末残高と連結貸借対照表に計上された退職給付に係る負債の調整表

	前連結会計年度 (自 2021年4月1日 至 2022年3月31日)	当連結会計年度 (自 2022年4月1日 至 2023年3月31日)
非積立制度の退職給付債務	1,464,180千円	1,564,340千円
連結貸借対照表に計上された負債の額	1,464,180	1,564,340
退職給付に係る負債	1,464,180	1,564,340
連結貸借対照表に計上された負債の額	1,464,180	1,564,340

(注) 簡便法を適用した制度を含みます。

(4) 退職給付費用及びその内訳項目の金額

	前連結会計年度 (自 2021年4月1日 至 2022年3月31日)	当連結会計年度 (自 2022年4月1日 至 2023年3月31日)
勤務費用	105,694千円	113,257千円
利息費用	2,416	2,606
数理計算上の差異の費用処理額	25,643	28,499
簡便法で計算した退職給付費用	100,336	9,772
その他	6,312	7,893
確定給付制度に係る退職給付費用	240,403	162,029

(注) 「その他」の金額は主に中小企業退職金共済掛金への拠出額等です。

(5) 退職給付に係る調整額

退職給付に係る調整額に計上した項目(税効果控除前)の内訳は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (自 2021年4月1日 至 2022年3月31日)	当連結会計年度 (自 2022年4月1日 至 2023年3月31日)
数理計算上の差異	2,930千円	25,884千円
合計	2,930	25,884

(6) 退職給付に係る調整累計額

退職給付に係る調整累計額に計上した項目(税効果控除前)の内訳は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (自 2021年4月1日 至 2022年3月31日)	当連結会計年度 (自 2022年4月1日 至 2023年3月31日)
未認識数理計算上の差異	66,796千円	40,912千円
合計	66,796	40,912

(7) 数理計算上の計算基礎に関する事項

数理計算上の計算基礎(加重平均で表わしております。)

	前連結会計年度 (自 2021年4月1日 至 2022年3月31日)	当連結会計年度 (自 2022年4月1日 至 2023年3月31日)
割引率	0.2%	0.2%
予想昇給率	2.0%	2.1%

(税効果会計関係)

1. 繰延税金資産及び繰延税金負債の発生の主な原因別の内訳

	前連結会計年度 (2022年3月31日)	当連結会計年度 (2023年3月31日)
	(千円)	(千円)
繰延税金資産		
賞与引当金	83,679	49,136
未払事業所税	4,424	4,686
退職給付に係る負債	486,416	524,588
一括償却資産	12,664	7,830
未払事業税	36,619	12,447
繰越欠損金(注)2	922,832	831,936
製品等評価損	89,532	102,130
投資有価証券評価損	43,006	36,545
貸倒引当金	243	214
減価償却超過額	17,183	13,330
役員特別退職金	25,955	24,332
税務上の収益認識差額	94,580	93,116
その他	106,046	121,623
繰延税金資産小計	1,849,946	1,821,921
税務上の繰越欠損金に係る評価性引当額(注)2	922,832	831,936
将来減算一時差異等の合計に係る評価性引当額	529,998	517,475
評価性引当額小計(注)1	1,452,831	1,349,411
繰延税金資産合計	397,115	472,510
繰延税金負債		
その他有価証券評価差額金	113	61
繰延税金負債合計	113	61
繰延税金資産の純額	397,001	472,448

(注) 1. 評価性引当額が103,419千円減少しております。この減少の主な内容は、繰越欠損金の増減によるものであり、(株)リットーミュージックで16,712千円増加した一方で、(株)インプレスホールディングスで85,267千円、(株)インプレスで33,431千円それぞれ減少したこと等によるものです。

2. 税務上の繰越欠損金及びその繰延税金資産の繰越期限別の金額

前連結会計年度(2022年3月31日)

(単位:千円)

	1年以内	1年超 2年以内	2年超 3年以内	3年超 4年以内	4年超 5年以内	5年超	合計
税務上の繰越欠損金(a)	143,258	386,206	139,005	24,536	7,272	222,552	922,832
評価性引当額	143,258	386,206	139,005	24,536	7,272	222,552	922,832
繰延税金資産	-	-	-	-	-	-	-

(a) 税務上の繰越欠損金は、法定実効税率を乗じた額であります。

当連結会計年度(2023年3月31日)

(単位:千円)

	1年以内	1年超 2年以内	2年超 3年以内	3年超 4年以内	4年超 5年以内	5年超	合計
税務上の繰越欠損金(a)	381,700	136,393	18,211	1,947	12,392	281,290	831,936
評価性引当額	381,700	136,393	18,211	1,947	12,392	281,290	831,936
繰延税金資産	-	-	-	-	-	-	-

(a) 税務上の繰越欠損金は、法定実効税率を乗じた額であります。

2. 法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との間に重要な差異があるときの、当該差異の原因となった主要な項目別の内訳

	前連結会計年度 (2022年3月31日)	当連結会計年度 (2023年3月31日)
法定実効税率 (調整)	30.6%	30.6%
交際費等永久に損金算入されない項目	0.2%	0.7%
受取配当金等永久に益金算入されない項目	0.4%	1.9%
のれん償却額	-%	1.9%
持分法投資利益	2.5%	5.4%
負ののれん発生益	5.0%	0.5%
段階取得に係る損益	-%	1.3%
為替換算調整勘定取崩益	1.4%	-%
住民税均等割等	0.7%	2.2%
所得税額控除	13.6%	-%
子会社との税率差異	6.9%	6.1%
評価性引当額の増減	11.2%	4.2%
繰越欠損金の利用	5.1%	15.9%
繰越欠損金の期限切れ	1.4%	12.7%
その他	0.7%	1.7%
税効果会計適用後の法人税等の負担率	23.8%	26.6%

3. 法人税及び地方法人税の会計処理又はこれらに関する税効果会計の会計処理

当社及び一部の国内連結子会社は、当連結会計年度から、グループ通算制度を適用しております。また、「グループ通算制度を適用する場合の会計処理及び開示に関する取扱い」(実務対応報告第42号 2021年8月12日)に従って、法人税及び地方法人税の会計処理又はこれらに関する税効果会計の会計処理並びに開示を行っております。

(企業結合等関係)

当連結会計年度(2023年3月31日)

当社グループは、当社の100%子会社である株式会社インプレスR&Dと株式会社メディアドゥを新設分割会社とし、「株式会社PUBFUN」を新設分割設立会社とする共同新設分割を行い、「株式会社PUBFUN」が発行する株式の51%を取得しました。

(取得による企業結合)

(1)企業結合の概要

被取得企業の名称及びその事業の内容

被取得企業の名称 株式会社メディアドゥ

事業の内容 出版社・法人向けPOD出版サービス事業

企業結合を行った主な理由

当社グループは当社の子会社である株式会社インプレスR&Dにおいて、個人向けPOD書籍出版・電子書籍出版の販売支援サービスを展開、株式会社メディアドゥは出版社支援サービスを展開してまいりましたが、両社が持つPOD書籍出版のノウハウを生かし、出版のDX(デジタルトランスフォーメーション)を促進する新しい出版環境を、すべての著者・出版者(個人出版社、新興出版社、既存出版社内の新規部門など)に提供することで、より豊かな出版文化の形成に取り組んでまいります。

企業結合日

2022年4月1日

企業結合の法的形式

当社の100%子会社である株式会社インプレスR&Dと株式会社メディアドゥを新設分割会社とし、「株式会社PUBFUN」を新設分割設立会社とする共同新設分割

結合後企業の名称

株式会社PUBFUN

取得した議決権比率

51%

取得企業を決定するに至った主な根拠

企業結合の対価として、新設分割設立会社の株式の過半数を取得したためであります。

(2)当連結会計年度に係る連結損益計算書に含まれる被取得企業の業績の期間

2022年4月1日から2023年3月31日

(3)被取得企業の取得原価及び対価の種類ごとの内訳

取得の対価	企業結合日に交付した株式会社PUBFUNの普通株式の時価	160,000千円
取得原価		160,000千円

(4)主要な取得関連費用の内容及び金額

アドバイザーに対する報酬・手数料等 1,500千円

(5)発生したのれんの金額、発生原因、償却方法及び償却期間

発生したのれんの金額

159,755千円

発生原因

主として、株式会社PUBFUNがPOD事業を展開していくことによって期待される超過収益力であります。

償却方法及び償却期間

5年間にわたる均等償却

(共通支配下の取引)

(1)取引の概要

対象となった事業の名称及びその事業の内容

事業の名称 当社の100%子会社である株式会社インプレスR&Dの個人向けPOD出版プラットフォームサービス

事業の内容 個人向けPOD出版サービス事業

企業結合日

2022年4月1日

企業結合の法的形式

当社の100%子会社である株式会社インプレスR&Dと株式会社メディアドゥを新設分割会社とし、「株式会社PUBFUN」を新設分割設立会社とする共同新設分割

結合後企業の名称

株式会社PUBFUN

(2)その他取引の概要に関する事項

「取得による企業結合」に記載のとおりであります。

(3)実施した会計処理の概要

「企業結合に関する会計基準（企業会計基準第21号 2019年1月16日）」及び「企業結合会計基準及び事業分離等会計基準に関する適用指針（企業会計基準適用指針第10号 2019年1月16日）」に基づき、共通支配下の取引として処理しております。

(取得による企業結合)

当社グループは、当社の持分法非適用の関連会社であった株式会社シフカの株式を追加取得し、完全子会社化しました。

(1)企業結合の概要

被取得企業の名称及びその事業の内容

被取得企業の名称 株式会社シフカ

事業の内容 UI/UXデザイン及びコンサル、デザイン/イラスト制作等

企業結合を行った主な理由

株式会社シフカは、当社グループの年賀状ムックにおけるイラストデザインの中心的な制作会社であり、また、UI/UXデザイン及びコンサルティングに強みを持つ会社です。今後は株式会社シフカの企画デザインの強みを企業向けの企画提案等に活用し、ソリューション事業等でのシナジーの創出に取り組んでまいります。

企業結合日

2022年9月1日（みなし取得日2022年9月30日）

企業結合の法的形式

現金を対価とする株式取得

結合後企業の名称

変更ありません

取得した議決権比率

70%

取得企業を決定するに至った主な根拠

当社が現金を対価として、株式の過半数を取得したためであります。

(2)当連結会計年度に係る連結損益計算書に含まれる被取得企業の業績の期間

2022年10月1日から2023年3月31日

(3)被取得企業の取得原価及び対価の種類ごとの内訳

取得の対価	現金	64,960千円
取得原価		64,960千円

(4)主要な取得関連費用の内容及び金額

アドバイザーに対する報酬・手数料等 2,000千円

(5)被取得企業の取得原価と取得するに至った取引ごとの取得原価の合計額との差額

段階取得に係る差益 21,415千円

(6)発生した負ののれん発生益の金額及び発生原因

企業結合時の時価純資産が取得原価を上回ったため、その差額7,665千円を負ののれん発生益として計上しております。

(資産除去債務関係)

前連結会計年度(2022年3月31日)

重要性が乏しいため、記載を省略しております。

当連結会計年度(2023年3月31日)

重要性が乏しいため、記載を省略しております。

(賃貸等不動産関係)

前連結会計年度(自 2021年4月1日 至 2022年3月31日)

重要性が乏しいため、記載を省略しております。

当連結会計年度(自 2022年4月1日 至 2023年3月31日)

重要性が乏しいため、記載を省略しております。

(収益認識関係)

1. 顧客との契約から生じる収益を分解した情報

顧客との契約から生じる収益を分解した情報は、「注記事項(セグメント情報等)」に記載のとおりであります。

2. 顧客との契約から生じる収益を理解するための基礎となる情報

収益を理解するための基礎となる情報は、「(連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項) 4. 会計方針に関する事項 (5) 重要な収益及び費用の計上基準」に記載のとおりです。

3. 顧客との契約に基づく履行義務の充足と当該契約から生じるキャッシュ・フローとの関係並びに当連結会計年度末において存在する顧客との契約から翌連結会計年度以降に認識すると見込まれる収益の金額及び時期に関する情報

契約資産及び契約負債の残高等

	前連結会計年度	当連結会計年度
顧客との契約から生じた債権(期首残高)		
受取手形	92,861千円	59,507千円
売掛金	3,705,107千円	4,352,667千円
	3,797,969千円	4,412,175千円
顧客との契約から生じた債権(期末残高)		
受取手形	59,507千円	73,037千円
売掛金	4,352,667千円	4,355,236千円
	4,412,175千円	4,428,274千円
返品資産(期首残高)	218,465千円	245,392千円
返品資産(期末残高)	245,392千円	278,114千円
返金負債(期首残高)	434,842千円	518,824千円
返金負債(期末残高)	518,824千円	547,316千円

当社グループの出版・電子出版事業においては、出版業界の慣行に従い、原則として出版取次経由で書店に配本した書籍及び雑誌等について、配本後、約定期間(委託期間)内に限り、返品を受け入れることを条件とする委託販売制度を採用しており、当該制度による将来返品が見込まれる額を変動対価として販売時に収益を認識せず、返品資産及び返金負債を計上しております。なお、約定期間(委託期間)は1から6ヶ月となっております。

過去の期間に充足した履行義務から、当連結会計年度に認識した収益の額に重要性はありません。

(セグメント情報等)

【セグメント情報】

前連結会計年度(自 2021年4月1日 至 2022年3月31日)

1. 報告セグメントの概要

当社グループの報告セグメントは、当社グループの構成単位のうち分離された財務情報が入手可能であり、当社取締役会が、経営資源の配分の決定及び業績を評価するために、定期的に検討を行う対象となっているものであります。

当社グループは、各専門分野を事業領域とするメディア企業で構成されたメディアグループであり、「IT」、「音楽」、「デザイン」、「山岳・自然」、「航空・鉄道」及び「モバイルサービス」の各専門分野を報告セグメントとしております。

各報告セグメントでは、それぞれの専門分野において、コンテンツ事業及びプラットフォーム事業を行っております。

2. 報告セグメントごとの売上高、利益又は損失、資産、負債その他の項目の金額の算定方法

報告されている事業セグメントの会計処理方法は、「連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項」における記載と概ね同一であります。

報告セグメントの利益又は損失は、営業利益ベースの数値であります。

セグメント間の内部収益及び振替高は市場実勢価格に基づいております。

3. 報告セグメントごとの売上高、利益又は損失、資産、負債その他の項目の金額に関する情報及び収益の分解情報
(単位：千円)

	報告セグメント							その他 (注) 1	調整額 (注) 3	連結 財務諸表 計上額 (注) 2
	IT	音楽	デザイン	山岳・自然	航空・鉄道	モバイル サービス	計			
売上高										
コンテンツ事業	6,344,181	1,476,402	1,033,165	1,803,296	816,939	193,737	11,667,723	650,966	-	12,318,689
メディア& サービス事業	5,892,372	1,335,901	1,033,165	1,741,255	753,410	128,194	10,884,299	258,280	-	11,142,579
出版・電子出版	3,038,007	1,186,216	1,007,663	1,679,930	734,157	128,015	7,773,990	258,280	-	8,032,270
ネットメディア ・サービス	1,643,491	149,684	25,502	61,324	19,253	178	1,899,435	-	-	1,899,435
ターゲット メディア	1,210,872	-	-	-	-	-	1,210,872	-	-	1,210,872
ソリューション 事業	451,809	140,500	-	62,041	63,529	65,542	783,424	392,685	-	1,176,110
プラットフォーム 事業	273,987	465,620	-	-	-	1,499,949	2,239,557	220,514	-	2,460,071
顧客との契約から 生じる収益	6,618,169	1,942,022	1,033,165	1,803,296	816,939	1,693,686	13,907,280	871,480	-	14,778,761
外部顧客への売上高	6,618,169	1,942,022	1,033,165	1,803,296	816,939	1,693,686	13,907,280	871,480	-	14,778,761
セグメント間の内部 売上高又は振替高	36,781	15,150	24,285	18,660	13,640	6,272	114,792	57,800	172,593	-
計	6,654,951	1,957,173	1,057,451	1,821,956	830,580	1,699,959	14,022,073	929,281	172,593	14,778,761
セグメント利益又は 損失()	1,144,115	114,800	14,860	51,256	105,980	308,886	1,498,217	10,048	659,998	848,267
セグメント資産	5,197,001	2,012,208	592,430	1,237,977	2,231,364	995,364	12,266,346	1,021,665	2,444,858	15,732,870
その他の項目										
減価償却費	10,883	17,791	1,510	6,457	715	2,188	39,546	85	97,697	137,329
有形固定資産及 び無形固定資産 の増加額	22,324	45,058	8,508	12,665	4,352	665	93,573	-	288,557	382,130

(注) 1. 「その他」の区分は、報告セグメントに含まれない事業セグメントであり、出版・電子出版、企業・自治体向けSP・PRツール及びWebサイト等の受託制作、出版流通プラットフォームの開発・運営等が含まれております。

2. セグメント利益又は損失は、調整を行い、連結損益計算書の営業利益と一致しております。

3. 調整額は以下のとおりであります。

- (1) セグメント利益又は損失の調整額 659,998千円には、セグメント間取引消去 172,593千円、各報告セグメントに配賦していない全社費用 1,864,001千円、セグメント間の営業費用取引消去1,376,596千円が含まれております。
- (2) セグメント資産の調整額2,444,858千円には、セグメント間取引消去 6,064,570千円、各報告セグメントに配賦していない全社資産8,509,429千円が含まれております。
- (3) 減価償却費の調整額97,697千円は、セグメント間取引消去 5,692千円、各報告セグメントに帰属しない減価償却費103,390千円であります。
- (4) 有形固定資産及び無形固定資産の増加額の調整額288,557千円は、全社共通インフラ等への設備投資額であります。

当連結会計年度(自 2022年4月1日 至 2023年3月31日)

1. 報告セグメントの概要

当社グループの報告セグメントは、当社グループの構成単位のうち分離された財務情報が入手可能であり、当社取締役会が、経営資源の配分の決定及び業績を評価するために、定期的に検討を行う対象となっているものであります。

当社グループは、各専門分野を事業領域とするメディア企業で構成されたメディアグループであり、「IT」、「音楽」、「デザイン」、「山岳・自然」、「航空・鉄道」及び「モバイルサービス」の各専門分野を報告セグメントとしております。

各報告セグメントでは、それぞれの専門分野において、コンテンツ事業及びプラットフォーム事業を行っております。

なお、第2四半期連結会計期間において、株式会社Impress Professional Worksは、グループの組織再編に伴い、全社機能を株式会社インプレスホールディングスに事業譲渡しました。譲渡した全社機能については引き続き調整額に含めております。また、株式会社Impress Professional Worksは、グループ共通の事業基盤(ビジネス・プラットフォーム)の構築・運営に特化した会社へ再編したことにより、称号を株式会社IPGネットワークに改め、「その他」に含めております。

2. 報告セグメントごとの売上高、利益又は損失、資産、負債その他の項目の金額の算定方法

報告されている事業セグメントの会計処理方法は、「連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項」における記載と概ね同一であります。

報告セグメントの利益又は損失は、営業利益ベースの数値であります。

セグメント間の内部収益及び振替高は市場実勢価格に基づいております。

3. 報告セグメントごとの売上高、利益又は損失、資産、負債その他の項目の金額に関する情報及び収益の分解情報
(単位：千円)

	報告セグメント							その他 (注) 1	調整額 (注) 3	連結 財務諸表 計上額 (注) 2
	IT	音楽	デザイン	山岳・自然	航空・鉄道	モバイル サービス	計			
売上高										
コンテンツ事業	6,043,159	1,380,068	991,966	1,667,504	1,392,153	196,925	11,671,778	788,582	-	12,460,361
メディア& サービス事業	5,670,300	1,270,495	991,966	1,573,281	1,326,039	128,711	10,960,795	239,765	-	11,200,561
出版・電子出版	2,845,529	1,152,773	975,046	1,502,521	1,292,313	128,711	7,896,895	237,295	-	8,134,191
ネットメディア ・サービス	1,539,504	117,722	16,920	70,759	33,726	-	1,778,632	2,470	-	1,781,103
ターゲット メディア	1,285,267	-	-	-	-	-	1,285,267	-	-	1,285,267
ソリューション 事業	372,859	109,572	-	94,222	66,114	68,214	710,983	548,816	-	1,259,799
プラットフォーム 事業	278,359	460,088	-	-	-	1,616,661	2,355,108	345,677	-	2,700,786
顧客との契約から 生じる収益	6,321,518	1,840,156	991,966	1,667,504	1,392,153	1,813,587	14,026,887	1,134,259	-	15,161,147
外部顧客への売上高	6,321,518	1,840,156	991,966	1,667,504	1,392,153	1,813,587	14,026,887	1,134,259	-	15,161,147
セグメント間の内部 売上高又は振替高	40,032	3,477	21,091	18,051	11,713	7,622	101,988	443,858	545,847	-
計	6,361,551	1,843,633	1,013,058	1,685,555	1,403,867	1,821,209	14,128,875	1,578,118	545,847	15,161,147
セグメント利益又は 損失()	903,020	109,598	75,791	32,286	88,702	386,243	982,885	5,683	591,082	386,119
セグメント資産	4,784,269	1,611,834	630,300	1,189,936	1,168,320	1,215,723	10,600,385	1,890,109	3,453,923	15,944,417
その他の項目										
減価償却費	15,427	30,506	1,976	6,612	2,405	652	57,581	3,124	84,917	145,623
有形固定資産及 び無形固定資産 の増加額	18,692	41,575	1,350	30,037	-	204	91,859	32,264	14,315	138,439

(注) 1. 「その他」の区分は、報告セグメントに含まれない事業セグメントであり、出版・電子出版、企業・自治体向けSP・PRツール及びWebサイト等の受託制作、ECプラットフォーム・出版流通プラットフォームの開発・運営、グループ各社の出版物流・販売管理等が含まれております。

2. セグメント利益又は損失は、調整を行い、連結損益計算書の営業利益と一致しております。

3. 調整額は以下のとおりであります。

- (1) セグメント利益又は損失の調整額 591,082千円には、セグメント間取引消去 545,847千円、各報告セグメントに配賦していない全社費用 1,707,554千円、セグメント間の営業費用取引消去1,662,320千円が含まれております。
- (2) セグメント資産の調整額3,453,923千円には、セグメント間取引消去 4,211,428千円、各報告セグメントに配賦していない全社資産7,665,351千円が含まれております。
- (3) 減価償却費の調整額84,917千円は、セグメント間取引消去 13,089千円、各報告セグメントに帰属しない減価償却費98,006千円であります。
- (4) 有形固定資産及び無形固定資産の増加額の調整額14,315千円は、全社共通インフラ等への設備投資額であります。

【関連情報】

前連結会計年度(自 2021年4月1日 至 2022年3月31日)

1. 製品及びサービスごとの情報

(単位：千円)

	コンテンツ事業	プラットフォーム事業	合計
外部顧客への売上高	12,318,689	2,460,071	14,778,761

2. 地域ごとの情報

(1) 売上高

本邦の外部顧客への売上高が連結損益計算書の売上高の90%を超えるため、記載を省略しております。

(2) 有形固定資産

本邦に所在している有形固定資産の金額が連結貸借対照表の有形固定資産の金額の90%を超えるため、記載を省略しております。

3. 主要な顧客ごとの情報

(単位：千円)

顧客の名称又は氏名	売上高
日本出版販売(株)	2,469,518
(株)トーハン	2,436,720
アマゾンジャパン(合)	1,838,304

(注) (株)トーハン、日本出版販売(株)、アマゾンジャパン(合)は、コンテンツ事業に関連する取引であり、関連する主なセグメントは、ITセグメント、音楽セグメント、デザインセグメント、山岳・自然セグメントです。

当連結会計年度(自 2022年4月1日 至 2023年3月31日)

1. 製品及びサービスごとの情報

(単位：千円)

	コンテンツ事業	プラットフォーム事業	合計
外部顧客への売上高	12,460,361	2,700,786	15,161,147

2. 地域ごとの情報

(1) 売上高

本邦の外部顧客への売上高が連結損益計算書の売上高の90%を超えるため、記載を省略しております。

(2) 有形固定資産

本邦に所在している有形固定資産の金額が連結貸借対照表の有形固定資産の金額の90%を超えるため、記載を省略しております。

3. 主要な顧客ごとの情報

(単位：千円)

顧客の名称又は氏名	売上高
(株)トーハン	2,536,381
日本出版販売(株)	2,271,388
アマゾンジャパン(合)	1,855,305

(注) (株)トーハン、日本出版販売(株)、アマゾンジャパン(合)は、コンテンツ事業に関連する取引であり、関連する主なセグメントは、ITセグメント、音楽セグメント、デザインセグメント、山岳・自然セグメント及び航空・鉄道セグメントです。

【報告セグメントごとの固定資産の減損損失に関する情報】

前連結会計年度(自 2021年4月1日 至 2022年3月31日)

該当事項はありません。

当連結会計年度(自 2022年4月1日 至 2023年3月31日)

該当事項はありません。

【報告セグメントごとののれんの償却額及び未償却残高に関する情報】

前連結会計年度(自 2021年4月1日 至 2022年3月31日)

該当事項はありません。

当連結会計年度(自 2022年4月1日 至 2023年3月31日)

(単位：千円)

	報告セグメント							その他 (注)	全社・ 消去	合計
	IT	音楽	デザイン	山岳・ 自然	航空・ 鉄道	モバイル サービス	計			
当期償却額	-	-	-	-	-	-	-	31,951	-	31,951
当期末残高	-	-	-	-	-	-	-	127,804	-	127,804

(注) 「その他」の金額は、当社の100%子会社である株式会社インプレスR&Dと株式会社メディアドゥを新設分割会社とする共同新設分割により発生したのれんであります。

【報告セグメントごとの負ののれん発生益に関する情報】

前連結会計年度(自 2021年4月1日 至 2022年3月31日)

「航空・鉄道」において、イカロス出版株式会社を株式取得により連結子会社としたことに伴い、187,179千円の負ののれん発生益を特別利益に計上しております。

なお、当該負ののれん発生益はセグメント利益に含まれておりません。

当連結会計年度(自 2022年4月1日 至 2023年3月31日)

「その他」において、株式会社シフカの発行する株式の追加取得により連結子会社としたことに伴い、7,665千円の負ののれん発生益を特別利益に計上しております。

なお、当該負ののれん発生益はセグメント利益に含まれておりません。

【関連当事者情報】

1. 連結財務諸表提出会社と関連当事者との取引

前連結会計年度(自 2021年4月1日 至 2022年3月31日)

該当事項はありません。

当連結会計年度(自 2022年4月1日 至 2023年3月31日)

該当事項はありません。

2. 親会社又は重要な関連会社に関する注記

当連結会計年度において、重要な関連会社は、(株)ファンギルドであり、その要約財務情報は以下のとおりであります。

(単位：千円)

	(株)ファンギルド	
	前連結 会計年度	当連結 会計年度
流動資産合計	2,129,329	2,722,004
固定資産合計	297,330	505,862
流動負債合計	966,213	1,503,311
固定負債合計	14,812	20,279
純資産合計	1,445,634	1,704,276
売上高	2,861,618	4,021,753
税引前当期純利益金額	492,468	628,975
当期純利益金額	291,906	346,213

(1株当たり情報)

前連結会計年度 (自 2021年4月1日 至 2022年3月31日)		当連結会計年度 (自 2022年4月1日 至 2023年3月31日)	
1株当たり純資産額	275円81銭	1株当たり純資産額	280円98銭
1株当たり当期純利益金額	26円19銭	1株当たり当期純利益金額	11円15銭
なお、潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額については、潜在株式が存在しないため記載しておりません。		なお、潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額については、潜在株式が存在しないため記載しておりません。	

(注)1. 1株当たり当期純利益金額の算定上の基礎は、以下のとおりであります。

項目	前連結会計年度 (自 2021年4月1日 至 2022年3月31日)	当連結会計年度 (自 2022年4月1日 至 2023年3月31日)
1株当たり当期純利益金額		
親会社株主に帰属する当期純利益(千円)	875,972	375,854
普通株主に帰属しない金額(千円)	-	-
普通株式に係る親会社株主に帰属する当期純利益(千円)	875,972	375,854
普通株式の期中平均株式数(株)	33,451,425	33,717,107
希薄化効果を有しないため、潜在株式調整後1株当たり当期純利益の算定に含めなかった潜在株式の概要	-	-

2. 1株当たり純資産額の算定上の基礎は、以下のとおりであります。

	前連結会計年度 (2022年3月31日)	当連結会計年度 (2023年3月31日)
純資産の部の合計額(千円)	9,233,943	9,654,121
純資産の部の合計額から控除する金額(千円)	6,038	148,310
(うち非支配株主持分)(千円)	(6,038)	(148,310)
普通株式に係る期末の純資産額(千円)	9,227,904	9,505,811
1株当たり純資産額の算定に用いられた期末の普通株式の数(株)	33,457,077	33,831,341

(重要な後発事象)

該当事項はありません。

【連結附属明細表】

【社債明細表】

該当事項はありません。

【借入金等明細表】

区分	当期首残高 (千円)	当期末残高 (千円)	平均利率 (%)	返済期限
短期借入金	350,000	350,000	0.70	-
1年以内に返済予定の長期借入金	125,000	103,125	0.65	-
1年以内に返済予定のリース債務	-	-	-	-
長期借入金(1年以内に返済予定のものを除く。)	137,500	184,375	0.66	2024年～2026年
リース債務(1年以内に返済予定のものを除く。)	-	-	-	-
その他有利子負債	-	-	-	-
合計	612,500	637,500	-	-

(注) 1. 「平均利率」については借入金等の期末残高に対する加重平均利率を記載しております。

2. 長期借入金(1年以内に返済予定のものを除く。)の連結決算日後5年間の返済予定額は以下のとおりであります。

	1年超2年以内 (千円)	2年超3年以内 (千円)	3年超4年以内 (千円)	4年超5年以内 (千円)
長期借入金	134,375	50,000	-	-

【資産除去債務明細表】

当連結会計年度期首及び当連結会計年度末における資産除去債務の金額が、当連結会計年度期首及び当連結会計年度末における負債及び純資産の合計額の100分の1以下であるため、連結財務諸表規則第92条の2の規定により記載を省略しております。

(2) 【その他】

当連結会計年度における四半期情報等

(累計期間)	第1四半期	第2四半期	第3四半期	当連結会計年度
売上高(千円)	3,480,085	7,247,169	11,432,790	15,161,147
税金等調整前四半期(当期) 純利益金額(千円)	126,106	239,760	482,027	514,772
親会社株主に帰属する 四半期(当期)純利益金額(千円)	65,458	147,166	320,677	375,854
1株当たり四半期(当期) 純利益金額(円)	1.96	4.38	9.52	11.15

(会計期間)	第1四半期	第2四半期	第3四半期	第4四半期
1株当たり四半期純利益金額	1.96	2.42	5.13	1.63

2 【財務諸表等】

(1) 【財務諸表】

【貸借対照表】

(単位：千円)

	前事業年度 (2022年3月31日)	当事業年度 (2023年3月31日)
資産の部		
流動資産		
現金及び預金	5,639,125	5,114,069
売掛金	35,072	93,586
前払費用	21,224	112,893
短期貸付金	383,952	377,715
未収入金	495,721	331,624
未収還付法人税等	118,417	350,340
その他	12,895	5,149
貸倒引当金	129,000	89,000
流動資産合計	6,577,410	6,296,377
固定資産		
有形固定資産		
建物	90,811	277,710
減価償却累計額	3,149	116,118
建物(純額)	87,662	161,592
工具、器具及び備品	121,585	410,495
減価償却累計額	7,222	212,863
工具、器具及び備品(純額)	114,363	197,631
建設仮勘定	-	3,047
有形固定資産合計	202,026	362,271
無形固定資産		
ソフトウェア	3,663	36,293
電話加入権	728	4,124
無形固定資産合計	4,391	40,418
投資その他の資産		
投資有価証券	179,152	179,328
関係会社株式	4,518,402	3,397,602
関係会社長期貸付金	447,000	111,000
繰延税金資産	-	12,398
敷金及び保証金	-	418,135
その他	35,883	13,120
貸倒引当金	285,000	6,000
投資その他の資産合計	4,895,438	4,125,584
固定資産合計	5,101,857	4,528,274
資産合計	11,679,267	10,824,652

(単位：千円)

	前事業年度 (2022年3月31日)	当事業年度 (2023年3月31日)
負債の部		
流動負債		
短期借入金	350,000	350,000
1年内返済予定の長期借入金	125,000	103,125
未払金	246,662	190,134
未払費用	8,958	11,931
未払法人税等	13,571	15,992
預り金	3,718,578	2,438,167
賞与引当金	6,473	8,678
その他	-	5,110
流動負債合計	4,469,244	3,123,139
固定負債		
長期借入金	137,500	184,375
繰延税金負債	113	-
退職給付引当金	81,914	150,448
長期預り保証金	-	37,229
長期未払金	8,491	17,456
その他	-	13,956
固定負債合計	228,018	403,466
負債合計	4,697,263	3,526,606
純資産の部		
株主資本		
資本金	5,341,021	5,341,021
資本剰余金		
資本準備金	8,888	8,888
その他資本剰余金	1,646,440	1,660,660
資本剰余金合計	1,655,329	1,669,549
利益剰余金		
利益準備金	49,605	71,352
その他利益剰余金		
繰越利益剰余金	633,792	847,349
利益剰余金合計	683,398	918,702
自己株式	698,003	631,364
株主資本合計	6,981,745	7,297,907
評価・換算差額等		
その他有価証券評価差額金	258	138
評価・換算差額等合計	258	138
純資産合計	6,982,003	7,298,046
負債純資産合計	11,679,267	10,824,652

【損益計算書】

(単位：千円)

	前事業年度 (自 2021年 4月 1日 至 2022年 3月 31日)	当事業年度 (自 2022年 4月 1日 至 2023年 3月 31日)
営業収益	1 1,137,781	1 1,686,641
営業費用		
販売費及び一般管理費	1, 2 965,433	1, 2 1,532,403
営業利益	172,348	154,237
営業外収益		
受取利息	1 7,681	1 9,108
受取配当金	631	1,121
貸倒引当金戻入額	-	49,000
その他	1,917	1,186
営業外収益合計	10,230	60,416
営業外費用		
支払利息	1 9,828	1 10,891
貸倒引当金繰入額	26,000	-
営業外費用合計	35,828	10,891
経常利益	146,750	203,762
特別利益		
投資有価証券売却益	9,063	-
貸倒引当金戻入額	-	270,000
特別利益合計	9,063	270,000
特別損失		
固定資産除却損	-	5,457
関係会社株式評価損	-	23,323
抱合せ株式消滅差損	-	200,323
特別損失合計	-	229,105
税引前当期純利益	155,813	244,657
法人税、住民税及び事業税	174,359	195,658
法人税等調整額	-	12,459
法人税等合計	174,359	208,117
当期純利益	330,173	452,775

【株主資本等変動計算書】

前事業年度(自 2021年4月1日 至 2022年3月31日)

(単位：千円)

	株主資本						
	資本金	資本剰余金			利益剰余金		
		資本準備金	その他 資本剰余金	資本剰余金合計	利益準備金	その他利益 剰余金 繰越利益 剰余金	利益剰余金合計
当期首残高	5,341,021	8,888	1,645,723	1,654,612	36,230	450,747	486,977
当期変動額							
当期純利益						330,173	330,173
剰余金の配当						133,752	133,752
利益準備金の積立					13,375	13,375	-
自己株式の取得							
自己株式の処分			716	716			
株主資本以外の項目の当期変動額(純額)							
当期変動額合計	-	-	716	716	13,375	183,045	196,420
当期末残高	5,341,021	8,888	1,646,440	1,655,329	49,605	633,792	683,398

	株主資本		評価・換算差額等		純資産合計
	自己株式	株主資本合計	その他有価証券 評価差額金	評価・換算 差額等合計	
当期首残高	702,011	6,780,600	72	72	6,780,673
当期変動額					
当期純利益		330,173			330,173
剰余金の配当		133,752			133,752
利益準備金の積立		-			-
自己株式の取得	774	774			774
自己株式の処分	4,782	5,499			5,499
株主資本以外の項目の当期変動額(純額)			185	185	185
当期変動額合計	4,007	201,145	185	185	201,330
当期末残高	698,003	6,981,745	258	258	6,982,003

当事業年度(自 2022年4月1日 至 2023年3月31日)

(単位：千円)

	株主資本						
	資本金	資本剰余金			利益剰余金		
		資本準備金	その他 資本剰余金	資本剰余金合計	利益準備金	その他利益 剰余金 繰越利益 剰余金	利益剰余金合計
当期首残高	5,341,021	8,888	1,646,440	1,655,329	49,605	633,792	683,398
当期変動額							
当期純利益						452,775	452,775
剰余金の配当						217,471	217,471
利益準備金の積立					21,747	21,747	-
自己株式の取得							
自己株式の処分			14,219	14,219			
株主資本以外の項目の当 期変動額(純額)							
当期変動額合計	-	-	14,219	14,219	21,747	213,556	235,303
当期末残高	5,341,021	8,888	1,660,660	1,669,549	71,352	847,349	918,702

	株主資本		評価・換算差額等		純資産合計
	自己株式	株主資本合計	その他有価証券 評価差額金	評価・換算 差額等合計	
当期首残高	698,003	6,981,745	258	258	6,982,003
当期変動額					
当期純利益		452,775			452,775
剰余金の配当		217,471			217,471
利益準備金の積立		-			-
自己株式の取得	678	678			678
自己株式の処分	67,316	81,536			81,536
株主資本以外の項目の当 期変動額(純額)			119	119	119
当期変動額合計	66,638	316,162	119	119	316,042
当期末残高	631,364	7,297,907	138	138	7,298,046

【注記事項】

(重要な会計方針)

1．有価証券の評価基準及び評価方法

(1) 満期保有目的の債券

償却原価法(定額法)

(2) 子会社株式及び関連会社株式

移動平均法による原価法

(3) その他有価証券

市場価格のない株式等以外のもの

決算日の市場価格等に基づく時価法(評価差額は全部純資産直入法により処理し、売却原価は移動平均法により算定)

市場価格のない株式等

移動平均法による原価法

2．固定資産の減価償却の方法

(1) 有形固定資産

定額法

(2) 無形固定資産

ソフトウェア(自社利用分)

社内における利用可能期間(2年～5年)に基づく定額法

3．外貨建の資産及び負債の本邦通貨への換算基準

外貨建金銭債権債務は、期末日の直物等為替相場により円貨に換算し、換算差額は損益として処理しております。

4．引当金の計上基準

(1) 貸倒引当金

債権の貸倒れによる損失に備えるため、一般債権については貸倒実績率による計算額を、貸倒懸念債権等特定の債権については、個別に回収可能性を検討し、回収不能見込額を計上しております。

(2) 賞与引当金

従業員に対して支給する賞与の支出に充てるため、将来の支給見込額のうち当事業年度に負担すべき額を計上しております。

(3) 退職給付引当金

退職給付見込額の期間帰属方法

退職給付債務の算定にあたり、退職給付見込額を当事業年度末までの期間に帰属させる方法については、給付算定式基準によっております。

数理計算上の差異の費用処理方法

数理計算上の差異は、各事業年度の発生時における従業員の平均残存勤務期間以内の一定の年数(7年)による定額法により按分した額をそれぞれ発生の翌事業年度から費用処理することとしております。

5. 収益及び費用の計上基準

当社の顧客との契約から生じる収益に関する主要な事業における主な履行義務の内容及び当該履行義務を充足する通常の時点（収益を認識する通常の時点）は、以下のとおりであります。

当社の収益は、子会社からのグループ運営収入（経営指導料、受取手数料、グループ運営費、業務受託料）及び受取配当金となります。グループ運営収入については、子会社との契約内容に応じて、グループ運営の為の各種サービス（経営指導、資産使用料、受託業務等）を提供することが履行義務であり、当該業務が実施された時点で当社の履行義務が充足されたと判断し、収益を認識しております。なお、取引の対価については、履行義務の充足時点から概ね1ヶ月以内に受領しており、重要な金融要素は含まれておりません。

また、受取配当金については、配当金の効力発生日をもって認識しております。

6. ヘッジ会計の方法

(1) ヘッジ会計の方法

金利スワップについては、特例処理の条件を充たしているものは、特例処理を採用しております。

(2) ヘッジ手段とヘッジ対象

ヘッジ手段・・・金利スワップ

ヘッジ対象・・・借入金の利息

(3) ヘッジ方針

借入金の金利変動リスクを回避する目的で、金利スワップ取引を行っており、ヘッジ対象の識別は、個別契約ごとに行っております。

(4) ヘッジ有効性評価の方法

特例処理の要件を満たしている金利スワップについては、有効性の判定を省略しております。

7. その他財務諸表作成のための基本となる重要な事項

退職給付に係る会計処理

退職給付に係る未認識数理計算上の差異の未処理額の会計処理の方法は、連結財務諸表における会計処理と異なっております。

(重要な会計上の見積り)

繰延税金資産の回収可能性

(1) 当事業年度の財務諸表に計上した金額

繰延税金資産 12,398千円

繰延税金負債との相殺前の金額は12,459千円であります。

(2) 識別した項目に係る重要な会計上の見積りの内容に関する情報

連結財務諸表「注記事項（重要な会計上の見積り）」に記載した内容と同一であります。

(貸借対照表関係)

関係会社に係る注記

区分掲記されたもの以外で各科目に含まれている関係会社に対するものは次のとおりであります。

	前事業年度 (2022年3月31日)	当事業年度 (2023年3月31日)
預り金	3,712,145千円	2,429,863千円

(損益計算書関係)

1. 関係会社との取引に係るものが次のとおり含まれております。

	前事業年度 (自 2021年4月1日 至 2022年3月31日)		当事業年度 (自 2022年4月1日 至 2023年3月31日)
営業収益		営業収益	
受取手数料	372,813千円	受取手数料	952,115千円
受取配当金	764,968	受取配当金	734,525
営業費用		営業費用	
業務委託費	74,659	業務委託費	49,041
支払手数料	61,853	支払手数料	65,844
その他	198,958	その他	70,837
営業外収益		営業外収益	
受取利息	7,662	受取利息	9,095
営業外費用		営業外費用	
支払利息	5,229	支払利息	6,604

2. 販売費に属する費用はなく、全て一般管理費に属する費用であります。

主要な費目及び金額は次のとおりであります。

	前事業年度 (自 2021年4月1日 至 2022年3月31日)	当事業年度 (自 2022年4月1日 至 2023年3月31日)
役員報酬	160,302千円	142,839千円
給与手当及び賞与	148,551	282,980
賞与引当金繰入額	6,473	8,678
退職給付費用	5,494	12,469
減価償却費	10,269	72,772
地代家賃	-	271,027
支払手数料	125,674	156,935
業務委託費	166,288	180,544

(有価証券関係)

前事業年度(2022年3月31日)

子会社株式及び関連会社株式(貸借対照表計上額 子会社株式4,492,301千円、関連会社株式26,101千円)は、市場価格のない株式等であることから、記載しておりません。

当事業年度(2023年3月31日)

子会社株式及び関連会社株式(貸借対照表計上額 子会社株式3,377,925千円、関連会社株式19,676千円)は、市場価格のない株式等であることから、記載しておりません。

(税効果会計関係)

1. 繰延税金資産及び繰延税金負債の発生の主な原因別の内訳

	前事業年度 (2022年3月31日)	当事業年度 (2023年3月31日)
	(千円)	(千円)
繰延税金資産		
賞与引当金	1,982	2,657
退職給付引当金	25,082	46,067
繰越欠損金	697,163	611,896
投資有価証券評価損	40,964	35,343
関係会社株式評価損	477,778	791,608
貸倒引当金	118,805	29,089
減価償却超過額	1,950	9,679
未払事業所税	319	1,142
未払事業税	3,785	4,014
役員特別退職金	2,599	2,599
その他	7,373	6,086
繰延税金資産小計	1,377,804	1,540,185
税務上の繰越欠損金に係る評価性引当額	697,163	611,896
将来減算一時差異等の合計に係る評価性引当額	680,641	915,829
評価性引当額小計	1,377,804	1,527,726
繰延税金資産合計	-	12,459
繰延税金負債		
その他有価証券評価差額金	113	61
繰延税金負債合計	113	61
繰延税金資産純額	113	12,398

2. 法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との間に重要な差異があるときの、当該差異の原因となった主要な項目別の内訳

	前事業年度 (2022年3月31日)	当事業年度 (2023年3月31日)
法定実効税率	30.6%	30.6%
(調整)		
交際費等永久に損金に算入されない項目	3.8%	1.6%
受取配当金等永久に益金に算入されない項目	147.4%	213.1%
役員賞与・給与の損金不算入額	4.0%	2.5%
所得税額控除	100.3%	- %
住民税均等割等	0.8%	1.6%
評価性引当額の増減	99.5%	61.3%
繰越欠損金の期限切れ	3.4%	23.6%
繰越欠損金の繰戻しによる還付金額等	4.1%	14.0%
グループ通算による影響	-	28.8%
その他	2.1%	8.0%
税効果会計適用後の法人税等の負担率	111.9%	85.1%

3. 法人税及び地方法人税の会計処理又はこれらに関する税効果会計の会計処理

当社は、当事業年度から、グループ通算制度を適用しております。また、「グループ通算制度を適用する場合の会計処理及び開示に関する取扱い」(実務対応報告第42号 2021年8月12日)に従って、法人税及び地方法人税の会計処理又はこれらに関する税効果会計の会計処理並びに開示を行っております。

(企業結合等関係)

当事業年度(2023年3月31日)

共通支配下の取引

(吸収分割)

当社は2022年7月1日を効力発生日として、当社連結子会社である(株)Impress Professional Works(以下、「IW」という。)の組織再編及びIWが担う当社グループの経営管理機能を当社へ承継する吸収分割(以下、「本吸収分割」という。)を行いました。なお、本吸収分割は簡易吸収分割の方法により実施いたしました。

(1)取引の概要

対象となった事業の内容

IWが担っていた当社グループの経営管理機能

企業結合日

2022年7月1日

企業結合の法的形式

当社の100%子会社であるIWを吸収分割会社、当社を吸収分割承継会社とする吸収分割

結合後企業の名称

分割会社：株式会社IPGネットワーク

承継会社：株式会社インプレスホールディングス

その他取引の概要に関する事項

本吸収分割は、グループ戦略の策定機能、ガバナンス体制の強化及び経営管理業務の効率化を目的としております。

実施した会計処理の概要

「企業結合に関する会計基準(企業会計基準第21号 2019年1月16日)」及び「企業結合会計基準及び事業分離等会計基準に関する適用指針(企業会計基準適用指針第10号 2019年1月16日)」に基づき、共通支配下の取引として処理しております。

(収益認識関係)

収益を理解するための基礎となる情報

収益を理解するための基礎となる情報は、「(重要な会計方針) 5. 収益及び費用の計上基準」に記載のとおりです。

(重要な後発事象)

該当事項はありません。

【附属明細表】

【有形固定資産等明細表】

資産の種類	当期首残高 (千円)	当期増加額 (千円)	当期減少額 (千円)	当期末残高 (千円)	当期末減価 償却累計額 又は 償却累計額 (千円)	当期償却額 (千円)	差引当期末 残高 (千円)
有形固定資産							
建物	90,811	190,720	3,821	277,710	116,118	15,438	161,592
工具、器具及び備品	121,585	341,096	52,187	410,495	212,863	42,120	197,631
建設仮勘定	-	3,047	-	3,047	-	-	3,047
有形固定資産計	212,397	534,863	56,008	691,252	328,981	57,558	362,271
無形固定資産							
ソフトウェア	44,006	512,933	-	556,939	520,645	15,213	36,293
電話加入権	728	3,396	-	4,124	-	-	4,124
無形固定資産計	44,734	516,330	-	561,064	520,645	15,213	40,418

(注) 当期増加額のうち主なものは次のとおりです。

建物	オームビル配線工事	575千円
工具、器具及び備品	無線LANアクセスポイント入替 社内回線ファイアウォール入替	6,860千円 4,960千円
建設仮勘定	認証サーバ入替	3,047千円

なお、2022年7月1日を効力発生日として、当社の連結子会社である㈱Impress Professional Works(以下、「IW」という。)の組織再編及びIWが担う当社グループの経営管理機能を当社へ承継する吸収分割を実施した際に承継した主な固定資産は以下のとおりです。

建物	オフィス工事	190,145千円
工具、器具及び備品	オフィス什器、ネットワーク関連機材等	328,864千円
ソフトウェア	基幹システム、人事システム	512,933千円
電話加入権		3,396千円

【引当金明細表】

区分	当期首残高 (千円)	当期増加額 (千円)	当期減少額 (目的使用) (千円)	当期減少額 (その他) (千円)	当期末残高 (千円)
貸倒引当金	414,000	38,000	-	357,000	95,000
賞与引当金	6,473	8,678	6,473	-	8,678

(注) 貸倒引当金の「当期減少額(その他)」は、引当対象先の財務状況改善及び対象債権の減少によるものであります。

(2) 【主な資産及び負債の内容】

連結財務諸表を作成しているため、記載を省略しております。

(3) 【その他】

特記すべき事項はありません。

第6 【提出会社の株式事務の概要】

事業年度	毎年4月1日から翌年3月31日まで
定時株主総会	毎年6月
基準日	3月31日
剰余金の配当の基準日	9月30日 3月31日
1単元の株式数	100株
単元未満株式の買取り	
取扱場所	〔特別口座〕 東京都千代田区丸の内一丁目4番5号 三菱UFJ信託銀行(株) 証券代行部
株主名簿管理人	〔特別口座〕 東京都千代田区丸の内一丁目4番5号 三菱UFJ信託銀行(株)
買取手数料	株式の売買の委託に係る手数料相当額として別途定める金額
公告掲載方法	電子公告(ただし、やむを得ない事由が生じたときは、日本経済新聞に掲載する方法により行う。) http://www.impressholdings.com/ir/
株主に対する特典	毎年9月30日現在の株主(所有株式数100株以上)に対し、当社グループ電子出版物セットを贈呈(所有株式数に応じた数の電子出版物セットを選択)

(注) 2009年6月20日開催の第17期定時株主総会決議により定款の一部変更が行われ、単元未満株式について、次の権利以外の権利を行使することができない旨を定めております。

- (1) 会社法第189条第2項各号に掲げる権利
- (2) 会社法第166条第1項の規定による請求をする権利
- (3) 株主の有する株式数に応じて募集株式の割当て及び募集新株予約権の割当てを受ける権利

第7 【提出会社の参考情報】

1 【提出会社の親会社等の情報】

当社は、親会社等はありません。

2 【その他の参考情報】

当事業年度の開始日から有価証券報告書提出日までの間に、次の書類を提出しております。

1 . 有価証券報告書及びその添付書類並びに確認書

事業年度(第30期)(自 2021年4月1日 至 2022年3月31日)2022年6月24日関東財務局長に提出

2 . 内部統制報告書及びその添付書類

2022年6月24日関東財務局長に提出

3 . 四半期報告書及び確認書

(第31期第1四半期)(自 2022年4月1日 至 2022年6月30日)2022年8月15日関東財務局長に提出

(第31期第2四半期)(自 2022年7月1日 至 2022年9月30日)2022年11月14日関東財務局長に提出

(第31期第3四半期)(自 2022年10月1日 至 2022年12月31日)2023年2月14日関東財務局長に提出

4 . 臨時報告書

2022年6月27日関東財務局長に提出

企業内容等の開示に関する内閣府令第19条第2項第9号の2(株主総会における議決権行使の結果)に基づく臨時報告書であります。

第二部 【提出会社の保証会社等の情報】

該当事項はありません。

独立監査人の監査報告書及び内部統制監査報告書

2023年6月23日

株式会社インプレスホールディングス

取締役会 御中

EY新日本有限責任監査法人

東京事務所

指定有限責任社員
業務執行社員 公認会計士 本 多 茂 幸指定有限責任社員
業務執行社員 公認会計士 森 田 祥 且

< 財務諸表監査 >

監査意見

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づく監査証明を行うため、「経理の状況」に掲げられている株式会社インプレスホールディングスの2022年4月1日から2023年3月31日までの連結会計年度の連結財務諸表、すなわち、連結貸借対照表、連結損益計算書、連結包括利益計算書、連結株主資本等変動計算書、連結キャッシュ・フロー計算書、連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項、その他の注記及び連結附属明細表について監査を行った。

当監査法人は、上記の連結財務諸表が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して、株式会社インプレスホールディングス及び連結子会社の2023年3月31日現在の財政状態並びに同日をもって終了する連結会計年度の経営成績及びキャッシュ・フローの状況を、全ての重要な点において適正に表示しているものと認める。

監査意見の根拠

当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して監査を行った。監査の基準における当監査法人の責任は、「連結財務諸表監査における監査人の責任」に記載されている。当監査法人は、我が国における職業倫理に関する規定に従って、会社及び連結子会社から独立しており、また、監査人としてのその他の倫理上の責任を果たしている。当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

監査上の主要な検討事項

監査上の主要な検討事項とは、当連結会計年度の連結財務諸表の監査において、監査人が職業的専門家として特に重要であると判断した事項である。監査上の主要な検討事項は、連結財務諸表全体に対する監査の実施過程及び監査意見の形成において対応した事項であり、当監査法人は、当該事項に対して個別に意見を表明するものではない。

監査上の主要な検討事項の内容及び決定理由	監査上の対応
<p>【注記事項】（重要な会計上の見積り）及び【注記事項】（税効果会計関係）に記載されているとおり、会社は当連結会計年度からグループ通算制度へ移行しており、2023年3月31日現在、繰延税金資産472,448千円を計上している。</p> <p>通算グループに係る法人税に係る繰延税金資産は、通算グループ全体の収益力に基づく将来課税所得の見積額を基礎とし、回収可能と判断した額を計上している。回収可能額の算定は「繰延税金資産の回収可能性に関する適用指針」（企業会計基準適用指針第26号）で示されている会社分類の判定、将来の課税所得の十分性、スケジューリングされた将来減算一時差異の解消見込額等、経営者による判断や見積りに依存することになる。</p> <p>将来の課税所得の見積りの前提となる翌期の売上高見込みは、製品の需要予測やコスト上昇リスクを加味した事業計画に対して、事業区分毎の事業環境や各セグメントの変動リスクを分析した上で算出されており、経営者による重要な判断を伴う主要な仮定である。</p> <p>以上から、当監査法人は、繰延税金資産の回収可能性に関する判断の妥当性が、当連結会計年度の連結財務諸表監査において特に重要であり、監査上の主要な検討事項に該当するものと判断した。</p>	<p>当監査法人は、通算グループに係る繰延税金資産の回収可能性を検討するにあたり、主として以下の監査手続を実施した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・将来の課税所得の見積りの前提となる事業計画について、取締役会の議事録を閲覧し、経営者によって承認された事業計画との整合性を検討した。 ・経営者が決定した「繰延税金資産の回収可能性に関する適用指針」に基づく会社分類を評価するため、過去及び当期の課税所得の発生状況について関連資料を閲覧し、経営者に質問した。 ・将来減算一時差異の解消見込額を検討するため、当連結会計年度の課税所得計算結果を閲覧するとともに経営者に質問した。 ・事業計画に含まれる製品の需要予測やコスト上昇リスクと過去の実績及び利用可能な外部データを比較し、事業計画の合理性を評価した。 ・売上高見込みの見積りにあたって考慮した事業区分毎の事業環境及び各セグメントの事業計画の変動リスクについて、内容及び根拠を経営者に質問した。また、過年度の見積りと実績を比較し乖離要因の分析を実施することで、売上高見込みに対する経営者の見積りプロセスの有効性を判定するとともに、経営者による判断の合理性を評価した。

その他の記載内容

その他の記載内容は、有価証券報告書に含まれる情報のうち、連結財務諸表及び財務諸表並びにこれらの監査報告書以外の情報である。経営者の責任は、その他の記載内容を作成し開示することにある。また、監査役及び監査役会の責任は、その他の記載内容の報告プロセスの整備及び運用における取締役の職務の執行を監視することにある。

当監査法人の連結財務諸表に対する監査意見の対象にはその他の記載内容は含まれておらず、当監査法人はその他の記載内容に対して意見を表明するものではない。

連結財務諸表監査における当監査法人の責任は、その他の記載内容を通読し、通読の過程において、その他の記載内容と連結財務諸表又は当監査法人が監査の過程で得た知識との間に重要な相違があるかどうかを検討すること、また、そのような重要な相違以外にその他の記載内容に重要な誤りの兆候があるかどうか注意を払うことにある。

当監査法人は、実施した作業に基づき、その他の記載内容に重要な誤りがあると判断した場合には、その事実を報告することが求められている。

その他の記載内容に関して、当監査法人が報告すべき事項はない。

連結財務諸表に対する経営者並びに監査役及び監査役会の責任

経営者の責任は、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して連結財務諸表を作成し適正に表示することにある。これには、不正又は誤謬による重要な虚偽表示のない連結財務諸表を作成し適正に表示するために経営者が必要と判断した内部統制を整備及び運用することが含まれる。

連結財務諸表を作成するに当たり、経営者は、継続企業的前提に基づき連結財務諸表を作成することが適切であるかどうかを評価し、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に基づいて継続企業に関する事項を開示する必要がある場合には当該事項を開示する責任がある。

監査役及び監査役会の責任は、財務報告プロセスの整備及び運用における取締役の職務の執行を監視することにある。

連結財務諸表監査における監査人の責任

監査人の責任は、監査人が実施した監査に基づいて、全体としての連結財務諸表に不正又は誤謬による重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得て、監査報告書において独立の立場から連結財務諸表に対する意見を表明することにある。虚偽表示は、不正又は誤謬により発生する可能性があり、個別に又は集計すると、連結財務諸表の利用者の意思決定に影響を与えると合理的に見込まれる場合に、重要性があると判断される。

監査人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に従って、監査の過程を通じて、職業的専門家としての判断を行い、職業的懐疑心を保持して以下を実施する。

- ・ 不正又は誤謬による重要な虚偽表示リスクを識別し、評価する。また、重要な虚偽表示リスクに対応した監査手続を立案し、実施する。監査手続の選択及び適用は監査人の判断による。さらに、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手する。
- ・ 連結財務諸表監査の目的は、内部統制の有効性について意見表明するためのものではないが、監査人は、リスク評価の実施に際して、状況に応じた適切な監査手続を立案するために、監査に関連する内部統制を検討する。
- ・ 経営者が採用した会計方針及びその適用方法の適切性、並びに経営者によって行われた会計上の見積りの合理性及び関連する注記事項の妥当性を評価する。
- ・ 経営者が継続企業を前提として連結財務諸表を作成することが適切であるかどうか、また、入手した監査証拠に基づき、継続企業の前提に重要な疑義を生じさせるような事象又は状況に関して重要な不確実性が認められるかどうか結論付ける。継続企業の前提に関する重要な不確実性が認められる場合は、監査報告書において連結財務諸表の注記事項に注意を喚起すること、又は重要な不確実性に関する連結財務諸表の注記事項が適切でない場合は、連結財務諸表に対して除外事項付意見を表明することが求められている。監査人の結論は、監査報告書日までに入手した監査証拠に基づいているが、将来の事象や状況により、企業は継続企業として存続できなくなる可能性がある。
- ・ 連結財務諸表の表示及び注記事項が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠しているかどうかとともに、関連する注記事項を含めた連結財務諸表の表示、構成及び内容、並びに連結財務諸表が基礎となる取引や会計事象を適正に表示しているかどうかを評価する。
- ・ 連結財務諸表に対する意見を表明するために、会社及び連結子会社の財務情報に関する十分かつ適切な監査証拠を入手する。監査人は、連結財務諸表の監査に関する指示、監督及び実施に関して責任がある。監査人は、単独で監査意見に対して責任を負う。

監査人は、監査役及び監査役会に対して、計画した監査の範囲とその実施時期、監査の実施過程で識別した内部統制の重要な不備を含む監査上の重要な発見事項、及び監査の基準で求められているその他の事項について報告を行う。

監査人は、監査役及び監査役会に対して、独立性についての我が国における職業倫理に関する規定を遵守したこと、並びに監査人の独立性に影響を与えると合理的に考えられる事項、及び阻害要因を除去又は軽減するためにセーフガードを講じている場合はその内容について報告を行う。

監査人は、監査役及び監査役会と協議した事項のうち、当連結会計年度の連結財務諸表の監査で特に重要であると判断した事項を監査上の主要な検討事項と決定し、監査報告書において記載する。ただし、法令等により当該事項の公表が禁止されている場合や、極めて限定的ではあるが、監査報告書において報告することにより生じる不利益が公共の利益を上回ると合理的に見込まれるため、監査人が報告すべきでないと判断した場合は、当該事項を記載しない。

< 内部統制監査 >

監査意見

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第2項の規定に基づく監査証明を行うため、株式会社インプレスホールディングスの2023年3月31日現在の内部統制報告書について監査を行った。

当監査法人は、株式会社インプレスホールディングスが2023年3月31日現在の財務報告に係る内部統制は有効であると表示した上記の内部統制報告書が、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の評価の基準に準拠して、財務報告に係る内部統制の評価結果について、全ての重要な点において適正に表示しているものと認める。

監査意見の根拠

当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の監査の基準に準拠して内部統制監査を行った。財務報告に係る内部統制の監査の基準における当監査法人の責任は、「内部統制監査における監査人の責任」に記載されている。当監査法人は、我が国における職業倫理に関する規定に従って、会社及び連結子会社から独立しており、また、監査人としてのその他の倫理上の責任を果たしている。当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

内部統制報告書に対する経営者並びに監査役及び監査役会の責任

経営者の責任は、財務報告に係る内部統制を整備及び運用し、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の評価の基準に準拠して内部統制報告書を作成し適正に表示することにある。

監査役及び監査役会の責任は、財務報告に係る内部統制の整備及び運用状況を監視、検証することにある。

なお、財務報告に係る内部統制により財務報告の虚偽の記載を完全には防止又は発見することができない可能性がある。

内部統制監査における監査人の責任

監査人の責任は、監査人が実施した内部統制監査に基づいて、内部統制報告書に重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得て、内部統制監査報告書において独立の立場から内部統制報告書に対する意見を表明することにある。

監査人は、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の監査の基準に従って、監査の過程を通じて、職業的専門家としての判断を行い、職業的懐疑心を保持して以下を実施する。

- ・内部統制報告書における財務報告に係る内部統制の評価結果について監査証拠を入手するための監査手続を実施する。内部統制監査の監査手続は、監査人の判断により、財務報告の信頼性に及ぼす影響の重要性に基づいて選択及び適用される。
- ・財務報告に係る内部統制の評価範囲、評価手続及び評価結果について経営者が行った記載を含め、全体としての内部統制報告書の表示を検討する。
- ・内部統制報告書における財務報告に係る内部統制の評価結果に関する十分かつ適切な監査証拠を入手する。監査人は、内部統制報告書の監査に関する指示、監督及び実施に関して責任がある。監査人は、単独で監査意見に対して責任を負う。

監査人は、監査役及び監査役会に対して、計画した内部統制監査の範囲とその実施時期、内部統制監査の実施結果、識別した内部統制の開示すべき重要な不備、その是正結果、及び内部統制の監査の基準で求められているその他の事項について報告を行う。

監査人は、監査役及び監査役会に対して、独立性についての我が国における職業倫理に関する規定を遵守したこと、並びに監査人の独立性に影響を与えると合理的に考えられる事項、及び阻害要因を除去又は軽減するためにセーフガードを講じている場合はその内容について報告を行う。

利害関係

会社及び連結子会社と当監査法人又は業務執行社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以 上

-
- (注) 1. 上記の監査報告書の原本は当社(有価証券報告書提出会社)が別途保管しております。
2. X B R L データは監査の対象に含まれておりません。

独立監査人の監査報告書

2023年 6月23日

株式会社インプレスホールディングス
取締役会 御中

EY新日本有限責任監査法人

東京事務所

指定有限責任社員
業務執行社員 公認会計士 本 多 茂 幸

指定有限責任社員
業務執行社員 公認会計士 森 田 祥 且

監査意見

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づく監査証明を行うため、「経理の状況」に掲げられている株式会社インプレスホールディングスの2022年4月1日から2023年3月31日までの第31期事業年度の財務諸表、すなわち、貸借対照表、損益計算書、株主資本等変動計算書、重要な会計方針、その他の注記及び附属明細表について監査を行った。

当監査法人は、上記の財務諸表が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して、株式会社インプレスホールディングスの2023年3月31日現在の財政状態及び同日をもって終了する事業年度の経営成績を、全ての重要な点において適正に表示しているものと認める。

監査意見の根拠

当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して監査を行った。監査の基準における当監査法人の責任は、「財務諸表監査における監査人の責任」に記載されている。当監査法人は、我が国における職業倫理に関する規定に従って、会社から独立しており、また、監査人としてのその他の倫理上の責任を果たしている。当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

監査上の主要な検討事項

監査上の主要な検討事項とは、当事業年度の財務諸表の監査において、監査人が職業的専門家として特に重要であると判断した事項である。監査上の主要な検討事項は、財務諸表全体に対する監査の実施過程及び監査意見の形成において対応した事項であり、当監査法人は、当該事項に対して個別に意見を表明するものではない。

繰延税金資産の回収可能性の検討

【注記事項】（重要な会計上の見積り）及び【注記事項】（税効果会計関係）に記載されているとおり、会社は当事業年度からグループ通算制度へ移行しており、2023年3月31日現在、繰延税金資産12,398千円を計上している。

監査上の主要な検討事項の内容、決定理由及び監査上の対応については、連結財務諸表の監査報告書に記載されている監査上の主要な検討事項（繰延税金資産の回収可能性の検討）と同一内容であるため、記載を省略している。

その他の記載内容

その他の記載内容は、有価証券報告書に含まれる情報のうち、連結財務諸表及び財務諸表並びにこれらの監査報告書以外の情報である。経営者の責任は、その他の記載内容を作成し開示することにある。また、監査役及び監査役会の責任は、その他の記載内容の報告プロセスの整備及び運用における取締役の職務の執行を監視することにある。

当監査法人の財務諸表に対する監査意見の対象にはその他の記載内容は含まれておらず、当監査法人はその他の記載内容に対して意見を表明するものではない。

財務諸表監査における当監査法人の責任は、その他の記載内容を通読し、通読の過程において、その他の記載内容と財務諸表又は当監査法人が監査の過程で得た知識との間に重要な相違があるかどうかを検討すること、また、そのような重要な相違以外にその他の記載内容に重要な誤りの兆候があるかどうか注意を払うことにある。

当監査法人は、実施した作業に基づき、その他の記載内容に重要な誤りがあると判断した場合には、その事実を報告することが求められている。

その他の記載内容に関して、当監査法人が報告すべき事項はない。

財務諸表に対する経営者並びに監査役及び監査役会の責任

経営者の責任は、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して財務諸表を作成し適正に表示することにある。これには、不正又は誤謬による重要な虚偽表示のない財務諸表を作成し適正に表示するために経営者が必要と判断した内部統制を整備及び運用することが含まれる。

財務諸表を作成するに当たり、経営者は、継続企業の前提に基づき財務諸表を作成することが適切であるかどうかを評価し、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に基づいて継続企業に関する事項を開示する必要がある場合には当該事項を開示する責任がある。

監査役及び監査役会の責任は、財務報告プロセスの整備及び運用における取締役の職務の執行を監視することにある。

財務諸表監査における監査人の責任

監査人の責任は、監査人が実施した監査に基づいて、全体としての財務諸表に不正又は誤謬による重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得て、監査報告書において独立の立場から財務諸表に対する意見を表明することにある。虚偽表示は、不正又は誤謬により発生する可能性があり、個別に又は集計すると、財務諸表の利用者の意思決定に影響を与えると合理的に見込まれる場合に、重要性があると判断される。

監査人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に従って、監査の過程を通じて、職業的専門家としての判断を行い、職業的懐疑心を保持して以下を実施する。

- ・ 不正又は誤謬による重要な虚偽表示リスクを識別し、評価する。また、重要な虚偽表示リスクに対応した監査手続を立案し、実施する。監査手続の選択及び適用は監査人の判断による。さらに、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手する。
- ・ 財務諸表監査の目的は、内部統制の有効性について意見表明するためのものではないが、監査人は、リスク評価の実施に際して、状況に応じた適切な監査手続を立案するために、監査に関連する内部統制を検討する。
- ・ 経営者が採用した会計方針及びその適用方法の適切性、並びに経営者によって行われた会計上の見積りの合理性及び関連する注記事項の妥当性を評価する。
- ・ 経営者が継続企業を前提として財務諸表を作成することが適切であるかどうか、また、入手した監査証拠に基づき、継続企業の前提に重要な疑義を生じさせるような事象又は状況に関して重要な不確実性が認められるかどうか結論付ける。継続企業の前提に関する重要な不確実性が認められる場合は、監査報告書において財務諸表の注記事項に注意を喚起すること、又は重要な不確実性に関する財務諸表の注記事項が適切でない場合は、財務諸表に対して除外事項付意見を表明することが求められている。監査人の結論は、監査報告書日までに入手した監査証拠に基づいているが、将来の事象や状況により、企業は継続企業として存続できなくなる可能性がある。
- ・ 財務諸表の表示及び注記事項が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠しているかどうかとともに、関連する注記事項を含めた財務諸表の表示、構成及び内容、並びに財務諸表が基礎となる取引や会計事象を適正に表示しているかどうかを評価する。

監査人は、監査役及び監査役会に対して、計画した監査の範囲とその実施時期、監査の実施過程で識別した内部統制の重要な不備を含む監査上の重要な発見事項、及び監査の基準で求められているその他の事項について報告を行う。

監査人は、監査役及び監査役会に対して、独立性についての我が国における職業倫理に関する規定を遵守したこと、並びに監査人の独立性に影響を与えると合理的に考えられる事項、及び阻害要因を除去又は軽減するためにセーフガードを講じている場合はその内容について報告を行う。

監査人は、監査役及び監査役会と協議した事項のうち、当事業年度の財務諸表の監査で特に重要であると判断した事項を監査上の主要な検討事項と決定し、監査報告書において記載する。ただし、法令等により当該事項の公表が禁止さ

れている場合や、極めて限定的ではあるが、監査報告書において報告することにより生じる不利益が公共の利益を上回ると合理的に見込まれるため、監査人が報告すべきでないとは判断した場合は、当該事項を記載しない。

利害関係

会社と当監査法人又は業務執行社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以 上

-
- (注) 1. 上記の監査報告書の原本は当社(有価証券報告書提出会社)が別途保管しております。
2. X B R L データは監査の対象に含まれておりません。